月下の姫巫女

長沼たまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月下の姫巫女

【Ｎコード】
Ｎ２４９２Ｊ

【作者名】
長沼たまき

【あらすじ】
現代に生きる、歴史の裏に隠された一族の冒険譚。
っぽい恋愛小説みたいな。

プロローグ（前書き）

実は中学生の時に書いたものを少し手直しして投稿しています。
内容は幼稚ですが、せっかくなのでみなさまにも読んでもらおうと
投稿を決めました。
よかったら感想等をいただけたらと思います。
よろしくお願いします。

プロローグ

プロローグ

太古の昔より、この国に跋扈する数多の悪鬼《妖の者》と戦う三つの一族がいた。

ひとつは、＞姫巫女＜一族。
彼女らは、三つの一族の頂点に立ち、妖の者を無へと帰し封印する力を持つ、国を守る為に生きる、誇り高き一族である。
ひとつは、＞護り手＜一族。
彼らは、姫巫女の側に常に仕え、守り、付き従う。姫巫女の為に生きる事を許された、誇り高き一族である。
姫巫女と護り手の二つの一族は、その体のどこかに印を持っていた。
それは、その特殊能力を使う際に浮かび上がる。それがその一族のたった一つの証であり、誇りであった。
そして、＞防人＜一族。
彼らは、姫巫女と護り手をサポートし、妖の者と戦う。彼らもまた、姫巫女の為に生きる事を許された誇り高き一族である。

この国は、幾度となく彼らに救われてきた。
人知れず、長き歴史の影に住まう一族。
表舞台に立つことなく、影から影へとその存在は葬られていく。
大きな厄災の裏には、必ずこの一族等の戦いがあった。
長い年月を経て、今では姫巫女の側に仕える防人の数は減り、全国にその末裔が力を持たずに散り散りになってしまっていた。

今もなお、姫巫女に仕える防人一族はたったの三人。

これは平成の姫巫女の物語……。

第1章　仲間？

1

「水樹様、おはようございます」
入学式の朝、真新しい高校の制服に身を包んだ自分の姿を鏡に映した瞬間、水樹は名前を呼ばれ振り返る。襖越しに聞こえるその声の主は、自分が生まれた頃から常に側にいた彼の声であった。水樹からは決して見えないのに、彼はいつも襖の前で正座をして名前を呼ぶ。
「おはよう、右京。すぐに行くから」
水樹は、廊下にいる彼――――右京にそう告げる。
「はい」
右京がそう返事をし、廊下を歩いていく音が聞こえると、水樹は、鏡の前でもう一度自分の姿を確認した。
そこには、ブレザー姿の自分が写っている。
中学校の制服がセーラー服だった水樹は、鏡に映る自分がなんだか大人びて見えた。くくっていた髪をほどき、気分を変えてみる。
「よし」
満足したような笑みを浮かべて頷き、水樹は鞄を持って襖を開ける。
目の前に広がる広い庭に、桜の花びらが舞っているのが見えた。綺麗に手入れされた立派な日本庭園に桜がよく映える。柔らかな風が桜を揺らし、その庭園には薄紅色の雪が舞っているように見えた。舞い上がるように吹き上がった風に桜が揺れ、５００坪は有にある広い屋敷が、薄紅色に染まる。
この辺り一帯の地主であるこの屋敷の表札には、「澤渡」と書かれていた。
水樹は、この澤渡家のたった一人の跡取りであった。
それは、同時にこの国の運命を担うことを意味する。

「いただきます」
座敷机についた水樹は、手を合わせて朝食を口に運び始める。唐木を使用した贅沢な座敷机に、水樹と右京の二人が向かいあっていた。
五年前に母親が病気で亡くなり、それと同時に父親は再婚する為に澤渡を去った。それ以来、この広い屋敷には水樹と右京の二人きりである。
「後、３０分もしたら和彦殿とのぞみ殿がこちらにいらっしゃいます」
「うん」
水樹は、チラリと時計を見る。
「今日、ようやく会えるのね。達弥先輩の弟に」
「はい。達弥殿が事故で足に怪我をされた時は、どうしたものかと思いましたが……まさか防人の能力を持った双子の弟がいるとは知りませんでしたよ。２、３度お会いしましたが、少し人見知りかもしれません。名前は確か……、坂上……竜也殿です」
「よりによって、超進学校にいるなんて、とばっちりだわ」
朝食の魚に悪戦苦闘しながら、水樹は言う。
水樹が今日から通う高校は、府下でもトップレベルにある超進学校であった。有名国立大学への進学率も高く、それを謳い文句にしている。
「澤渡は文武両道でないといけません。その名に恥じぬそれ相応の学校だと思いますが」
右京は、ジロリと水樹を見つめる。
「はぁ、まさかこんな入学ギリギリになって高校が変わるなんて……」
「防人が姫巫女と同じ高校へ行かなくてどうするのですか」
「でも、入学が決まってた学校をやめてさらにランク上の学校に無理矢理入学するなんて……」水樹は、溜め息をつきながら言った。
防人一族である和彦とのぞみは、幼稚園の頃から水樹と一緒であ

る。もう1人の防人、達弥は、早生まれのせいで1つ上の学年になってしまった。しかし、4人は常に一緒にいた。何をするにも一緒で、まるで兄弟のように育ってきたのだ。
　達弥が事故で足を悪くしたのは、つい先日のことである。終業式の学校の帰り道に、居眠り運転していた車にはねられたのだ。命には別状なかったが、運悪く杖がないと歩けない体になってしまった。防人としての生活は絶望とされ、防人の数が減る覚悟をしていた。
　しかし、坂上家から衝撃告白を受けることになる。
　それが竜也の存在であった。
　入学まで後2週間という時に、竜也のいる学校へ入学変更することになった。こんな反則技が使えるのも、姫巫女一族ならではである。国家的機密であるこの一族は、ある程度の根回しが国を通して可能となる。
防人と姫巫女は、同じ学校に通わなくては守る事ができない。竜也がその学校にいるのなら、水樹達もそこへ入学することが必然的に決まってくる。
そんなわけで、この2週間は、バタバタと忙しく、竜也に会うのは入学後に先送りされていたのだ。
「竜也殿は2年A組だそうです」
「えええええ！　A組！？　あそこってA組から順に成績で決められるんでしょ？」
「水樹様も間違いなくA組でしょう。あの2人は……まぁ、水樹様と同じクラスになるように言ってありますので……」
　水樹から目を逸らしながら、右京が言った。
水樹はそこそこの学力があったが、防人の2人は体を動かすのが得意な分、成績の方はからっきしダメだった。形式的な編入テストを受けた時も、開始早々、机につっぷして絶望をかみ締めていた。
「2人が水樹と同じクラスになる」という小さなお願いに、右京は、おそらく、例の大人の事情を使ったに違いない。
「あ、入学式が終わりましたら空手部の道場へ行ってください」

水樹の思考を読んでか、右京はあわてて話題を変える。
「空手部？」
「はい。竜也殿は空手部に在籍しているそうです。今日を最後に退部するそうですが、彼は空手部の戦力らしく、少しもめているそうで……」
「へぇ……」
「彼こそ、まさに文武両道ですね。坂上家がその存在を隠していたのは気になりますが、防人としては達弥殿よりも優秀かもしれません」
「右京」水樹は、ジロリと睨みながらそう言った。
「失言でした」
右京は、大げさな身振りをして水樹に謝る。
「なんか、そんだけ成績優秀だとひ弱なイメージがあるけど、空手やってるなんて驚き」
「しかも有段者です」
「私とは……ずいぶん違うね。なんでも出来て」
水樹は、持っていたお茶碗を静かに食卓へと置いた。そして、そのままお箸も戻して溜め息をつく。
「私は守ってもらう資格なんてないのに」
小さくそう呟くと、そのまま下を向いて黙ってしまった。

第1章　仲間？

2

長い入学式の後、教室で簡単なホームルームを終えようやく3人は長い拘束から自由になった。

3人は、無事……であるかどうかはわからないが、そろってA組の教室にいた。席順は特に決められていなかったので、教室の後ろで仲良く3人かたまって座っていた。

「ああ、あかん。何度見ても全員頭よさそうに見えるわ」

和彦は、帰り支度をしているクラスメイトの顔を確認しながらそう言った。劣等感を持っている人間特有の、少し腐ったような目をしている。

「当然や……みんな実力でこのクラスにいてはるんやから……」

のぞみは、肩を落としながら言う。

「2人とも考えすぎよ。ここにいるってことは、2人が頑張ったからじゃない」

水樹は、2人の顔を交互に見ながら慰める。

「頑張ったんは右京さんちゃうん？　こないなアホ2人組をこの学校に入れよったんやで」

「そんな事は……」

水樹は今朝の右京の話を思い出し、言葉を詰まらせた。

あんな話聞かなきゃよかったなぁ……。実力で入ったかもしれないのに、これじゃあ、私すごく嫌な子みたい……。

水樹は、溜め息をついて左手を頬に添えた。

「せや、空手部に行かへん？　竜也先輩見に行こか」

のぞみは諦めがついたのか、急に明るい顔になって和彦の背中を叩いた。和彦は、うなだれていたせいでバランスを崩し、前のめりになった。

「せやな。竜也先輩がどないな奴か見に行こか。案外空手部はいっとってもメガネ君かもしれへんでぇ！　戦力っつっても人数不足による戦力かもしれへんしなぁ！」
和彦は、まだ見ぬ竜也に一縷の希望を見出し、高々と笑いながら鞄を持って教室を出て行った。残っていたクラスメイトが、和彦をはじめ一緒にいた2人に視線を向ける。水樹は顔を赤くし、のぞみは和彦を罵倒しながら追いかけていった。

体育館の脇を通り、奥にある武道場へと3人は急いだ。グラウンドでは、野球部が練習をしているのが見える。白いユニフォームが太陽に反射して、少し眩しい。
水樹は目を細めてそれを見ると、前方の和彦に目を移した。張り切っている和彦は、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて歩いていた。どうやら、竜也の勝手な想像図が和彦の中で出来上がっているようである。
「達弥先輩の双子の弟やのに、変な想像しんときや」
のぞみは、ニヤついている和彦を肘でつつきながら言った。
「せやかて、今まで達弥先輩が弟のことを話さんかったのはなぜやと思う？」
和彦は、自信ありげに口の端をあげると、2人に向かってこう言い放った。
「自分とは違う、ひ弱な弟を俺らに見せたくなかったんや！」
2人は、和彦のあまりにも無茶な発言に、開いた口がふさがらなかった。
中肉中背の和彦とは違い、達弥は格闘家のような体格をしていた。背も１８０センチと高く、筋肉質であった。それだけに、事故で足が不自由になったのが悔やまれる。ほぼ自分達と変わらぬ誕生日であったが、とても頼りにできる兄貴分だったのだ。特に和彦は達弥になついていたので、達弥のかわりになる弟のことが気に食わないのだろう。

まだ見ぬ竜也を毛嫌いすることで、自分の中の行き場のない喪失感や怒りを発散しているのかもしれない。
「あれ、なんか入り口に人がいる」
水樹は、前方の武道場の入り口を指差して言った。
「ほんまや。どないしたんやろか」
見ると、武道場の入り口に人だかりができていた。その中の全員がジャージ姿やユニフォームを着ている。部活の最中に抜け出して、武道場までやってきたのだろう。野球部なんて、すぐそこのグラウンドで練習しているのに、抜け出してくるとはいい度胸である。
「すみません、どうかしはったんですか？」
のぞみは、一番後ろにいた野球部のユニフォーム姿の生徒に聞いた。
「ああ、坂上が田丸先輩とやるらしいで」
3人は、ドキンと胸が高鳴った。坂上の名が出てきたからである。予期しなかったことに、一瞬動きが止まる。
「田丸先輩？　やるらしいって何を？」
「田丸先輩は空手部の主将や。なんやお前ら、新入生か？」
野球部員は、和彦の顔を見ながら言った。
「せや、よろしゅうな、先輩」和彦は、調子よく野球部員の肩を叩きながら言った。「んで、やるって？」
「試合や、試合。坂上が空手部やめるってのでずっともめててんけど、ついに田丸先輩が怒って試合しろって言い出してん」
和彦の軽い態度を気にもせず、野球部員は親切にも教えてくれた。
2週間前、竜也が突然退部届けを出したのが事のはじまりだと言う。おそらく、達弥が怪我をして竜也に防人抜擢のお声がかかり、その後すぐに竜也は空手部の退部届けを出したのであろう。しかし、戦力として試合に出ていた竜也を手放したくない田丸は、なんとかして残留してもらおうと、竜也に説得を試みた。だが、竜也は首を横に振るばかりで、練習にも出てこなくなった。田丸は、そんな竜也を引きずるようにして道場へ連れ、今まさに試合を申し込んだの

である。
３人は、野球部員から背景を聞くと、人の合間を縫って入り口までたどり着いた。
壁を囲むように、白い道着を来た空手部員が囲んでいる。その中央に、立っているのが二人。緊迫した空気が、道場の中に漂っていた。それは、この道場を覗いている見物人にも伝染している。
こちらを向いている人物は、軽く腰を落とし、左手を前にして構えている。短くスポーツ刈りの大男だ。一方、入り口を背にして立っている人物は、和彦と同じような中肉中背である。姿勢よく背筋を伸ばして立っている姿は、堂々としていた。
「あの暑苦しそうなんが、田丸先輩やんな」
のぞみは、３人にかろうじて聞こえるような声で言った。
「あのあっついのが竜也先輩やったら、俺、中間テスト学年１位になるように猛勉強したるわ」
和彦は、クックックと笑いながら言った。そんな和彦を、水樹は頬をふくらませて睨みつける。
「先輩、覚悟はええですか？」
後ろを向いた人物が、口を開いた。よく通る、少しハスキィな声であった。発言から察するに、どうやらこちらが竜也のようである。
右に重心を移動させながら、腰の帯に両手の親指を挟み込んで、竜也が田丸に向かって言った。バカにしているような口調だ。
「ほんまにええんですね？」
「……」
田丸は答えない。
「俺が勝ったら、２度とここには戻ってきません」
竜也の声が少し低くなる。田丸の指がピクッと動いた。
「お前が負けたら、空手部に残れ」
田丸は、そう言うと足を踏み出した。それと同時に腰を捻り、正拳を繰り出してくる。
重い一撃が、竜也の鼻先を紙一重で通り過ぎた。左足を一歩引いて

右足を軸にし、竜也は正拳突きを、円を描くように避けた。
それを追いかけて、田丸は右手をひきつつ右足を竜也の延髄めがけて蹴りを打ち込んだ。竜也は左腕でそれを受けると、同じように田丸の延髄へと右足を繰り出した。あまりの速さに、田丸はそれをよけることが出来なかった。
見物人は、息を呑んだ。田丸も負ける覚悟をした。
しかし、その蹴りは当たらなかった。田丸の鼻先を掠めただけだったのだ。
「ぐ……え……」
空気が搾り出されたような、苦しそうな声がふいに聞こえる。
「あっ……」
その場にいる全員が思わず声を発した。
竜也の左足の踵が、田丸の鳩尾に埋まっていた。がら空きの鳩尾に蹴りをくらい、田丸はたまらずに息を漏らしたのだった。そして、膝から崩れ落ちた。観客は「うおぉお」とか「すげぇ」とか叫んで興奮している。
「今、どうなったの？」
歓声の中、水樹は隣にいる和彦に聞いた。右足を蹴り上げたのはわかる。しかし、竜也は左足で田丸の鳩尾に蹴りこんでいた。水樹は、何が起こったのかわからなかった。
「あんな、はじめの右足の蹴りは、わざと空振りしたんや。そんで、その遠心力を利用して素早くまわりよってな、そのまま回転して左足を鳩尾にどーんと」
和彦は、大げさに手を広げながら言う。
「空手のことはようわからんから、あれがなんちゅー技なんかは知らん」
「っていうか、勝負つくの早すぎやろ。田丸先輩は仮にも空手部の主将なんやろ？　それを、こないな短い文章でやられて……まぁ……」
のぞみは、訝しげな顔で崩れ落ちた田丸を見ながら言った。

「防人の……力……」
水樹は、竜也を見つめながらそうつぶやいた。
「まぁ、あれくらいやったら防人の力とはちゃうと思うで。仮につこてたとしても、一般人にそんな……本気になるのもなぁ……」
和彦は、腕を組んで考え込んだ。
姫巫女を守る2つの一族は、通常の人間よりもすぐれた運動神経と特殊能力が備わっていた。もちろん、人に在らざる者との戦いにおいてしかその能力は使わない。人よりも早く走ったり、高く飛んだりすると、目立ってしまう。好奇の対象となり、正体を暴こうとする輩も出てくる。側近や防人は、一般人を装って生活をすることが義務づけられてきた。
「一般より突出しとる能力に、頭脳もついてたらよかってんけどなぁ」
和彦は、遠い目をしてそう言った。
「さ……坂上ィイイ」
田丸が、鳩尾を左手で押さえながら起き上がった。片膝をついて、空いた方の手を宙に伸ばして竜也を掴もうとしている。
「田丸先輩、ゾンビみたいやで、見てみぃ水樹」
和彦は、笑いをこらえながら、声のトーンを落として水樹に耳打ちした。
「あんたねぇ」それを聞いたのぞみが、和彦を嗜める。
「ふざけてる場合ちゃうやろ」
竜也は、半身で田丸を見下ろしている。それを見た全員は、一瞬にして凍りついた。
無表情に田丸をみる竜也の目は、全く温度を感じられなかったのだ。水樹は、その冷たい目に一瞬ゾクリとする。達弥もするどい目をしていたが、竜也はまた少し違った鋭さがその瞳にあった。二卵性の双子なのだろうか。竜也と達弥は全く似ていなかった。
「寝てた方がよかったんちゃいますか」
竜也は、軽く舌打ちすると、田丸が立ち上がろうと体重をかけて

いる右足を確認する。そして、思い切り右足を踏み込んで、腰を回転させる。竜也の左足は、風をきって田丸の右足の太腿を強打した。
再度、田丸が体制を崩してその場に倒れる。竜也は、その上に素早く乗ってマウントポジションをとる。道着の襟を掴み、手を交差させて首を絞める。
「田丸先輩、もう、起き上がらんとってくれませんか？」
グイッと両手に力を込めた瞬間、田丸の意識はなくなった。
武道場の中の時間が止まっていた。誰もが何も言えず、微動だにできなかった。
「……というわけで、俺はこれで退部や。田丸先輩が起きたらよろしく」
竜也がそう言うと、それを合図に周りで見ていた空手部員が一斉に田丸に駆け寄った。入り口にいた野次馬も、ざわざわと騒ぎ出す。
そして、竜也は武道場の中にある更衣室へと入っていった。
武道場内にある更衣室の扉が閉まると同時に、水樹は足の力が抜けてフラフラとその場にへたりこむ。
「ちょお、水樹！」
和彦は、水樹の腕を掴むと、そのまま引き上げた。そして、無理矢理歩かせて人の輪から遠い場所へ連れて行った。
「あれって、空手やなくて柔道の技なんちゃうの？」
のぞみは、ホームルームでもらったプリントで水樹を扇ぎながら言った。
「せやなぁ」
和彦は、腕を組んで膝を折って体重を後ろにかけた。倒れそうになる寸前で腹筋を使って真っ直ぐの姿勢に戻し、また体重を後ろにかける。それを何度も繰り返しながら「うーん」と唸っていた。
「でも、竜也先輩強いねぇ」
「アホ、防人やで。それくらい強ないとあかんやろ」和彦は、腰に手を当てて言う。
「せやけどなぁ、田丸先輩落とすことなかったんちゃうか？　ひど

いやっちゃで」
「ほう」
和彦の背後で声がする。
「竜也先輩……着替え早いっすね」
笑顔を引きつらせて、和彦は言った。右目が少し痙攣している。
「とにかく、これで俺は空手部を退部や。後は防人としての仕事をする」
竜也は、腕を組んで3人を見下ろした。身長１７５センチの和彦よりも若干竜也は高かった。おそらく達弥と同じく１８０センチ前後なのだろう。
「あの、竜也先輩……」
水樹は、立ち上がり、少々人相が悪い竜也に物怖じせずに一歩前へ出てそう言った。しかし、竜也は水樹を見て顔をしかめる。
「お前達3人のことは聞いてる。自己紹介は不要や。澤渡水樹、宮下和彦、前田のぞみ」
竜也は、3人の顔を順に見ながらそう言った。
「でも……」
「水樹、俺は防人として姫巫女であるお前を守る仕事はこなすつもりや。せやけどな、お前達と馴れ合う気はない」竜也は、水樹だけをジッと見ながら言い放つ。「俺は達弥と同じ前衛型や。何かあったら、俺が前線に出て戦う。それだけや」
くるりと背を向けて、竜也は校舎へと歩き始めた。
「ちょ……ちょお待ち！」
のぞみは、ハッと我に返って竜也を呼び止めた。あまりにも勝手な言い分の竜也に、残りの2人は呆然としていた。
「ちょお、勝手過ぎるんちゃいます？　達弥先輩は、1つ学年は違(ちご)ても私達と常に一緒に行動してくれとった！　防人は協力しあうべきやろ？」
竜也は、足を止めて振り返った。のぞみをギロリと睨みつけると、続いて和彦へと視線を向けた。そして、最後に水樹へと視線を動か

す。
「達弥の事故さえなかったら、俺はお前らと会うこともなかったんや。達弥とお前らが時間をかけて作り上げたチームワークを、突然俺にカバーしろって言っても無理や」
「それなら、今度は新しいチームワークを作っていくべきやろ！」
のぞみは、竜也を睨みつけた。
「竜也先輩、右京が裏門で待ってます」
水樹は、竜也をまっすぐ見て言う。しかし、竜也は水樹と目を合わせずに舌打ちして空を見上げた。
「俺は、自分の単車で付いてくからええ」そう言って、竜也は、裏門へと歩いていった。

第1章　仲間？

3

「なんやの！？　あいつ！！」
のぞみは、我慢ができないというように頭を掻き毟りながら言った。
車の中、和彦とのぞみの2人は口々に竜也の態度を右京に報告していた。怒りのあまり、2人はどんどん脚色していき、竜也の印象は悪くなる一方であった。水樹がどんなにフォローしても、2人が口々にそれをつぶしていってしまう。
右京は、その報告を聞いて「うーん」と唸った。
信号の下の右折ランプが緑色に光ったので、右京はハンドルを右にきる。車は交差点を右折してそのまま滑り出した。
竜也と学校で合流した後、一緒に昼食を食べに向かう予定であった。しかし、竜也は自分のバイクで行くと主張し、この車には乗ってくれなかった。
仕方がないので、昼食を予約してある場所を伝え、別々に向かうことになったのだ。
確かに、後ろに3人座ることになるので、少し窮屈ではあったが、達弥がいた頃はそれでも皆で車に乗っていた。体が大きな達弥が助手席に乗り、残りの3人が後ろに座っていた。角を曲がる度に3人の肩がぶつかり、おしくらまんじゅうをしているようで楽しかった。
しかし、達弥が防人を引退してからは、後部座席は広い空間になってしまっていた。
「あんなんやったら、俺らうまくやっていけるか不安やで」
和彦は、窓の外を見ながらそう言った。水樹は、その言葉に少し胸が痛んだ。
「……そうですか……。以前お会いした印象では、そこまで他人を

排除するような人には見えませんでしたが……」
「へぇ、なんかあったんやろか？」
「水樹様はどうですか？」
「え？」
突然自分に話を振られ、水樹は戸惑う。
「ちょっと冷たいけど……悪い人じゃなさそうだけどな」
「ほんまかいな！」
和彦は、飛び起きて運転席と助手席の間から顔を出す。
「水樹、別に達弥先輩の弟かてフォローせんでええんやで！」
「うん……でも……」
水樹は、考え込むように左手を顎にあてた。そのまま、自分の膝をジッと見ながら動かなくなってしまう。
本当に悪い人じゃないと思うんだけどな……。
水樹は、今日の事を思い出していた。
確かに、竜也の態度は冷たかった。言い方もキツく、水樹は何度も胸をえぐられそうになった。強いていえば勘のようなものだが、水樹には竜也がそんなにひどい人間には見えなかったのだ。
「今まで普通に生きてきたのに、突然こっちの世界に引きずり込まれたんだもの。少し、混乱しているのよ。きっと」
水樹は、窓の外に視線を移す。昼間だというのに、車の交通量が多い。どこもかしこも同じような車が走っている。
「そういえば、和彦」
「ん？」
「竜也先輩、メガネ君じゃなかったね」
水樹は、クスクス笑いながら和彦に言った。
「ほんまや！　俺よりも背ェ高かったし、なんかむかつくなぁ！」
「双子なのに、達弥先輩と全然似てへんかったなぁ。なーんか、目つきは悪かったけど優男って感じ」
「でも、強かったよ」
「あれは反則や。あんなん、防人の力ちょいっと使ったんや。素人

に本気になりよって」
「さっき自分で違うっていってたじゃないの」
水樹は、竜也のフォローに回る。
「それに、空手やのうて柔道技で最後きめよった！」
「勝てばいいってもんやったんかしら」のぞみは、腕を組んで鼻息を漏らす。
「あんなん、ちょっとしたパフォーマンスやないか。主将より強い人間がいるのに、空手部が退部を認めるわけあるかい。あいつアホや」
和彦は、プッと噴出しながら言った。
「単なる負けず嫌いかもしれへんで。あの人そんな感じしぃひん？」
ニヤっと笑いながら、のぞみは和彦の肩を叩いた。和彦も、それに答えてニヤリと悪い笑い方をした。
「せやな。子供みたいなやっちゃ」
ニヤニヤと笑いあう二人を見て、水樹は溜め息をついた。
世界を守る為に戦う防人が、こんなところで揚げ足取りをはじめてしまったのだ。本来なら協力し合い、共に手をとって戦わなくてはいけないのだが、竜也がこちらになじむまではそれも無理そうである。
「竜也先輩のバイク見えへんなぁ」和彦は、後ろを振り返りながら言った。「来る気あるんかいな」
「ちょっと前にバックミラから消えました。どこか違う道を通ってるのか、信号で止まったかでしょう。場所はお伝えしてあるので、大丈夫ですよ」
右京は、バックミラで後方を確認しながら言った。
「それならええけど」
「私がロビーで竜也殿を待っているので、水樹様達は先に入っていてください」
「うん……」
水樹は、少し不満そうに答える。その様子を見て、右京は肩を竦

めた。

第1章　仲間？

4

「お待たせしました」
ホテルのロビーで合流した右京と竜也は、3人が待つ部屋へと入っていった。
「遅いで」のぞみが入ってきた2人を見るなりそう言った。
右京が予約してあったのは、市内の有名ホテルにある日本料理の料亭であった。
普段は、企業の偉いさん方が使用するような個室に、高校生が3人揃っている。それにあらたに1人制服が加わって4人になる。1人だけスーツの右京は、お店の人から見れば引率の先生に見えたことだろう。
しばらくして、料理を持ってきた仲居さんが「失礼します」と襖を開け、その光景に一瞬驚いた顔をしたのをのぞみは見逃さなかった。
仲居さんが料理を運んでいる間、5人は沈黙していた。和彦はずっと竜也を睨みつけている。それを知っていてか、竜也は机に肘を付いて壁を見ている。のぞみは、そんな2人を見ながら溜め息をついた。はじめは、のぞみも竜也の態度が頭にきたが、自分より熱くなっている人間を見ると、その怒りはいつの間にか冷めてしまい、今はどうでもよくなっていた。
全員に料理が行き渡り、仲居さんがその部屋の襖をキッチリ閉めた。そしてこの部屋の空気が変わる。水樹が右京の方へ顔を向けると、右京は頷いてそれに答えた。
「知っての通り、達弥殿が足に怪我を負い、その弟である竜也殿が新たに防人に加わりました。皆、簡単に自己紹介を致しましょう」
右京は、ゆっくりと皆の顔を見ながらそう言った。

「それでは、水樹様……」
「澤渡の当主、澤渡水樹です」
水樹が会釈をすると、全員がそれに習って頭を下げる。そして、次の言葉を待ったが、それが全てであったらしく、一向に話そうとしないので、右京が次に口を開いた。
「小早川右京だ。護り手として澤渡家に仕え、姫巫女である水樹様をお守りしている。基本的に、水樹様が学校にいる時意外は、常に側にいる。何かあれば私に連絡を頂きたい」
右京は竜也を見ながら言ったが、竜也は右京をジッと見つめながら微動だにしなかった。
「前田のぞみです。戦闘タイプの防人で、前田家独自の剣術を使った接近戦が得意です。宜しくお願いします」
のぞみは、棒読みでそう言うと軽く会釈し、和彦の腕を肘でつついた。
「宮下和彦……。俺の仕事は、妖の者から受けた傷の治癒。毒気を抜く事」
竜也とは目を合わせずに、和彦は言った。しかし、竜也は和彦のことをジッと見ていた。
「坂上竜也や。怪我をした達弥に変わって、俺が防人になることになった。達弥と同じく空手を基本とした接近戦をベースに戦う」竜也は、水樹を見ながら言う。「それよりも、俺に話しておかないとあかんことがあるんやないの？　なぁ、水樹」
「竜也殿、水樹様に対する口の利き方には気を付けていただきたい」
右京は、竜也を睨みながら言った。それに負けじと竜也も右京のことをジッと見る。
「いいの、右京。竜也先輩の言うとおり、私は言わなければならないことがあるわ」
水樹は、竜也をジッと見ると、軽く頭を下げた。
「姫巫女は、代々その体のどこかに紋章を持って生まれます。そして、その力を発動させる時、紋章が浮かび上がるのです」

竜也は水樹から目をそらさずに黙って聞いている。残りの3人は、2人を心配そうに見ていた。
「……私は、その力を持たずに生まれてきました。力が発動しないのです。紋章もありません。いつか、覚醒すると母は言ってくれました。でも、いまだに……」
水樹は、自分の手をギュッと握り締める。
「妖の者との戦いは、基本的に私達で行う。万が一に備えて私は水樹様のお側にいることが多い。実質、防人の3人で戦ってもらうことになるだろう」
「3人っていうか、俺とのぞみの2人やろ」竜也は、嘲笑まじりに言った。
「てめぇ」和彦が、立ち上げって竜也を睨みつけた。
「落ち着いてください」右京は、和彦を見上げて言った。「竜也殿も、余計なことは言わないで下さい」そして、竜也を睨みつける。
和彦は、ムスッとふくれて座りなおすと、そっぽ向いてしまった。
「とにかく、学校にいる間はあなた方防人3人に水樹様をお預けしているのです。仲間割れしてどうするのですか……。妖の者の活動は最近大人しいですが、いつ活発になるかわかりませんよ？　その時までにきちんと仲良くできるようにしておいてください」
右京は、まるで幼稚園児に言い聞かせるかのように和彦と竜也に言った。そして軽く溜め息をつく。
「右京さん、未来視（みきみ）でわかってるんちゃいますのん？」
竜也は、和彦の鋭い視線を感じながらも、気がついていないフリをして右京を見る。
未来視とは、護り手に備わった能力で姫巫女に関する未来を垣間見ることができる力のことであった。
自在にそれを操ることは難しく、お告げの様に急に頭の中にイメージとして浮かぶことが多い。
歴代の側近の中でもこの能力に長けている者は少なく、右京も、それを自在に操ることはできず、ふとした瞬間に、近い未来の映像

が頭に急に入り込んでくるだけであった。
竜也の言う通り、ここ最近の右京の未来視に、大量の妖の者の出現があった。数十年に一度、妖の者の動きが活性化する年があるという。おそらく、今年がその年なのだろう。しかし、一番必要な姫巫女の力が覚醒しなくては、苦戦を強いられることになる。
「……」
右京は、黙って竜也を見た。竜也も、それに答えて右京を見る。
「私には未来視を自在に操る能力はない」
重い空気が肩にのしかかる。全員が急に無言になり、視線を泳がせた。
「はぁ……」のぞみが、机につっぷして溜め息をついた。「もう、本当に。仲良くやろうや先輩」
「……」
竜也は黙ったまま視線をみんなからはずしていた。
「いきなりこっちの世界に引きずりこまれて戸惑うのはわかる。せやけど、仲間割れしてちゃあかんで」
「ほんまに……。これからよろしゅうって時にこれじゃあ、無理矢理進学校に入学させられた俺ら……浮かばれへんで」
和彦も同じように机につっぷしながら言う。
「……せやな」竜也は、料理に視線を向けながら言った。
「え？」
和彦とのぞみは、竜也の言葉に同時に反応する。水樹も視線を竜也に向ける。
「努力は認めてやるよ」
クッとこらえていた笑いが漏れたような声を出しながら、竜也は言った。
和彦とのぞみは、そんな竜也を不思議そうに見ながら顔をあわせた。
「さて、自己紹介もすんだし、食べよう」水樹は、両手を合わせて言った。「いただきまーす」

無理に明るく振舞おうと、ぎこちない動作でお箸を持つと、水樹は目の前の料理を食べはじめた。右京も、それに倣って料理に手をつけはじめる。

不満が残る顔をしながら、残りの3人も料理を楽しむことにした。

第1章　仲間？

5

「竜也殿」
竜也がバイクに足をかけようと地面を蹴り上げた瞬間、後ろから右京の呼ぶ声がした。
食事が終わってから、5人は解散した。竜也をのぞいた全員が、右京の車に乗って自宅へと帰る。しかし、竜也だけが自分のバイクであった。少し竜也に話があった右京は、他の3人を車に乗せると、水樹の許しを得て竜也のところへと走ってきたのだ。
「そんなにかしこまらんくても、坂上でも竜也でも呼び捨てにしてええで、右京さん。俺のこと、まだ認めてへんのやろ。俺と2人の時ぐらい気抜いたら？」
竜也は足をおろしながら振り返り、右京を見ながらそう言った。
事実、右京は竜也の事をまだ防人として認めていなかった。坂上家がその存在を隠していた事が、一番の不安材料であった。もし、達弥が怪我をして防人としての生命をたたれなかったら、竜也の存在は決して明らかにされることはなかっただろう。
15年経て、突然知らされた竜也の存在を、まだ受け入れることができていなかったのだ。竜也も、それを感じ取っていた。
「坂上」
人が周りにいない事を確認すると、右京は竜也に少し近寄った。
「お前、何を視た……未来視の……」
そう言って右京は言葉を切った。自分から視線をはずさない右京を見ながら、竜也は黙る。そして、口の端を上げて笑った。
「多分、右京さんが視たのと一緒のことや」ポケットに手を入れながら竜也が言う。「妖の者の」そこで少し声のトーンを下げる。
「わかった」竜也の言葉を遮って、右京が言った。

「近いうちに妖の者は動き出すやろな」
竜也は、バイクにもたれかかって言った。
「かつてない戦いになるかもしれん。全国に散った防人一族で、力がある者がいたら協力を要請しなければならないかもしれない」
右京も、竜也を見つめながらポケットに手を入れる。竜也は、右京から視線をはずし、バイクに目を落とす。
「あてはあるんか？」
「……かつての防人一族のことは把握している。しかし、能力を持って子が産まれた報告はない」
右京は、小さく溜め息をついた。
「水樹様の覚醒が唯一の希望だ」
「水樹は必ず覚醒するで」竜也は、ニヤリと笑いながら言った。「右京さんは、どない思ってますのん？」
「私は……」右京はそこで言葉を詰まらせる。
「視えへんのか？　水樹が覚醒した姿」
「坂上、お前まさか……さっきの事といい……視えるのか？」
目を見開いて右京が竜也を見た。それに答えるべく、竜也は首を竦めた。
「まさか、俺には未来視の能力なんてない」
「なら、なぜそんな確信を？」
右京は、竜也を見つめる。竜也は、黙ってそれに答えた。２人は視線を外すことなく、その場に立ち尽くした。
「坂上」耐え切れず、右京は竜也の名を呼んだ。
「一番不安なんは水樹やろ？　俺達があいつの事信じてやらなくてどないするんや」
竜也は、押し殺した声で右京に向かって言う。
「坂上……お前……」
突っぱねたような態度をとっている割に、水樹の事を考えていた竜也に、右京は驚きを隠すことができなかった。水樹の為にだけに生きることを許された右京でさえ、水樹の覚醒を半ば諦めかけてい

たのだ。
「まぁ、俺は覚醒してもらわないと困るから、そう思てるだけやけど」
竜也は、頭の後ろで手を組むとニヤリと笑いながら右京に言う。
「俺達は、妖の者に深手を負わせることだけしかできひん。完全にこの世から消し去るには水樹の力がいる。一時的に撤退させても、また復活したら俺達のやってることに終わりはない」
そう言って竜也はバイクに足をかけた。ハンドルにぶら下がっていたヘルメットをかぶると、右京へ顔を向けた。
「早よ行ってやれや。みんなまってるやろ」竜也は、バイクのエンジンをかけながら言った。
「坂上！」
「俺は、達弥とはちゃう。俺は俺のやり方で水樹をサポートする。これ以上話すことはない。もう行くで」
「勝手なことはするなよ」
「わかってる。ほなな」
竜也は、そう言ってその場を去った。残された右京は深い溜め息をつくと、3人が待つ車の方へと走っていった。
「竜也先輩と何を話していたの？」
車に戻った右京に、水樹が言った。エンジンをかけながら、右京は水樹に顔を向ける。
「なんでもありませんよ。ただ、今日の態度を嗜めただけです」
「ちゃんとビシッと言ってくれたん？　右京さん」
和彦は、座席の間に乗り出して右京に言った。心なしか目が輝いている。
「私の言うことを聞いてくれればいいのですがね」右京は、苦笑いしながら答えた。

6

「おい、坂上、なぜや、どうしてなんや。それだけの強さを持ちながら、なぜお前は空手部をやめる言ぅんや」
和彦の予想通り、次の日、竜也は田丸につきまとわれていた。
「お前なら全国を狙えるんやで」
竜也が学校に着くのを待ち伏せしていた田丸は、竜也を見つけるなり隣にピッタリくっついて延々と絡み続けていた。竜也はそれをずっと無視して歩いていたが、下駄箱の辺りでうっとうしくなって田丸を睨み付けた。
「いい加減にしてください。俺が勝ったら空手部やめるって約束したんちゃいますの？」
「せやかて、坂上。主将の俺を倒すだけの強さがあるお前を、みすみす手放すんは愚か者やろ？」
お前が弱いだけや。という言葉を飲み込んで、ハァと竜也は溜め息をついた。
腰に手をあてて、田丸を再び睨みつける。この調子だと、ホームルームがはじまって担任が教室に来た後、追い出されるまでずっと話を聞かされるだろう。どうしたものかと考えていると、水樹達がその場を通りかかった。
「あれ、先輩おはようさん」
のぞみが、竜也に気がついて挨拶をした。
背後からの声に、田丸は振り向いた。自分に挨拶されたのかと勘違いしたからだ。
「おはようございます」水樹も続いて挨拶をする。
和彦だけは、口をもごもごと動かして挨拶をしようとしなかった。
「ああ」

竜也は、手をあげてそれに答える。その瞬間、ふと頭にアイデアが浮かぶ。
のぞみの後ろに隠れていた水樹の腕を、竜也は急に掴んだ。そして、田丸の前に強引に立たせる。
「俺、空手やめるんは、この子のためなんですわ」竜也は、田丸に耳打ちをした。
「え！？」
田丸は、目を見開いて竜也を見た。そして、その視線を水樹に向ける。
「な、水樹。俺に空手部やめてもらいたいんやんな？」
「え？　あの……ええ！？」
昨日とはうって変わって、ニッコリと笑いかけながら話しかけてくる竜也に、水樹は戸惑った。困った顔をしながら和彦とのぞみを交互に見る。
田丸は、口をポカンとあけて立っている。時が止まったようだ。
「あの……その……」水樹は、今にも泣きそうな顔をした。
「竜也先輩！　水樹をだしに使うなや！」
和彦が水樹を田丸の前から動かすと、竜也に向かって怒鳴りつけた。近くにいた何人かの生徒がその声に驚いて振り向いた。
「事実やろう。俺はコイツの為に空手をやめるんや」
「変な言い方すんなや！　田丸先輩誤解しとるやないか！」
「知るか、事実は事実やろ」
竜也は、和彦を睨み付けて言った。
「ということやから、田丸先輩。俺に空手やらせたかったらその子まず説得してや」
靴を履き替えると、和彦の罵倒をものともせず、竜也は教室へと歩いていった。田丸は相変わらず放心したままその場に立ち尽くしている。
「なんやねん！　あいつ！　行くぞ、水樹」
和彦は、その場で凍り付いている水樹の肩を叩いた。

「私、何か気にさわるような事でもしたのかな」目に涙を溜めながら、水樹は言った。
「気にすることないで。行こ、水樹」
のぞみは、水樹の手をひいて1年A組の下駄箱へと連れて行こうとした。その時……
「待ってくれ！」
我に返った田丸が、水樹達を呼び止めた。
「頼む、坂上を空手部に戻してくれ！　空手部にはアイツが必要なんや」
９０度に腰を曲げて、田丸が言った。
３人は困ったようにそれを見つめる。
「あのなぁ、田丸先輩。竜也先輩が言ったことはちょっと語弊があるものの、その通りやねん。癪に障るけど、俺らかてな、竜也先輩が必要なんや。俺らは竜也先輩を空手部に戻す説得はできひん」
和彦は、頭を下げている田丸先輩を見つめて言った。その意外な言葉に、水樹とのぞみは目を丸くして和彦を見る。その視線に気がついた和彦は、「見んなや！」といってそっぽ向いた。
「そういうことやから、堪忍してや」
のぞみは、まだ頭を下げたままの田丸にそう言った。そして、３人は下駄箱を後にした。
「なぁに？　和彦。竜也先輩が必要なんや～」
ニヤニヤして和彦の腕をつつきながら、のぞみが言った。
「だって、俺はお前と違て前に出れへんやろ？　竜也先輩がいた方がええやんか……」
和彦は、場所が場所だけに濁したような言い方をした。そして、のぞみの腕を払うと、階段を一段飛ばしで駆け上がった。１年生の教室は、校舎の3階にある。
「それでも、和彦が竜也先輩のこと必要っていってくれて私はうれしいな」
水樹は、ニコニコと笑いながら和彦の顔を見上げる。

「でもどないするん？　水樹。多分、田丸先輩、これからあんたにつきまとうんちゃう？」
階段の下を見ると、田丸がこちらをジッと見ているのが見えた。
その視線に、３人は背筋に冷たいものが当たったように肩を震わせた。
「うわッ……見てはる……」のぞみは、げっそりして言った。

第1章　仲間？

7

長い1日がようやく終わり、やっと放課後になった。
田丸は、毎放課ごとに1年A組へとやってきた。さすがに1年生の教室に入りづらいらしく、入り口のところでウロウロしている姿が何度も目撃された。
3人は、目を合わせないように廊下とは別の方向を見て放課を過ごしていた。それでも、2、3度つかまってしまい、げっそりするほど、竜也が空手部にとってどれだけ必要かを聞かされた。
和彦に至っては、トイレにまでついてこられ、用とたしている隣で延々と話されたらしい。すごいを通り越して尊敬に値する執念である。
「竜也先輩、俺らのこと目の敵にするの……わかる気がするわ。ほんまに……田丸先輩、悪いけどうざいで」
帰り支度をしながら、和彦はのぞみに言った。
「わかりあえてよかったんちゃう」のぞみは、クスクスと笑った。
そして、3人は教室を後にした。
「そういえば、竜也先輩、いつも右手にリストバンドしてるの知ってるか？」
「え？　そうなの？」
「道着の時だけやなくて、制服着てる時もつけててん」
階段を三段飛び越えて踊り場に着地した和彦は、そのままクルッと回って2人を見上げた。
「へぇー。よく見てたね」
「それでな、便所で田丸先輩につかまった時に聞いてんけど、入学当初からずっとリストバンドつけてるらしいで。はずしてるとこ見たことない言っとったわ」

「そうなんだ」水樹は、左手で頬を押さえながら言った。
「それで、俺思ってんけど、竜也先輩右手悪いんやないか？」
和彦は、自分の右手を押さえてグルグルと動かす。そして、動かしすぎてポキッと鳴った。
「で、何が言いたいん？」
「だから、坂上家が竜也先輩の存在をかくしとったんは、右手が悪いからやねん」
右手の人差し指を立てて、自信満々に和彦が2人に向かった。のぞみは腕を組んで訝しげな顔をしている。水樹は、相変わらず左手で頬を押さえたまま困ったような顔を和彦に向けた。
「でも、手首が悪くて空手やとか、あんなバイク乗れたりするん……？」
「あ……」和彦は、口を開けたまま立ち止まった。「せやなぁ」
「竜也先輩の粗探しはもうやめぇや？　気に食わんのはわかるけど、向こうが馴れ合う気がないってなら、関わらない方が楽やで」
のぞみは、下駄箱からローファを出した。水樹も続いてローファを履いて上履きをしまう。和彦は、ブツブツいいながら上履きをしまった。
校庭の脇を通って裏門へと向かう。その途中で武道場が見えた。その扉が開いていたので、和彦は、目を細めて中を見る。白い道着を身に纏った田丸先輩が準備運動をしているのが見えた。しかし、その顔には覇気がない。余程竜也の退部がショックだったのだろう。
チッと軽く舌打ちをして、和彦は前を見た。そして、前方の裏門の脇に、見覚えがあるバイクが止まっていることに気が付いた。
「あれ、竜也先輩の単車やんな？」
和彦が指をさした方向を、2人は見る。
「あんなんやったっけ？」のぞみは、目を細めて言った。
「あ、ほら、あそこ、竜也先輩が立っとる」
距離が縮まるにつれ、バイクの脇に竜也の姿が見えてきた。腕を組んで、バイクにもたれかかって遠くを見ている竜也は、なぜか悲

しそうに見える。
ふいに、何かに気がついたように、竜也は姿勢を正した。
バンッと車のドアが閉まる音がして、裏門に右京が姿を現した。2人は微妙な距離をとって対峙する。それを見た3人は、なぜか近寄ってはいけないような気がして足を止めた。
しばらくの間、そのままで時が流れた。ふいに、竜也がこちらに気がついて顔を向ける。すると、右京もこちらに顔を向け、水樹に気がついて頭を下げる。
「水樹様、お迎えにあがりました」
「う……うん……ありがとう」
水樹は、チラリと竜也を見ながら言った。竜也は、水樹と視線がぶつかると別の方向を向いてしまった。
「あー……、右京さん」
水樹が助手席のドアを開けて車に乗り込もうとした瞬間、竜也が右京を呼び止めた。
「帰り道って、どこ通ってはるんですか？　もしかして、御池通りじゃ……？」
「だったら何だ？」
右京は、訝しげな顔をして竜也を睨む。先に乗り込んだのぞみをのぞいて、水樹と和彦の2人も竜也を見た。
「今日は、御池は迂回して別の道走った方がええ……と思います」
水樹は、ふと和彦の言葉を思い出して竜也の右手を見る。腕をおろしているせいで、ブレザの袖で手首が隠れている。
「なぜだ」
竜也は、軽く舌打ちをしながら言うと、ハンドルに引っ掛けてあったメットを乱暴にかぶりながらバイクにまたがった。
「なぜって……」竜也は、前髪を掻き揚げながら言う。
その瞬間、手首に黒いリストバンドが見えた。水樹は、竜也の動きにあわせて見え隠れするリストバンドを目で追っていた。
「なんとなく……嫌な予感がしただけや」

竜也は、軽く舌打ちをしながら言うと、ハンドルに引っ掛けてあったメットを乱暴にかぶりながらバイクにまたがった。そして、クラッチレバーを握って左足でギアをローに入れる。クラッチを戻しながらセルを回すと、ドルルルンッという音が響き渡り、ドッドッドッと規則正しい音が体に充満した。

「ほな！」

竜也は、エンジン音に負けないように声を張り上げて言った。そして、数回アクセルをふかすと、走り出し、すぐに視界から消えてしまった。

「何？　何があったん？」

のぞみは、車の中にいたせいで外で何が起きていたのかわからなかった。乗りこんできた和彦の腕をぐいぐい引っ張って説明を求めた。

「竜也先輩が、御池通り通るなって言ってた」

和彦が、のぞみの腕をはがしながら言った。

「右京……」

ハンドルを握ったまま考えごとをしている右京を、水樹が心配そうに覗き込む。

「御池通り、どないするん？　右京さん」

「……水樹様は……竜也殿のことを信じますか？」

右京の顔をチラリと見て、水樹は頬に手を置いて黙った。そして、決心して右京に顔をもう一度向けた。

「私は……信じる……」

「わかりました。御池通りは迂回しましょう」

そう言って、右京は車を発進させた。

「あ、そういえば、見たよ。竜也先輩のリストバンド」

水樹は、少し後ろを振り向いて言った。

「おお、しとったやろ？」

「うん、黒いのしてた」

「なんなんやろなぁ。よっぽど気にいってんのやろか」

「案外、彼女からもらったんちゃう？」
のぞみは、ニヤニヤと笑いながら和彦を見る。
中学時代、和彦は、彼女からもらったキーホルダを鞄にいつもつけていた。それは、黄色ひよこの人形で、和彦に似ているという理由で彼女が買ったものだった。どう見ても似てるとは思えない人形を、どうみても持っているのが不自然な中学男子がいつも鞄につけていたのである。のぞみは、それを思い出して和彦をからかっているのだ。
「竜也先輩に彼女ォ！？　あんな冷たい男に彼女がおるかいな」
「でも、竜也先輩よく見たらかっこいいんちゃう？　多少冷たくても許せるわ」
「うわ、のぞみあんなんが好みなんか！　うわぁ、趣味わっる！」
和彦とのぞみの言い合いを聞きながら、水樹はシートに深く座って窓の外を眺めていた。いつもとは違う道、慣れない景色を一人で楽しむ。はじめは、二人の会話が遠くに聞こえていた水樹だったが、そのうちそれも意識の外へといってしまい、今は無音の中に一人いた。
坂上竜也……
ただ、それだけが頭の中を支配する。
達弥が事故で防人を外れた時から、次に防人となった竜也に会うのが楽しみだった。親しみやすかった達弥の弟である。きっと仲良くできると思っていたのだ。しかし、竜也は自分達と馴れ合う気はないと言い切った。
自分には姫巫女としての能力がない。だからこそ、防人の力が必要となるというのに、竜也は一人勝手に行動をする。
出来損ないの姫巫女の防人として生きなければいけなくなった運命を呪っているの？
水樹は、うっすらと自分の目に涙が浮かんだ事に気がつき、皆に

悟られないように手の甲でそれを拭った。
　しかし、馴れ合う気がないと冷たくされても、田丸から逃げる為の道具として使われても、水樹は竜也に対して嫌な印象を受けることはなかった。竜也の言動には、なにかひっかかるものがある。それが、水樹には気になっていた。
　次の瞬間、電子音が聞こえ、周りの音が戻った。
「もしもし」和彦が、制服のポケットから携帯を取り出して答える。
「……あぁ、せやで……ああ……え？　……もうあと１０分ぐらいしたら家着くんちゃうか……？　ああ、俺らその道通ってへんねん……はぁ！？　……事故！？」
　声を荒げた和彦に、水樹とのぞみは同時に反応する。右京は、バックミラごしに和彦を探した。
「なんやって？　……ほんまかいな」
　和彦は、水樹とのぞみを交互に見る。そして、携帯を指差して口をパクパクさせる。
「ああ、わかった。ほな」和彦は、そう言って携帯をポケットにしまった。
「竜也先輩の勘が当りよった。なんやねんあいつ」
「何？　事故って何があったの？」
　水樹は、助手席から後部座席に乗り出すように体を捻る。のぞみも、和彦をジッと見て説明を求めた。
「今、おかんからやってんけどな、近所のおばはん連中と井戸端会議してたら、そん中の１人の携帯になんや電話がかかってきよってな、どうやら事故で身動きがとれへんらしくて、帰りが遅れるって話やったらしいねん」
　和彦は、少し前かがみになって説明を始めた。
「んでな、それが烏丸御池で、大型トレーラが交差点を右折しようとしてな、右折ランプが消える寸前やったんか、スピード出しすぎて曲がりきれずに横転してん」
　膝をパンッと叩きながら和彦は言った。こういった説明の場合、

なぜか和彦は自分が見ていたかのようにエラそうになる。
「それで、今、そこらへんは通行止めになっとるらしい。あそこらへんって、普段でも渋滞するやん、だから、おかんが俺らがそれにつかまる前に連絡しよう思って、あわてて電話かけてきよってん」
「へー、迂回してよかったね」
のぞみが、うんうんとうなずきながら言った。
水樹は、体を元の位置に戻して前を向いた。そして、顎に手を添えて考え込むように視線を下に落とした。右京は、それを横目で確認する。
「でも、竜也先輩、ちょっとは優しいとこあるんちゃう？」
のぞみは、腕を組みながらシートにもたれかかった。
「なんでや」和彦が不満そうに言う。
「だってさ、勘だったとはいえ、私達が危ないと思ったから声かけてくれたんやろ？　事実、私達は巻き込まれずにすんだんやし」
「そうですね」
右京がはじめて会話に参加した。
「竜也殿は、少し不器用なだけかもしれませんよ」
「そうかなぁ」
「そんなわけあるかいな」和彦は、ふてくされて窓の外を見た。
「とにかく、竜也先輩のおかげで渋滞に巻き込まれずにちゃんと帰れたんだし、感謝しようよ。ね」水樹は、和彦に言った。
「なんか、変な人」
のぞみは、溜め息をついてそう言った。

第2章　夢？

1

落ちる……

おちる……

オチル……

深く、深い、暗く、虚ろで孤独なあの場所へ

今日もまた、彼らに会いに、俺はただ、落ちていく

鉛を飲み込んだように重く、それは心の枷となる

俺は、こうして2人の苦しみを背負う

それは、俺の心を乱す糧となる

俺は、静かに帯を締める。

また、自分はこの若者になっている。

否、客観的に見てるんかもしれない。どちらとも言えない感覚が俺を襲う。

磨き上げられた愛刀を、綺麗に巻いた帯に差し込む。

御簾をあげると、目が痛いほどの朝日が屋根の上に見える。

目を細めて、廊下を歩き出す。小鳥のさえずりが耳に心地よく聞こえてくる。

朝が来るたびに、心が弾む。愛しいあの人に会えるから。

廊下の角を曲がる。そこに、彼女がいる。

時は平安、戦乱の最中、俺は小早川の……
「右近」
夢の中で幾度と呼ばれた名前。これが俺の名前。
その俺の名を呼んだ愛しい人。俺が、全身全霊をかけて守る誓いをたてた、たった一人の姫君。決して結ばれる事がなくても、俺は一生をかけて彼女を愛すだろう。
「おはようございます、弥生様」
俺は、片膝をついて彼女に言う。
弥生
それが彼女の名前。
平安の時代に生きた姫巫女。澤渡弥生。
彼女は、俺に微笑む。
このまま抱き締めたい……。だが、それは許されぬこと。
彼女も、それは分かっている。
だから、こうして見つめ合う。それだけしか、できないから……。
どんなに愛しても、どんなに愛されても、この一族を守る為、一族同士では子を成すことはできない。一族の血を絶つということは、この国を滅ぼすことと同義だからだ。
護り手として、常に姫巫女の側にいれるのはとても幸せな事。
でも、できるなら触れたい、抱き締めたい、口づけをしたい。
「右近、昨日の夜はありがとう」
彼女は、そう言って俺に微笑みかける。
「私の力ではありません。全て弥生様のお力でございます」
「いいえ、私一人の力では、あれだけの妖の者を滅することはできませんでした。これも、右近をはじめ、防人達の力のおかげだわ」
「弥生様の為なら……」
俺は、そこで言葉をきって彼女をジッと見つめる。
美しい……。
かの常盤御前にも勝る。
平氏と源氏の頭領が我が物にしようと求婚を申し込む程の美しさ。

どんな権力にも決して屈することはない、至上の人。たった1人の……俺だけの姫君。
「右近……」
彼女の瞳に俺が映っているのがわかる。それ程の距離で互いに見つめ合っていた。
「……あなたに言わなければならないことがあるの」
彼女は、ふと俺から視線をはずす。
言わなければならないこと。俺が聞かなくてはいけないこと。嫌だ。聞きたくない。予想はできる。聞いたら、俺はきっと狂ってしまう。
なぜ、俺じゃない。俺が一番彼女を大切に思っているのに。
千切れる程愛している。
愛している……。
愛して……

「……ッ！」
竜也は、跳ねるようにして目を覚ました。
全身の毛穴から汗が噴出している。呼吸が乱れ、肩で息をしていた。
額の汗を拭いながら時計を見ると、時計の針は午前3時２０分を指していた。深い溜め息をついてから、ベッドを降りて台所へと向かった。
食器棚からコップを出して、蛇口をひねる。勢いよく水が飛び出して、それをいっぱいにする。しばらくその水を見つめたまま、竜也は立っていた。
「愛してる……か」
竜也は嘲笑まじりにそう言うと、水をいっきに飲み干した。
そうして、また寝室へと戻って汗だくになったTシャツを着替える。
頭の下に手を組んで、竜也はベッドに横になった。

もう何度目やろうな。小早川右近になる夢は。

平安時代と鎌倉時代の狭間を生きた護り手の名前が「小早川右近」であった事実はわからない。だが、あまりにもリアルすぎる。おそらく実在したのだろう。

姫巫女と護り手という立場にあったにも関わらず、愛し合ってしまった二人。その物語を、竜也は自分の記憶だと勘違いする程夢に見ていた。

狂いそうな程人を愛した右近の感情が、竜也には大きすぎた。

目を覚ますたびに吐き気がする。

「もう……やめてくれ……」

竜也の目から一筋の涙がこぼれる。そして、それが枕に染み込んだ。それと同時に両の瞳から涙が溢れ出す。

いつの頃からこの夢を見るようになったのか、竜也はもう記憶になかった。

夜の間、竜也は右近の感情に支配される。苦しく、悲しい記憶が彼に降りかかり、涙を流し、嫌悪する。

竜也は、右近と弥生の物語を繰り返し何度も見続け、自分の為ではなく、姫巫女の為、そして国の為に生きなくてはいけない覚悟、苦しみを右近を通して知った。だからこそ、防人として生きることになった自分の運命を呪うようになった。

もちろん、姫巫女として生きる辛さも知っていた。姫巫女に対する周りの期待は、時として重い枷となってのしかかる。竜也は右近になって、それに押しつぶされそうになる弥生を目の当たりにしていた。

だから、竜也は、姫巫女としての力を持たずに生まれてきた水樹の苦しさを痛いほどよくわかっていた。

能力がない自分を守る為に妖の者と戦う右京やのぞみ、それに和彦。彼らが必死になればなるほど、水樹は自分を責めるだろう。彼

らが慕えば慕うほど、申し訳ないと思う気持ちが水樹を支配する。能力がないという劣等感が、水樹の能力の覚醒に幾重にも鎖を巻いているのだろう。

自分の運命を呪う一方で、水樹を守りたいという気持ちが竜也の中にはあった。

それが、竜也の心をかき乱す。

自分が防人として抜擢されてから、水樹をこっそりと見にいったことがあった。

右近の愛しい人の末裔、姫巫女の一族である水樹に、少なからずとも興味があったからだ。身にまとう雰囲気が、夢の中の最愛の人を思わせた。その時から、竜也の心の中には水樹の居場所があった。

水樹を守ろうとすると、右近と同じ道を辿りそうで竜也は怖かった。

竜也が水樹達と馴れ合う気はないと言った理由はここにある。できるだけ遠ざけて、自分の心に水樹の存在を許したくなかったのだ。

「……4時……」

顔を横に向けると、時計の針はいつの間にか4時をさしていた。うっすらと空が白んでいるのがカーテン越しにわかる。

竜也は、何の意味があってこの夢を見続けているのかわからなかった。

断片的に見るそれは、竜也の血に溶け込んだ2人の記憶なのだろうか。それとも、右近が竜也に何かを伝えようとしているのだろうか。

幾度となく繰り返した問いに、竜也は溜め息で答える。

そして、目覚ましがなるまでもう一眠りすることにした。

第2章　夢？

2

鉛を飲み込んだように胃が重かった。
今朝見た夢のせいか、一日中気分がすぐれない。
竜也は、鳩尾の辺りを抑えながら顔をしかめた。午前中はなんとか耐えたが、午後になって、授業に集中できないほど、気分が悪くなってきた。冷や汗が頬を伝う感触が気持ち悪い。視界がぼやけ、黒板に書いてある文字も見えなくなってきた。壇上に立つ教師の声も次第に遠くなっていく。
「ちょお……坂上君どないしたん？」
ふいに、右から声が聞こえてきた。隣の席のクラスメイトが、竜也を軽く覗き込んでいた。
目だけを動かして、竜也はそちらの方を見る。その瞬間、ひどい眩暈に襲われ、竜也は体制を崩す。
「先生！」
クラスメイトが叫ぶ声と、教室内がざわざわと騒ぎ出す声が遠くに聞こえた。そして、竜也の世界は暗転する。
意識は、暗い闇へと落ちて行った。

「……近……」
遠くで俺を呼ぶ声が聞こえる。
「……右近……」
聞き覚えのある声が、体に充満する。それが、心地よい響きとなって俺の意識を正常へと導いていく。
「右近……」
目の前が急に明るくなる。見覚えのある天井が見え、視線を下げる。そして、俺は自分の姿にハッとする。

またこの夢か……。

俺は、今、自分が右近になっていることを自覚した。

今朝みたばかりなのに、教室で気分が悪くなって意識を右近に明け渡してしまったのだろう。連続で見るのは初めての経験だ。

「目が覚めた？」クスクスを笑いながら、弥生が言う。

「弥生様……」

「珍しいわね、右近が居眠りするなんて」

思い出した。

俺は、弥生と一緒にいる時にウトウトとしてしまい、そのまま眠ってしまったのだ。

自分の失態に、あわてて飛び起きて姿勢を正した。そして、そのまま額を畳に擦り付けるように頭を下げる。

「申し訳ありません！」

「え！？」

「弥生様にお仕えする身として、事もあろうに目の前で……いっ……居眠りなどッ！」

「気にしないで！　いいのよ、そんな、一瞬だったんだし」

弥生は、あたふたして俺を見つめた。

「罰はなんなりと……」

その言葉に、弥生は体を強張らせた。そして、俺の肩にそっと手を置く。

「顔を上げなさい、右近」

「……」

俺は、ゆっくりと顔をあげ、弥生を見つめた。

「そんなに罰してほしいなら、あなたに罪人になってもらいましょう」

俺の心臓が勝手に高鳴る。右近のそれを感じて俺は、不快感に襲われた。

「右近、私をどこかへ連れて行って」
弥生は、そう言うと俺に抱きついた。衣擦れの音が、静かな部屋に響き渡る。弥生の両手が俺の胸の辺りに添えられている。俺が少し顔を下げれば、その額に口付けができるほど近くに、弥生の顔があった。
俺は、右近の感情の渦に、ますます気分が悪くなる。
「お願い、右近。私には耐えられないの」
弥生は、静かに涙を流す。小さく肩を震わせているのが、俺に伝わってくる。
「せめて……あなたと契りを交わしてから……」
「弥生様……何を……？」
「母上が婚儀を……」
今朝の夢の続きだ……。弥生は、このことを俺に話そうとしていたのだ。
心臓が再び高鳴った。頭の中が真っ白になる。いつかはこんな日が来るとは思っていた。しかし、その日が来るのはもっと先だと思っていた。悪夢が現実となる。
「右近……」
弥生の顔がすぐ目の前にあった。俺はジッと弥生の目を見つめた。自分の気持ちはわかってる。弥生の気持ちも、もちろん知っている。しかし、自分がどうすることが正しいのかわからない。
個人としての気持ちを優先するなら、今すぐにでも弥生を連れてどこかへ行くだろう。しかし、護り手としての役目を果たすのであれば、それは当然許されない。
「弥生様……私は……」
今度は、白い天井が見えた。顔を横に向けるとクリーム色のカーテンがしかれている。おそらくここは保健室であろう。この部屋独特の、消毒液の匂いが鼻腔を擽る。不快であるはずのそれが、現実世界へ戻ってきたことを実感させ、竜也は、ホッと胸を撫で下ろし

た。
「……ッ！」
起き上がろうと体を少し起こした瞬間、目の前に見えるものに、竜也は自分の目を疑った。
……右近？
それは、夢の中の人物だった。
自分はまだ夢の中にいるのかと、竜也は動揺する。肩で息をして両手を見つめる。しかし、そうしたところで夢か現実かは判断ができない。
もう一度、右近へと視線を投げる。そして、さらに驚愕することになった。
右近が立つその隣には、弥生が一緒だったからだ。
弥生の纏った十二単が、白を基調とした部屋によく映えた。思わず、竜也も美しいと思ってしまう。
「竜也……」
右近の声が、頭に直接響いてきた。夢の中で自分の口から発せられる声を、今度は自分が聞くことになっている。カセットテープで録音した自分の声が妙に聞こえるような、不思議な感覚がする。目を丸くして、竜也は右近の方へと顔を向ける。
悲しそうな瞳で、２人がこちらを見ていた。
「何の用や」
竜也は、声を出さず、同じように右近の心に語りかけた。
「もう、まもなくだ……。その時は、まもなくやってくる」
「お願い……彼女を……水樹を守ってあげて……」
夢の中で、聞くたびに心地よいと思っていた声が、竜也の頭に響く。控えめな小さな声は、右近を通して聞く声と同じだったが、右近の感情がない分、普通に聞こえた。
「なんでや……、なんで俺なんや……。そんなの護り手の右京に言えばええやろ！　もうやめてくれ」
竜也は、頭を抱えた。そして、耳を塞ぐ。

「わかっているだろう」
頭に響く声は、耳を塞いでも聞こえてくる。竜也は首を横に振った。
わかるわけないやんか……ッ！　そんなのわかってたまるか……ッ！
「あなたは、私達の……」
弥生がそう言い掛けると、保健室のドアが勢いよく開く音がした。
「先生！」
聞き覚えのある声が、竜也の耳に聞こえてきた。ふと顔をあげると、右近と弥生の2人の姿が消えている。
「静かに、寝てる人がいてるのよ」
「知ってます……竜也先輩は……大丈夫なんですか？」
「そこのベッドで寝ているわよ」
一番端の、カーテンがひかれているベッドを指差して、養護教諭が言った。
パタパタと走る音が聞こえ、何の断りもなくシャッとカーテンが開く。そこには、肩で息をする水樹の姿があった。
「竜也先輩……大丈夫ですか？」
さっきまで弥生が立っていた場所に、水樹の姿がある。誰かに守ってもらわねば生きていけないような、儚い空気がそこにある。弥生と同じ空気だ。
「水樹を守ってあげて」という弥生の言葉が脳裏をよぎった。それと同時に、竜也に怒りがこみ上げる。
勝手に自分達の辛い過去を見せつけ、混乱させ、苦しませた挙句、水樹を守ってくれなんて都合のいい話だ。竜也には何のメリットもない。防人として生きることになった以上、水樹を守るつもりはある。しかし、それを他人に頼まれると、何となくイライラする。
「勝手に入ってくんな」

竜也は、怒りを水樹にぶちまけるように睨み付けた。
「ごめん……なさい」
ビクッと肩を震わせて水樹は一歩下がった。
「なんやねん、竜也先輩が授業中に倒れたって話を聞いたから様子見に来たのに、その言い草は……」
「そうよ、水樹はこんなに早く走れる子やないのに、私達をおいて保健室に走っていったんよ！」
ようやく追いついた2人が、水樹の後ろに立った。
「誰も頼んでない」
竜也は軽く舌打ちすると、ベッドから降りた。
「この……ひねくれ者めッ！　人がせっかく心配してやったのに……。あかん、こんな奴なんかの心配なんてするだけ無駄や！　行くで！　水樹！　のぞみ！」
和彦は、水樹の腕を掴んで強引に連れ出そうとした。しかし、水樹は足を踏ん張ってそれに抵抗した。
「ダメよ」水樹は、ぷうっと頬をふくらまして和彦に言う。
「なんやねん」
「心配してやったなんて言い方よくない」
「つっこむところはそこかいな」
和彦は、脱力した。
「竜也先輩、余計なお世話かもしれないけど、もう右京が迎えに来るから一緒に車に乗っていこう。具合が悪いのにバイクには乗って帰れないでしょう？　家はわかってるし、ちゃんと送っていくから」
水樹は、心配そうに竜也を見つめた。のぞみも、同じく心配しているのがその表情からわかった。
「俺の家を知ってる？」
竜也は、笑いながら水樹の顔を見る。
「考えてみぃ。達弥と同じ家におるんなら、俺はお前達と同じ中学校に通ってたはずやろ。それに、近所におるなら今まで会わなかったんはなぜや？」

竜也は、腕を組んで窓にもたれかかって3人を見た。口の端だけあげた、嫌な笑みを浮かべている。
「別で住んではるん？」
のぞみは、眉をしかめて言った。
「せや。俺は坂上家から離れて暮らしてるんや。だから余計なお世話。俺は1人で帰れる」
そう言うと、竜也は3人を押しのけるようにして歩き出した。
「なんでや……。なんで離れてくらしてんねや」
和彦は、竜也の肩を掴んで言う。
「うるさいな」
そう言うと、竜也は和彦の手を肩から払って歩き始めた。
「ちょお、待てや！　なんやねん！　うるさいて！」
和彦は、もう一度竜也の肩を掴んだ。
「しつこいな……」
竜也はそう言いながら後ろを振り返った瞬間、激しい頭痛に襲われた。後頭部を金槌で思い切り叩かれたような激痛が走り、その場に頭を抱えて膝をついた。
「ちょ、竜也先輩」
和彦は、竜也の肩に手を置いたまま一緒に座り込む。
「うッ……」
「……え？」
突然、和彦の頭に走馬灯のようにぐるぐると映像が浮かび上がる。とてつもなく早いスピードでそれは流れ、和彦は酔ったように吐き気がし、両手で口を押さえた。その瞬間、頭の映像も途切れた。
「竜也先輩！」
「和彦！」
水樹は、膝をついて頭を抱え込む竜也に駆け寄り、のぞみは、顔面蒼白になった和彦に駆け寄る。
「ちょっと、2人ともどないしたんよ」
養護教諭は、慌てて立ち上がって2人に駆け寄った。

和彦は、すぐに顔に赤みが戻って立ち上がったが、竜也は肩で息をしたままその場に蹲っていた。息を整えるように深く呼吸をし、心配そうに肩に手を置いて覗き込んでいる水樹の手を払った。そして、頭を抑えたまま立ちあがる。
「……気が変わった。右京に送ってもらう」
「え？」
「ただし、俺の家やなくて水樹の家や」
「はあ！？」
和彦が、間の抜けた声を上げた。のぞみも、竜也の言葉に目を見開いている。
「一人暮らしやし、何かとこう具合が悪い時は不便やねん。今日は、みんなで水樹の家で夕飯でも食べて仲良くしよう」
薄ら笑いを浮かべて、竜也は不気味に言う。
「なんや、ちょっと頭おかしなったんとちゃうか？　竜也先輩から仲良くとか……気持ち悪い。熱でもあるんとちゃうか？」
「俺の言う通りにしておいた方が身のためやで、和彦」
「はぁ？」
「裏門で」竜也はそう言って保健室を出て行った。
「なんやねんあいつ、いくで、水樹」
和彦は、水樹の腕をひっぱって保健室を出た。のぞみも、それを追いかける。
「え……っと……」
一人残された養護教諭は、事態が飲み込めずに立ち尽くしていた。

第2章　夢？

3

静かな晩餐であった。
みんな黙々と食事を口に運んでいる。ただ、それだけが許される行為かのように、一言も発さずに5人は夕食を食べていた。
和彦は竜也を伺うような視線を投げていたし、のぞみはそんな2人を眺めていた。水樹は、この空気の中にいても、みんなと一緒に食事できることがうれしいのか、ほんのり笑っていた。
「いかがですか？　竜也殿」
右京が、沈黙を破って言葉を発した。和彦は、この空気を打破した彼に敬意の眼差しを向けている。
「これ、右京さんが作ってんの？」
「今日は私が作りました」
「今日は？」
「あのね、母が亡くなる前は、何人かお手伝いさんがいたんだけど」水樹が、右京に変わって話し始める。「私の送り迎えで右京が家からいなくなると、お手伝いさんだけがこの家に残ることになるでしょう。それはできないって、右京が今色々と負担してくれているの。週に何回かはお手伝いさんがきてるんだけどね」
「へぇ。まぁ、広いし1人やと掃除とか大変やろな」
竜也は、右京を眺めながら言った。右京は、その視線に気がついて軽く笑った。
「あ、竜也先輩、具合どないなん？」のぞみが聞く。
「ああ、もうなんともない」
「あんまり無理しぃひんほうがええで」
「だからこうしてここにおるんやないか」竜也は、のぞみの方を向いた。「それ以外にここにおる理由がない」

竜也はそう言うと、黙々と夕食を食べ始めた。多少は心を許してくれたのかと思ったら、この態度である。のぞみは溜め息をついて、再びお箸を口に運び始めた。

今日の夕食のメニューは、ハンバーグにグリーンサラダ、粉ふきイモとにんじんのグラッセ、そして、コンソメスープだった。和食が好きな右京だったが、育ち盛りの高校男児が2人も来るとあって、急遽ハンバーグにしたのだ。それは、竜也に対する右京のささやかな優しさであった。

右京のそれが通じたのかどうかは分からないが、竜也は黙って食べていた。おそらく、一人暮らしの竜也は、手料理を食べる機会があまりないのだろう。実は、顔に出さないだけで喜んでいたのかもしれない。

和彦とのぞみ、そして水樹は談笑を楽しんでいた。久々の皆との食事で、水樹はとても楽しかった。右京は、そんな水樹を愛おしそうに眺めている。

「ごちそうさま」

竜也は、そう言うとお箸を机に置いた。

「……帰るの？」

おもむろに席を立った竜也に、水樹はそう言った。そして、全員が竜也を見上げた。

「いや……食べてすぐには……行かへん。バイクもないし……。とりあえず、片付けを……しようかと……」

竜也は、全員の視線に少しビックリしながら途切れ途切れに言う。

「竜也殿、そのままでよろしいですよ。後で私が片付けます」

「あ、そう。ほな……ごちそうさま」

竜也は、もう一度右京に言った。

「ちょお、庭散歩してきてもええか？」視線を水樹に変え、竜也は言った。

「あ、うん。どうぞ」

水樹がそう言うと、竜也はフラフラと部屋を出て行った。全員が、

無言でそれをずっと目で追っていた。
「うへあぁあああ」
竜也の姿が見えなくなってから、和彦は情けない声と一緒に息を吐いた。それと同時にその場にいた全員が、小さな溜め息をついた。
「なんか、肩こったわ」
和彦は、肩をもみながら首を回した。水樹は、それを見ながら苦笑いをする。
「なんやろう……、竜也先輩が私達と仲良くしようとしてるっぽいのにさ、どうしてこんなに緊張するんやろう……」
のぞみは、組んだ手の上に顎の乗せて溜め息をついた。
「あ、せや。俺ちょお竜也先輩んとこ行ってくるわ」
和彦は、残っていたご飯を口に掻き込むと、「ごちそうさま」と言って竜也を追いかけた。
「なんか忙しないなぁ」
のぞみは、バタバタと駆けていく和彦を見て言った。
和彦が竜也を追いかけて廊下に出ると、少し離れた縁側に座って月を見上げている彼の姿が見えた。悲しそうな目を月に向けている。そんな竜也の姿を見た和彦は、つい、柱の影に隠れてしまった。
ふと、竜也の視線が庭に向けられる。すると、ハッとした顔をして立ち上がった。その顔は、保健室で倒れた時のように蒼白だ。
「竜也先輩！」
また倒れるのではないかと、和彦は竜也に駆け寄った。
その声をきいた竜也は、目を丸くして和彦を見る。その瞳は、なぜかすがるような目をしている。
「……ど……、どないしたん……？」
「なんでもない……」
竜也は、手で口を覆いながら和彦にいった。額にはうっすらと汗が浮かび上がっている。
「まだ具合悪いんとちゃうか？」
「いや、大丈夫や」

「あ、せや。竜也先輩」
和彦は、そう言いながら竜也の隣に腰をおろす。
「保健室で竜也先輩が倒れた時、俺なんやようわからん映像が頭に流れ込んできてんけど……」
竜也はそう聞いた途端、和彦の胸倉を掴んで立ち上がっていた。そのまま、和彦を睨みつけたまま動かなくなった。和彦は、何が起こったかわからずに呆然としていた。
「何を見た」
「何って……ビデオの早送りみたいやったからなんもわからんかったけど……」
「ふん」嘆息して、竜也は和彦から手を離した。
「竜也先輩は……何か見えたんや？」
「何も見てない！　さっさと部屋に帰れ！」
竜也は、和彦がブツブツ言いながら部屋に戻るのを見ると、再び庭に目を向けた。そこは、和彦に話しかけられるまで右近がいた場所だった。今は、ただ桜の木が堂々と根を張っている以外、何もない。
溜め息をついて両手を眺める。
俺に触ると、映像が伝染するのか……。
竜也は、和彦の言葉で、自分に触れていることで自分が見えている映像が共有できることを知った。
幸い、和彦はうまく見えなかったようで、これから起こることを知ることができなかったようだ。竜也は、あの時、今日これから起こることを知った。それは、護り手のみに許された能力である「未来視」と酷似している。
「あんな映像さえ見なきゃ、こんなとこ来るかよ……」
澤渡の屋敷は、建て直しや改装されたとはいえ、右近達が生きた場所であった。

京都御所の近くに建てられた澤渡邸は、都が東へ移ってもこのままであった。人の思念が渦巻く東の都よりも、風水によって築かれた古都の方が、怨念が溜まり易い。古より封じられた妖魔が数多くいることも手伝って、澤渡邸は、ここ京都を動いたことがない。事実、東京よりも京都の方が被害が甚大である。

ふと竜也が空を見上げると、ちょうど月が雲に隠れるところであった。視線を時計に落として時刻を確認する。午後8時ちょうど。月明かりに照らされてぼんやりと明るかった庭に闇が訪れた。

「そろそろか……」竜也は、そう言って立ち上がる。

部屋に近づくにつれ、4人が談笑している声が大きくなっていく。主に話しているのは和彦とのぞみ。特に和彦のマシンガントークが際立っている。竜也は、足音を立てずにその部屋へと急いだ。

何も言わずに廊下から姿を現した竜也に、四人の会話が止まる。

「竜也先輩、もう帰るんですか？」

のぞみは、竜也を見上げて寂しそうに言う。

「バイクは学校ですし、本日は泊まっていかれてはどうですか？和彦殿とのぞみ殿も泊まられますし」

右京は、心にもないことを言う。おそらく、水樹に言ってほしいとお願いされたのだろう。姫巫女の言うことには忠実に従わなければならないのが護り手の辛いところだ。水樹にはバレないように、一瞬苦虫を噛み潰したような表情をした。

悠長にしてるってことは、まだ視えてへんのか……？

竜也は、右京をジッと見た。そして、思い立ったように右京の横まで歩いていき、しゃがみ込んだ。

「ええんですか？」竜也は、そう言いながら右京の肩に手を置く。

しばらくの沈黙。

「水樹様！」

右京は、跳ねるように立ち上がった。

「何！？　どうしたの？」
「……今……視えて……」
右京はそう言いながら、しゃがんでいる竜也へとゆっくり顔を向けた。その視線を感じながら、竜也は右京と視線を交わすことをせずに、水樹の方を見ている。
「未来視か？」
和彦が立ち上がって言った。
「そうなの？　右京」
水樹は、青ざめた顔で右京を見上げた。のぞみも、同時に右京を見る。

成功したな……。

竜也は確信する。
そして、右京に顔を向ける４人目となるべく、とゆっくりと視線を合わせる。
「……坂上……」
（お前か？）という言葉を右京は飲み込んだ。
取り繕うのを忘れ、竜也を苗字で呼んだこと右京はにハッと口を押さえる。誰もそれに気がつかず、ただ、右京が何を視たのかだけを気にしていた。
「何？　右京、何を視たの？」水樹が不安そうに言った。
「妖の者が……」
そこで右京は言葉を止める。そして、膝から崩れ落ちそうになった水樹に駆け寄った。
「はっきりとした場所はわかりません……。しかし、妖の者がこの付近に現れます」
右京は、水樹を支えながら声を張り上げる。
「俺達で行こう。右京さんは水樹の側に」
竜也は、そう言うと和彦とのぞみの肩を叩いて、出発を促した。

「水樹、安心しや！　すぐに戻ってくるで！」
和彦は、親指を立てて水樹にウィンクした。のぞみもそれに習う。
「行こう」竜也はそう言って、地面を蹴る。
そして、３人の影が空に消えた。

第2章　夢？

4

夜風を体に感じながら、竜也は屋根から屋根へと飛んでいた。場所はわかっている。ただ、それを悟られないように回り道しながらそこへ向かっていた。

軽く後ろを振り向くと、和彦とのぞみの2人が3つ後ろの屋根の上にいるのが見えた。そこで、竜也は足を止める。

「竜也先輩、ちょお……飛ばしすぎ……。飛ぶの慣れてるんちゃう？」

肩で息をしながらのぞみが言った。

「この人は空手部にいてんで、一般人とは体力が違うんや」

和彦は、膝に手をついて腰を曲げた。

「お前らそんなんで防人がつとまるんか？」

竜也は、体力がない2人を眉をしかめて見下ろした。回り道をしていたら、妖の者に出会う前にバテてしまいそうである。嘆息して、竜也は前方を見つめた。

「つーか、お前らなんで俺の後を追ってきてんねん？」

「へ？」和彦が間抜けな声を出した。

「あれ？　竜也先輩、確信があってこっちに来てるんちゃうの？」のぞみが、目を丸くして言う。

「俺にわかると思うか？　右京さんだってはっきりとした場所はわからないって言ってたやろ？」

2人の顔がみるみるうちに青くなっていくのがわかる。目的のラーメン屋に入るために長い行列に一生懸命並んだら、ついた先が隣のお店だったような顔である。

「なんや！　ついてきて損した！！」

のぞみは、ガクリと膝を落とした。

「手分けして探そう。俺はこっちに行くから、和彦はのぞみと一緒にいろ。戦えねーんだから。ええか、見つけたらすぐに結界を張る事。人に見られるんやないで」
竜也はそう言うと、２人の前から姿を消した。
「何？　竜也先輩って防人として初めて戦うんやろ？　なんで私ら指図されてんの？」
のぞみは、ワケがわからないという表情をして和彦を睨み付けた。和彦は、肩を竦めて、一言「さぁ」と言った。
余計な２人を振り切った竜也は、一直線にその場所へと向かっていた。月が雲に隠れているせいで、空を飛んでいても人目につきにくく、移動が楽であった。次から次へと屋根へと飛び移り、すぐにその場所に到着した。
細い路地の袋小路に、二つの影が見える。
１つは、ＯＬらしい若い女。そして、もう１つは、黒い影のようなぼんやりとしたもので、かろうじて人の形をとっているように見えた。女は意識を失っているらしく、だらりと腕をたらしている。その影から発せられる気配は微弱なもので、下級な者であることが分かった。
この程度ならすぐ終わるな。
竜也は、大物でないことに安堵すると、屋根の上からそれを確認し、手で素早く印を作り、結界を張った。
この結界は、任意の空間を回りの空間から独立させる。中で何が起きていても人から見られることはなく、その中にいる人にも影響はない。戦いにおいて破損したものは、術者の力によって修復可能となる。
黒い影は、結界が張られたことに気がつき、素早く女から離れる。そして、竜也を見つけ、向かいの屋根へと跳躍した。
それは、明らかに人に在らざるものであった。その肌は岩のようにゴツゴツしていて深い緑で、血の滴るような赤い口が頬まで裂け、ニタリと笑っている。そして、その上には金色に光る目が２つつい

ている。それは、爬虫類を思わせる姿であった。
「小僧……防人か……」
口からボタボタと唾液をたらしながら、妖の者が言う。その瞳が、ギョロギョロと動いて周りを伺っている。
「1人か……」
竜也は、何も答えずに軽く腰を落とした。
「久々に現世に戻ってきたのだ。ゆっくりと食事を楽しもうと思っていたのに……、この罪は大きいぞ？」
妖の者がそう言うと、目をギラリと光らせた。口から滴り落ちる唾液が、足元のアスファルトを溶かしている。
「修繕には体力がいるねんで……やめてくれよな」
独り言ちながら、竜也は屋根を蹴って宙に飛ぶ。そして、脇にあった電柱を蹴り、方向を変えた。両腕を胸の辺りでクロスさせ、疾風のごとき速さで腕を腰まで引く。カマイタチを思わせる真空の刃が、妖の者を襲う。
ガキンッという音と共に、カマイタチは妖の者の腕にはじかれた。見ると、その腕から刃のようなものが突き出ている。粘膜のようなもので皮膚とつながっている刃が、その腕から生えていたのだ。
チッと軽く舌打ちをし、竜也は再び屋根の上に着地した。
「愚か者め」
妖の者は、そう言うと大きく開いた口から唾液を飛ばした。竜也は、それを軽やかによける。さっきまで足を着けていた屋根にその唾液が触れた。瞬間、ジュウと音を立てて瓦が溶けた。
もう一度、竜也は宙を飛ぶ。空中で一度左足をつき、それをそのまま軸足にして勢いよく回し蹴りを放った。竜巻を思わせる程の風が、その場に起こる。カマイタチの時と同じく、妖の者は刃をこちらに向けてその風を捕らえたが、耐え切れずに後方へ吹っ飛び、ブロック塀に思い切り背中をぶつけその場に崩れ落ちた。竜也は、そのすぐ前へと降りる。
うめき声を上げて起き上がろうとする妖の者の頭部を、竜也は思

い切り踏みつけた。ガキンという嫌な音を立てて、額がアスファルトにめり込んだ。ジワリとアスファルトに血がにじんでいく。
「言い残すことはあるか？」
冷たい視線をその足元に落としながら、竜也は言った。
「……」
何も言わない妖の者に、竜也は無情にも頭を踏み潰そうと足に力を入れた。その瞬間、竜也の首にヌメヌメしたものが巻きつく。突然の空気の遮断に、短い息を漏らして竜也はその場に片膝をつく。
手でそれを触り、目でそれを確認する。
それは、妖の者の腕であった。踏みつけられて這いつくばっていた体から、腕だけが伸びて竜也の首に巻きついたのだ。油断していた竜也は、それに気がつかずに成すがままになってしまった。
「クックックッ……バカめ。我は蛇の化身。このまま絞め殺してくれる」
妖の者は、ゆっくりとその顔をあげた。額が割れ、血が滴り落ちている。流れてくる血を長い舌でベロリとなめまわし、満足そうにトロリとした目を空に向けると、竜也に撒きついている腕をいっそうきつくした。
「カハッ」
竜也の体が宙に浮いた。目をきつく閉じ、苦痛の表情を妖の者に見せていた。
「その苦痛の表情が調味料になるのだ。ヒャハッヒャハハハハ！！」
妖の者がそう言うと、ギリギリという音を立てて腕がしまった。竜也の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

……野郎……ッ

竜也は、持てる力を全て右手に集中させた。
まばゆい光が当りを包む。
「ハァ……ハァ……ッハァ……」

竜也の体内に酸素が戻った。
その代わりに、妖の者の両腕が肘の辺りからなくなっている。その断面から、おびただしい量の血がボタボタと落ちている。
「ぎゃあああああああああああああああああああああああ！」
一瞬遅れて、妖の者の叫びが当りにこだまする。
「貴様！　一体何を……！」
妖の者は、なぜ自分の両腕がなくなったのか理解できずに竜也に問う。
「さぁな」
竜也は、そう言うと、右手に持った剣で妖の者の心臓を突いた。カッと目を見開き、妖の者は口から大量の血を吐く。不規則な呼吸をし、体を痙攣させる。そして、妖の者の四肢の力が失せ、ダラリと首を下ろした。
「竜也……先輩……」
後ろで声がし、竜也は驚いて振り向く。そこには、和彦とのぞみが立っていた。
「いたのか」
「今、着いたとこや……これ……先輩……が？」
のぞみは、妖の者を指差して言った。
「見てわからへんか？　俺以外に誰が殺るんや」
竜也は、妖の者に突き刺さっていた剣を引き抜く。ゴプッと不快な音がして剣がその体から刀身を露にする。と同時に、そこから血が流れ出した。そして、次の瞬間、サラサラと灰のように体が崩れていった。流れた血も、灰となって夜風に運ばれていく。
妖の者は、倒されると灰になり、一時的に肉体を失う。その魂を消滅させなければ、何度も蘇るのである。
「あそこの路地に女が倒れてる。和彦、行け」
「あ……ああ」
和彦は、言われるがままに竜也が指した路地の方へと駆けていっ

た。
「竜也先輩も、剣術を？」
のぞみは、竜也がもった剣を指差して言う。
「ああ、これは……ちょっとピンチになったから使ただけや。滅多に使わへん」
竜也がそう言うと、剣は光となって消えた。
妖の者の腕を切ったそれは、竜也の家に伝わる、宝刀であった。形状は日本刀である。妖の者の腕が首に巻きついた時、竜也はこれを出した。そして、両腕を切断したのである。
「ああ、後処理が面倒やな」
竜也は、そう言って溶けたアスファルトや屋根、砕け散ったブロック塀に向かって印を結んだ。すると、まるでビデオを逆送りにしているかのように、溶けたものはボコボコと再生し、壊れたものは破片が元に戻った。全て元通りになったことを確認すると、竜也は和彦の方へと向かった。のぞみもそれを追いかける。
女が倒れていた路地に入ると、そこには女を抱きかかえた和彦の後姿が見えた。
「大丈夫そう？」
のぞみは、和彦の脇に座り込んで言った。女を見ると、気を失っていたが、頬に赤みがあり、妖の者の瘴気に当てられた症状は見られなかった。
「うん、来た時は真っ青で、だいぶ瘴気に当てられてたけど、もう大丈夫」
和彦は、額に汗を浮かべてのぞみに笑いかけた。
「それなら、結界を解くで」
竜也は、ポケットに手を突っ込みながら和彦を見下ろす。
「了解、そのうち気がつくだろうし、この人には悪いけど、ちょっとこの塀に寄りかからせておこう」
和彦は、そう言って女を近くの塀へ寄りかからせた。その時「うーん」と女が言ったので、和彦はあわててその場を離れる。

3人が屋根の上へ飛び上がると、竜也は印を結んで結界を解いた。のぞみは、周りの空気が少しだけ軽くなった気がして深呼吸をした。

「なんや、竜也先輩。初めて妖の者と交戦した割りにはよ片付いたんやなぁ」

和彦は、竜也をまるで有名人を見ているかのように、しげしげと上から下までなめるように見ていた。それを感じた竜也は、まゆをしかめて体を捻る。

散々夢の中で右近が妖の者と戦ってたからな……。嫌でも体で覚えるさ……。

「ああ、まあ、雑魚やったしな」竜也はそう言って屋根を蹴る。「帰るぞ、右京に報告しないとな」次々に屋根を飛び越えながら、竜也は2人に言った。

どんどん小さくなっていく竜也を、2人は必死で追いかけた。

第2章　夢？

5

「素敵な庭ね。桜がこんなに舞って」
私は、庭を眺めながら呟いた。
手を差し伸べると、風に舞う桜の花びらが、1つ、2つとその手に落ち、まだ風に遊ばれている。淡いピンクのハート形の花びらは、私の手の上で恋を語らうように寄り添った。
あれ？　私の手、こんなに小さかったかしら……？
私は、自分の手の大きさに少し驚く。いつも見ている自分の手ではないような気がして、心の一部分がモヤモヤするような感覚に陥った。
「はい、頼朝公からの贈り物にございます」
私のすぐ脇にいた男がそう答える。時の将軍から送られた立派な桜を眺めながら、私は彼と一緒に廊下歩いていた。

彼の名前は何だっけ。……私の名は？　私は誰？

私は、振り返って彼を見る。袴姿の彼がそこにいる。長い黒髪を無造作に高い位置でくくっている。急に振り向いた私に、彼はビックリした顔をする。その表情が子供の様で思わず抱き締めたくなった。
胸が熱い。
思い出した。私は、彼を愛している。誰よりも、愛しい、私だけの……。
「右近」
彼の名を呼んで、私はその手を握った。温かい手のぬくもりが伝わってくる。ドキンと胸が高鳴り、顔が熱くなる。こんな気持ちは

初めてかもしれない。いいえ、「私」は知っていた。知らないのは「私」。

「この桜を、いつまでもあなたと一緒に見ていたいわ」

「私の命のある限り、あなたと共にいます。許されるのであれば、生まれ変わっても共に……」

彼は、そう言うとジッと私を見つめた。私も、それを見つめ返す。

なんとも言えない感情が体の中心から沸いてくる。湧き水のようにとめどなく溢れ出るそれを、私は止める術を知らない。それを知っているならどれ程楽だろう。こんなにも辛く苦しい日々を続けるのなら、いっそのこと感情を捨ててしまいたい。でも、こんなにも右近のことを愛してる感情を忘れたくない。この痛みは、私の生きる糧となるのだ。

長い間だったのか一瞬だったのか、どれ程の時が流れたのかわからなかった。

ただ、こうして見つめて、触れ合える距離にいることができることが幸せだった。

本当に……、心から、幸せだった。

私は彼から手を離し、再び庭に目を向けた。

「私も、生まれ変わってもまたあなたを愛すわ」

「はい」

右近は、悲しそうな目をしてうなずいた。私も、それに答えるようにゆっくりうなずいた。おそらく、同じように悲しい目を私は右近に向けているのだろう。

今生で結ばれないのなら、せめて来世で結ばれたい。次の世では、姫巫女じゃなく、ただの女でありたい。普通の女になって、生まれ変わった右近と幸せになりたい。

あの時の、たった一度の契りを、私はこれからあの人と一緒になっても忘れない。来世でも忘れないだろう。それは、私の心の支えとなり、光を照らす。どんなに辛い事があっても、耐えられる。例え、それが神に背く事だとしても、私は後悔などしていない。

相変わらず、桜は散り続ける。淡いピンクの吹雪で、私と右近を惑わす。
「そろそろ、中に入りましょう」そう言って、右近は私に手を差し伸べる。
そして、私の名を呼ぶ。
「弥生様」

水樹の世界が変わった。
目が覚めたことに気がつかないほど何もかもがごちゃごちゃになっている。見慣れた天井を見つめながら自分が誰なのかぼんやりと考える。
私は……
水樹は、自分の手を見つめる。先ほどよりも、一回り大きな手が目の前に見える。水樹は、ネジを巻いて突然動き出した人形のように跳ね起きた。そして、襖を開け、廊下に飛び出る。目の前に、桜の花びらが舞う庭が見える。夢と寸分たがわぬ風景がそこにはあった。目の前が真っ暗になる。
今のは……ただの夢でしょう……。うちの庭が出てきたのも、私が姫巫女だったのも……。なのに……なんでこんなに悲しいの？
水樹は、そっと自分の頬に触れた。
「あれ？　泣いてる……」
指先に涙の感触があった。知らないうちに、水樹は涙を流していた。目覚めてもなお、弥生の意識が自分の中に息づいている。心が締め付けられるように苦しい。風が桜の花びらを運ぶたびに、淡いピンクの幻想が見えた。
生まれ変わっても……また……あなたを……
人の気配がして、水樹は横を見る。廊下の先に、同じように庭を見ている人物がいることに気がつく。自分よりも先に廊下に出て、

その景色を見ていたようである。
「竜也先輩……？」水樹はぽつりと呟いた。「何してるんだろう」
竜也は、こちらに気がついていないようでジッと庭を見ている。ガラス戸を開け放しにしているせいで、廊下まで桜の花びらが入ってきていた。
ふとこちらの存在に気がつき、竜也はこちらに目を向けた。瞬間の視線の交差。
竜也の背後に、夢に出てきた袴姿の男がぼんやりと見えた。ゆらりと陽炎のように見えるその人は、間違いなく「右近」と夢で自分が呼んでいた男であった。
「水樹……」
背後に弥生を見たのか、竜也は驚いた顔をこちらに向けていた。陽炎の男は、水樹と視線を合わすと目を細めて微笑んだ。竜也が一歩近づく。それと同時に陽炎も近づいてくる。
「右近」
2人の頭の中に、弥生の声が響く。水樹は、反射的に耳を塞いだ。自分の脇を、何かが通り過ぎていく感覚がする。目の前に見えるそれは、十二単を着ている小柄な女であった。それは、夢の中の女、弥生であることがすぐにわかった。
陽炎の二人は、肉体を持った2人のちょうど中間地点で抱き合った。水樹がそちらに顔を向けると、右近と竜也が重なって見えた。
「弥生様」
耳を塞いでも聞こえてくる声に、水樹は驚いて短い悲鳴をあげ、そのまま自分の部屋へと飛び込み、勢いよく布団の中に入る。頭から布団をかぶり、ぎゅうっと耳を塞いで丸くなる。
怖い……怖い……。よくわからないけど、怖い……！　あんな夢を見たから幻が見えただけよ。そうに決まってる！
水樹は、あふれ出る涙をどうにも出来ずに嗚咽が漏れる。

自分の心なのに、自分ではない誰かが心を支配しているような錯覚が起こる。全然悲しくないのに悲しい。全然懐かしくないのに懐かしい。全然愛しくないのに愛しい。自分は入れ物で、中には違う人が入ってしまっているのではないかと、水樹は頭を振った。ただの夢が、自分をここまで支配してしまった事に、水樹は狂いそうになった。２人分の意識が混在し、頭が破裂寸前である。

水樹は、そのまま意識を混濁させた。

「水樹様、おはようございます」

どれ程の時間がたったのだろうか。いつものように、右京が自分を呼ぶ声が遠くでする。その声で、現実の世界に戻れたような気がした。ゆっくり目を開くと、まだ暗闇で、布団を自分の上から下ろして深呼吸をする。

酸素が肺を満たし、頭がクリアになってきた。

「おはよう、右京。すぐに行くわ」

まだ起きていなかったことを悟られないように、水樹は声を整えて言った。

水樹は、右京の足音が遠ざかると、急いで顔を洗って歯を磨き、制服に着替えた。布団をかぶっていたせいで、髪の毛が少し乱れている。少し気になったが、水樹はそのまま部屋を飛び出した。

座敷机につくと、全員がすでに揃っていた。遅いことを右京が嗜め、全員の食事を運んだ。当主である水樹が、その上座に座わり、朝の挨拶がされる。

「竜也先輩、よく眠れましたか？」

のぞみは、竜也に微笑みかけながら言った。それを聞いた水樹は、体を一瞬強張らせた。

「ああ」

「体調もよさそうですね」

一瞬にして、微妙な空気がこの場を支配する。和彦は、チラチラとのぞみを盗み見ているし、のぞみは、それに答えて和彦と目を合

わせたり、水樹を盗み見したりしていた。
「ねぇ、右京」
水樹は、思いついたようにハッとした表情をした。
「どうしました？　水樹様」
「澤渡のね、家系図ってどこにあるか知らない？」
ガチャンという音がして、全員が視線をそちらに向けた。
「わっ！　竜也先輩、どないしたん」
「あああ、布巾！」
音の犯人は、竜也であった。手をすべらせ、持っていた味噌汁の器を食卓に落としてしまったのだ。竜也は、机にぶちまけられた味噌汁を眺めながら、茫然自失しているようだった。
「竜也殿、大丈夫ですか？」
右京は、微動だにしない竜也の肩を叩いた。
「あ、わりぃ。手がすべって……」
竜也は、こぼれた味噌汁を拭いていたのぞみの手から布巾を奪うと、自分で処理を始めた。
「遙様の部屋に確か……」
「そんなもん調べてどうするつもりや？」
竜也は、手を止めて水樹を睨み付けた。
水樹は、竜也の視線に耐え切れずに下を向いた。それでもなお、竜也は水樹を睨みつけている。
「ちょお、竜也先輩、なんでそんな事につっかかるん？」
のぞみは、竜也の視線の先に顔を割り込ませた。竜也は、のぞみに焦点を合わせて睨みつける。のぞみも、負けじと竜也を睨みつけた。
「くだらないことでも調べようとしたんやろ」
「そんなこと、竜也先輩には関係ないやん。水樹が自分の家の事調べるぐらい、なんでそないに怒るん？」
「……」竜也は、のぞみを睨んだまま黙っている。
「竜也先輩、ちょっとおかしいで？　昨日倒れてから調子悪いんと

ちゃうか？」
和彦は、心配そうに竜也を見た。目だけを動かして、竜也は和彦を見る。
「知りたきゃ好きにしろ……」
竜也は、舌打ちをしてそう言った。
「……勝手にします！」
水樹は、竜也に負けないように言う。
無言の戦いが繰り広げられ、見るに見かねた右京が2人を止めに入る。
「お2人とも、いい加減に食べてしまわないと遅刻しますよ」
「せやで、2人ともはよご飯食べや」
和彦が、右京に便乗して言う。
そして、ようやくにらみ合いをやめ、2人はご飯を食べ始めた。のぞみは、それを見ながらやれやれと肩を竦めた

第2章　夢？

6

授業に身が入らず、竜也は溜め息をついて窓の外を眺めた。生憎の曇り空に、自分の心を移されたようで竜也は心の中で舌打ちをした。気分が晴れない。原因は分かっていた。今朝の夢と水樹の言動だ。

家系図……。水樹がそれが知りたいということは、水樹も今朝あの夢を見ていたということや。俺は右近となり、水樹は弥生となって過去を体験した。……だから嫌やったんや。澤渡の家に泊まるのは……ッ！

俺があの家に泊まったせいで……俺があの夢を見たせいで同調（シンクロ）して水樹まであの二人のことを夢に見てしまった……。自分が泊まることにしたとはいえ……クソッ。

竜也は、左手に持っているシャープペンシルをクルクルと回していた。授業を聞いているフリをするために、視線を教科書へと落とす。

水樹は、家系図に「弥生」という文字を見つけたらどうするやろ。実在した人物だということを知って、どう思う？　あれだけリアルに体験したなら、自分の過去と勘違いするかもしれない。実際、俺も一時期そう思った時があった……。でも、あれは俺やない。右近という人間の記憶を、俺が垣間見ているだけや。

しかも、こともあろうに夢の中のセリフに「生まれ変わっても」

とかなんとかってのがあってんな。残念ながら、お前らは記憶の中の存在でしかない。生まれ変わりなんて、あるわけないんや。

問題は水樹や。今朝、俺の後ろに右近を見たのは誤算やった。だが、護り手という右近の立場からすれば、右京と重ねるやろう。右近の末裔は右京やからな。名前も似てるやないか。フッ……案外好都合かもしれへんな。

和彦は明らかに俺に敵意を持っているが、水樹とのぞみはまだ俺に希望を持っている。達弥と俺は違うんや。いい加減、俺にかまうのも飽きればいいものを……。変な奴ら。

……待てよ、案外、水樹は本当に弥生の生まれ変わりかもしれへんな。水樹の力が発動しないんは、また姫巫女として産まれてしまった弥生の意識が、深いところで力を封じているのかも……。なんて、まさかな。小説家にでもなるつもりか俺は……。

竜也は、口の端を少し上げて笑った。

その瞬間、頭の中でパキンと音がする。脳裏に映像がよぎる。右から左へ、左から右へ。竜也は、目と閉じてそれを探る。底から這い上がってくる感覚に、意識を集中させた。ゆっくりと、確実にそれを掴み、竜也は未来を手にする。

まずいな……。二夜連続とは……。

竜也は、ゆっくりと片目を開けた。と、自分の顔の目の前に教師の顔があった。

「うっわ！」

「坂上、1時間目から居眠りとはええ度胸やないか」

「寝てない！　寝てないで！　ちょお、コンタクトが乾いて目を閉じてただけやん！」

竜也は、首を振って必死に言い訳をする。クラスメイトが、クス

クスと笑っているのが耳につく。
「じゃあ、あの問題を解いてもらおうか？」
教師が黒板を指すと、そこにはいつの間にか問題が書かれていた。
「わかりました」
竜也は、ダルそうに立ち上がり、壇上に上がった。そして、黒板に向かってチョークを持つ。その手を顎にあてて問題をさっと読み、リズミカルな音を立てながら問題を解いていった。

一方、水樹もその頃、今朝の夢について考えていた。
竜也と同じく上の空で授業を受けている。開いたノートにシャープペンシルを置いているものの、一向に板書が進まない。

今朝の夢……、なんだったんだろう……。あれは私……？

竜也の懸念通り、水樹は弥生を自分と同一化していた。

なんか、あまりにもリアルだったしなぁ。竜也先輩のせいで家系図確認できなかったし、帰ってから「弥生」って人がいたかどうか調べてみよう。

でも、調べて何になるんだろう。

あー、姫巫女と護り手が恋に落ちちゃうなんて、ロミオとジュリエットみたい。決して結ばれることがないなんて、かわいそう。

私と右京が恋に落ちちゃうみたいなものでしょう？　わー想像できないなぁ。ずっと一緒に育ってきたから、私と右京はもう家族みたいなもんだし、恋愛感情なんて生まれないよ。

……でも、仮に……。本当に仮の話、弥生って人が私の前身なん

だとしたら、右近は誰になって今を生きているのかしら。私が同じ血筋の中に生を受けたということは、右近も同じ……右京……？

水樹の手に少し力がこもり、ノートに当てていたシャープペンシルの芯がパキッと軽い音を立てて折れた。少し汚れてしまったノートを、水樹は消しゴムで綺麗にした。そして、板書を始める。

まさか……、でも、もし右京が右近なのだとしたら、私は右京を好きになるのかしら。

板書をする水樹の手が止まる。一瞬考えてから、小さく頭を振った。

やっぱり、ない。

恋愛なんて、まだ興味がない……。私はそれよりも姫巫女としての自分をなんとかしたい。みんなが戦って傷ついている姿を見ながら、私は一人安全な場所で守られているなんてできない……。

水樹は、少し視線を落とした。目頭が少し熱くなる。

でも……、一つだけ。これは恋ではないけれど……竜也先輩の存在が、私の中で大きくなっていく。冷たいけど、どこかにやさしさがある。絶対、竜也先輩は悪い人じゃない。右京と和彦は気に入らないみたいだけど、私は……。

それに、今朝、竜也先輩の後ろに右近を見た。あれはなぜ？

水樹は、そこで板書していた手を止める。なぜか、寂しい気持ちがいっぱいになった。

なぜ、そう思ったのか、水樹はまだ知らない。

第2章　夢？

7

のぞみの携帯が突然鳴った。
時間は、真夜中の0時すぎ。目を閉じたまま、布団から手を出して音の主を探る。ようやくつかんだそれを、のぞみは眠たい目を擦って開き、ディスプレイを見る。白い光りに、のぞみは一瞬目を閉じる。

小早川……右京……。右京さん……？　あーぁ、仕事かぁ。

のぞみは飛び起きてメールを開く。

題名　緊急招集
本文　早急に澤渡邸へ集合せよ

至極シンプルなメールが目に飛び込んできた。何年たっても、このメールの題名と本文は変わった事がない。緊急招集用のメールとして登録してあるのかもしれない。
両手で軽く頬を叩くと、のぞみはベッドの脇の窓を開けた。春先とはいえ、冷たい空気が頬にしみる。
「寒いなぁ」
のぞみはそう言うと、ジャケットを羽織って屋根へと跳んだ。そして、軽やかに屋根から屋根へと飛び移り、澤渡邸を目指した。
「のぞみ！」
後方から声がする。
「和彦ぉ、お前寝癖つきすぎやろ」
のぞみは、右側だけハネている和彦の頭にお腹を抱えて笑った。

「緊急招集や！　笑(わろ)てないではよ行くで！」和彦は、顔を赤くしながらのぞみに言った。
しかし、次の屋根で着地しそこねて転んでしまった。
「アホ」
のぞみは、そう言うと和彦を置いて先に行く。和彦は、すぐに体制を整え、それを追いかけた。
2人が澤渡の屋敷の庭に到着すると、そこには、一番遠いはずの竜也の姿がすでにあった。右京と水樹もその脇にいる。
「なんか、言い合ってへん？」
少し離れた場所に降りた2人は、妙な雰囲気の3人に気がついた。竜也と水樹が言い合いをしているようである。右京は、それを止めようとしているように見える。その珍しい図式に、2人は動揺した。
「だから、着いてくるなって言っとるやろ！」竜也が、水樹を怒鳴りつける。
「でも、私だけここにいるなんてできないよ！」
水樹も、竜也に負けないように怒鳴りつける。大人しい水樹の新しい一面を見たようで、和彦とのぞみは驚いた。
「お前がおると邪魔やねん！」
「邪魔しないようにする。だから着いていく！」
「いい加減にせえ、テメェ」
「しない！　ついてくったらついてくの！」
「まぁ、お2人とも、落ち着いて……」
「右京さんも止めろよ！　あんたが止めるべきやろ」
「右京は私の味方よ！」
「味方？　ハッ、危ない場所に連れてくのが味方のすることなんか？　それが護り手の仕事なんか？　命令が絶対とはいえ、それはきいたらあかんやろ！」
和彦とのぞみは、2人の掛け合いに、首を左右に振ることしかできなかった。右京でさえ、この2人のデットヒートには口を出せず、ただ、オロオロしているだけだった。

「私だけが安全な場所にるのは……辛い」水樹は声を震わせていった。
「せやから、お前はそれでええねん！」
「よくない。みんなが戦ってるのに、私……」
「お前は、守られてればええねん」竜也は、泣きそうな顔で言う。
「お前が来ると、お前のことが気になって戦われへん。お前のことが……心配やねん」
竜也の言葉に、水樹は言葉を失う。右京も、和彦も、のぞみも竜也を見る。
「頼むから……お前はここにおってくれ」
悲痛な叫びのような竜也のその言葉は、水樹をその場に残らせるだけの説得力があった。小さく、少し掠れたその声は、竜也の本心から出た言葉だった。
姫巫女の喪失は、世界の終わりを意味する。力のない姫巫女は、妖の者の格好の的である。いくら右京が側にいようとも、いくらでも攻撃する方法はあるのだ。澤渡の屋敷に右京と2人で残ることすら、危険が伴う。妖の者が出没するのは一箇所とは限らないからだ。右京がついているとはいえ、守りが完璧なわけではない。それなりに穴はあるのだ。しかし、自らその場に赴くよりは、危険度は低い。
竜也は、自分の側に水樹がいることで、水樹を守ることを考えながら攻撃しなくてはいけなくなるのを恐れていた。誰かを守りながらの戦いは、集中力がいる。これからどんどん妖の者は力を増すだろう。そんな中、自分がどれ程水樹を守ってやれるのかがわからなかったのだ。
ほら……、やっぱり竜也先輩は優しい……。
「……わかった……」水樹は、小さくそう言った。
「ほな、行ってくる」
竜也は、水樹が残ることを確認すると、すぐに夜の闇へと消えて

いった。和彦とのぞみも、それに続いた。
「行っちゃった」
水樹は、3人が消えた方向を見ながら呟く。
「さあ、夜風に当たりすぎるのはよくありません、3人が戻ってくるのを待ちましょう」
右京は、水樹の肩を抱いて家の中へと連れて行った。
「……」
机の上にひじをつき、水樹は両手に顔を乗せていた。ぷくっと頬を膨らまし、じっと右京を見ている。
「みんな大丈夫かな」
「心配することはないですよ」
「竜也先輩……私の事心配してくれてたんだね」
「そうですね」
「でも、守られてるだけじゃいやなの」
「はい」
「みんなが戦っているのを、しっかりと見ておきたいのよ」
「いつか、水樹様が力を覚醒されてから、その場へ一緒に行けばよいではないですか」
「そんなの待ってたら、一生行けないよ」
水樹は、右京を睨んで言った。
「そんなことはございません。水樹様はご自分でご自分の可能性をつぶしているのではないですか？」
右京は、水樹に煎茶を出しながら言った。水樹は、温かいそれを両手で持つと、ふーっと息を吐いた。白い湯気が水樹の前でふわりと広がった。それに、一瞬今朝の幻影を重ねる。陽炎のように不確かで、儚い2人の姿が頭に浮かぶ。
「ああ、そういえば、家系図。遅くなって申し訳ありません。昼から探していたのですが、水樹様がお休みになってからようやく見つかりました」
水樹の心臓がドキンと高鳴った。

右京が後ろの棚を探っている間、今朝見た夢が鮮明に蘇ってくる。
しばらくして、右京は手に古い巻物のようなものを持って振り返った。年季が入ってたそれは、今にもボロボロと崩れ落ちそうである。
「何度か書き写したものだとは思うのですが、もうボロボロですねぇ」右京は、水樹に手渡しながら言った。「どうぞ」
「うん……そうだね」
水樹は、逸る気持ちを抑えて紐を解いていく。手が震えてうまくいかない。ようやく開いたそれは、軽快な音を立てて横に滑っていった。
一番最後に自分の名前があった。
そこから、父親の名前「圭一」と、母親の名前「遙」。祖父「省三」と、祖母「京子」の名前が続いている。代をさかのぼっていくごとに、水樹の手はどんどん震え、心臓は高鳴りを増していく。
あった……。
ようやく、水樹は「弥生」という名前を発見する。その隣にある名前を確認すると「正親」となっていた。安心したような、がっかりしたような、複雑な気分が水樹を襲う。

そうよね……、澤渡の家系図に右近の名前があるわけがない……。
静かに家系図を巻きなおしながら、水樹はその歴史を辿る。目的であった弥生からはじまり、静―千代―誉子……と続いていく。
「こうやって見ると、家系図って大体男子中心なのに、澤渡は女子中心ね」
「姫巫女一族は女系家族ですから。男は生まれませんよ。逆に、私達護り手一族は男しか生まれません。防人は男女ともに生まれますが、全ての一族において、能力は長子が受け継ぎます」
右京は、そこまで言うと、深い溜め息をついた。
「だから、竜也殿はおかしいのですよ……」右京が水樹を見つめて

言った。「双子だから能力も二分されたんでしょうかね……」
「へぇ」
水樹は、目を泳がせながら答える。知らない事実が多すぎた。水樹は、一族の事を何も知らないまま今日まで生きてきたことを実感する。母親が、全てを水樹に伝える前に死を迎えた事が悔やまれる。
病気ばかりは、いくら護り手の未来視があっても避けることはできない。水樹の母、遙は、全てを話すには幼すぎる水樹を、右京に託してこの世を去った。それはどれ程無念だったのだろう。
「……もうみんな妖の者は倒せたのかしら」水樹は、家系図を巻き直しながら言った。
「終わったで」
右京と水樹が庭を見ると、のぞみがそこに立っていた。
水樹は、驚いて折角巻いた家系図を落としてしまう。家系図は、その拍子にコロコロと転がっていき、姫巫女一族の全歴史がそこに開かれた。
「みんなお疲れ様」
水樹は、動揺しながらも、庭にいるみんなに言いながら立ち上がった。転がった家系図を、しゃがんで掴もうとする。その瞬間、手が伸びてきた。
「家系図……」
その手は、竜也のものだった。水樹がそれを拾う前に掴みとり、一瞬だけチラリとそれを見る。そして、すぐに弥生の名前を発見した。

やっぱり、実在したんか……。

竜也は、すぐに家系図を巻き直し、「気ィつけや」と言って水樹に手渡した。
「みなさん、お茶だけいれたので、どうぞ飲んでいってください」
右京が、軽く手を叩いて言った。

「おおきに！」和彦がそう言いながら、座布団の上にいち早く座った。
そうして、何事もなかったかのように談笑が始まった。
「どんな妖の者だったの？」
水樹は、頬杖をしながらのぞみに問いかける。まだ熱いお茶に息を吹きかけながら、のぞみは水樹を見た。
「うーん、なんか犬みたいな奴やった。雑魚や雑魚」
のぞみは、そう言って少しお茶をすすった。
「そう、よかったわ」水樹は、そう言って自分の湯のみを両手で掴む。
湯のみに残ったお茶に自分の顔を映しながら、水樹は口を閉じた。しばらくの間、和彦とのぞみの声だけになり、みんながその会話に耳を傾けていた。
竜也は、小さく溜め息をついてから水樹に目を向けた。視線がぶつかり、そのまま2人は見つめあう。竜也はこちらを向いていた水樹に驚き、水樹は、こちらを見た竜也に驚く。
夢の中で、弥生と視線を交わした右近に似た感情が、竜也の中に沸きあがる。
視線をはずしたいのに、体が石になってしまったように固まっている。和彦やのぞみの談笑が遠くなる。
右京は、ふと水樹を見る。そして、2人が視線を合わせていることに気がついた。水樹が竜也を見つめる視線と、竜也が水樹を見つめる視線は、同じ匂いがする。その新しい感情の芽吹きは、なんとしても阻止しなくてはならない。
「水樹様」
右京が水樹の肩を叩く。ハッと水樹は我に返り、視線を竜也からはずした。竜也も、水樹が視線をはずしたことで動けるようになる。下を向き、自分の手を見つめた。
「どうされました？」
「な……なんでもない。そろそろ……私寝るね。みんなお疲れ様、

おやすみなさい」
水樹は、フラフラと立ちあがると、そのまま自室へと帰っていった。
そして、解散となった。
「ほな、俺も帰るわ、右京さん茶ぁごちそうさん」
「ほな、また明日」
和彦とのぞみが夜空に消え、竜也と右京がその場に残った。
「坂上」右京は、竜也のすぐ横に立って言った。
「水樹様の心を乱すようなことはするな」
竜也は、右京に悟られないように左手をピクリと動かした。
水樹が竜也のことを気にかけていること、を右京は知っている。
今夜、水樹は竜也の優しさに触れ、かなり動揺していることも知っていた。
水樹の妨げになることは、全て排除しなくてはならない。
「俺は……」
「話はそれだけだ。早く帰れ」
右京は、それだけ言うと、竜也に背を向けて机の上を片付けはじめる。竜也は、何も言わずにその場を後にした。

第3章　覚醒？

1

ここ一週間、毎晩のように緊急招集がされた。おかげでほぼ全員が寝不足である。

水樹は、毎晩防人達を見送り、何もできない自分を責める。右京は、いつもそのフォローにまわり、防人達は夜中の出動に疲労がたまる。活性化しつつある妖の者の動きに、口には出さずとも、水樹の覚醒を、右京は切望していた。

疲れが取れていない体に、バイクの低いエンジン音が染み渡った。クラッチを握る手が僅かにすべる。竜也は、前方に見える信号が黄色に変わるのを見て、ブレーキをかけた。体に感じる風が弱くなり、ゆるやかにバイクは失速していく。目の前の横断歩道を歩くサラリーマン達の波を見ながら、竜也は、軽く溜め息をついた。

水樹と竜也の心の変化に、右京は敏感に反応している。緊急招集の際も、2人が極力近づかないように、右京は水樹を隠すように立っていた。

和彦とのぞみも、右京のその態度に薄々気づき始め、2人の間の不協和音が見え始めていた。

しかし、離されれば離されるほど、思いが募るのは人の性である。水樹は、気になる存在だったはずの竜也に、かすかに恋心が芽生えていた。竜也の優しさに触れた時、すでに時は遅かったのであろう。

脇に見える信号が、点滅を始める。行き交う人々はそれを気にも留めずに悠々と目の前を歩いく。そこから視線をはずし、目の前の信号に顔を向けた。

俺は何がしたいねん……。

アクセルを回しながら、答えが返ることのない自問をした。
竜也の視界に、チラホラと同じ制服を着た生徒の姿が見える。交差点の角を曲がると、そこには高校の裏門が見えた。
学校の中に入れば、嫌でも水樹と顔を合わせてしまう。その時、自分がどんな表情をしているかわからない。竜也は、思った以上に自分が水樹に思い入れしてしまっていることに焦る。
これ程までに、水樹の事を思うようになったのは、間違いなくあの夢のせいであった。
竜也には、右近の目的がわからない。自分が許されぬ恋をして辛い思いをしたのなら、なぜ、竜也にその道を歩かせようとするのだろうか。
毎夜、右近の目を通して竜也は姫巫女を慈しむ。遠い記憶。彼が愛した姫君。弥生と水樹を同一視してしまう程、竜也は右近の影響を受けていた。
後悔しても、時はすでに遅い。
後戻りはできない。
水樹に出会う前から知っていた。右近から受け継いだこの未来視で。自分がどうなるのかを竜也は知っていたのだ。
だからこそ、竜也は、運命を変えようと必死にもがいた。
裏門から学校へ入り、駐輪場までバイクを押していく。学校の生徒が、元気よく竜也を追い越していく。彼らには希望があるのだ。普通に生活し、普通に恋をして、普通に勉強をする。そんな生活に、竜也はもう戻れない。

俺は右近と同じ道を辿らない。

歩きながら、竜也はそのことだけを考えていた。
俺は水樹を愛さない。絶対に好きになることはない。
「あ、先輩、おはようございます」
ふと、背後で声がする。振り返ると、3人がそこに立っている。

同じ道を辿るものか……。嫌われて、遠ざけて、近寄らないように……。
竜也が水樹に顔を向けると、水樹は柔らかく笑った。それだけで、竜也の心臓はドクンと高鳴った。
なのに……なんで……、まだ笑うんだ……。
「あれ？　竜也先輩、どこか痛いんか？」
竜也は、笑うと同時に涙を流していた。和彦に背を向けると、竜也は歩き出した。
「コンタクトがずれただけや」
結局、俺は右近に踊らされとるんか……。俺は、奴と同じ道を辿らなあかんのか。
竜也は、左手をリストバンドに添えながら、右手に力を入れた。手のひらに爪が食い込み、少し痛かった。しかし、その痛みは、胸の痛みよりも小さい。
「ちょっと？　水樹？」
そんな竜也の背中を見ていた水樹は、その場にうずくまった。のぞみは、それに気がつくと、しゃがんで水樹の顔を覗き込んだ。
「水樹……」
「なんや、どないしたん」
和彦は、水樹が落とした鞄を拾いながら覗き込んだ。
「……ッ」
「私……、どうしたらいいかわからない」
水樹は、わずかに肩を震わせながら言った。地面に、水樹が流した涙が染み込む。
「水樹、先生には私が言っておくから、保健室で休んで」
のぞみは、そう言って和彦を見た。和彦はうなずくと、水樹を抱

きかかえて校舎へと走る。水樹と和彦の鞄を持って、のぞみはその後を追った。
３人は、途中で竜也を追い越した。すれ違いざま、のぞみはなんとなく竜也に悪態をつきたくて、睨み付けた。
「……なんや？　あいつら」
走っていく姿を見ながら、なぜ睨まれたのかわからず、竜也は訝しげな顔をした。
「やばい……やばいで和彦」
のぞみは、保健室の外に和彦といた。
養護教諭には、水樹は貧血で倒れたと話し、休ませることにした。防人は、学校での水樹を任されている為、どんな場合でも水樹１人にするわけにはいかない。養護教諭も、真実は教えられていなくても、水樹を１人にしてはいけないということを上から知らされている為、のぞみが保健室に残ることをしぶしぶ許可した。
水樹の様子がおかしいことに気がついたのぞみは、和彦を呼びとめ、廊下で緊急会議をしていた。
「水樹は、竜也先輩のことが好きなんやと思う」
「はぁ！？」和彦は、間抜けな声を出した。
「シッ！」のぞみは、人差し指を立てて言った。「右京さんも、最近なんかおかしかったやん。あれは、多分水樹が竜也先輩のこと好きなんに気がついたんちゃうかな」
「なんでや、なんであんな男好きになるんや」
和彦は、ムッとした表情をして、そっぽ向いた。
「それは、水樹にしかわからへん理由があるんよ」
「でも、仮に水樹が竜也先輩のことを好きでも、あかんやろ。姫巫女と防人なんて……」
和彦は、腕を組みながらのぞみだけに聞こえる声で言った。
「もしかして、竜也先輩も水樹のこと好きやったりして……」
「こっ、怖いこと言うなや！　冗談でもあかんで」
和彦は、騒ぎたいのを我慢してかすれた声で言った。その分、大

げさに手を振って心情を表す。
のぞみは、フゥと溜め息をついた。
「思い過ごしならええんやけど……」
「思い過ごしやろ。そんなバカなことあるかい」
「とにかく、水樹は私が見ておくから和彦は戻って」
のぞみは、そう言って和彦の背中を押した。それに促されて和彦はしぶしぶ保健室を後に階段を登り始める。その背中は未練があるようにウジウジしていた。
保健室にもどったのぞみは、中央の机にある保健室利用表を記入するため、ボードを自分の方へと引き寄せた。鉛筆を回しながら空欄を探す。その中に、竜也の名前を見つけて一瞬動きが止まった。回していた鉛筆が手から転がり落ちる。

昨日の日付……

のぞみは、竜也の名前を指でなぞった。

昼休みに休みに来てる……寝不足のせいかな……。

のぞみは、養護教諭に気づかれないように小さく笑った。そして、転がっている鉛筆を拾い上げ、空欄に水樹の名前を記入した。
天井を見上げると同時に足を上げる。バランスをとりながら、のぞみは水樹の顔を思い浮かべる。

ここ最近、様子がおかしかったんは、やっぱ竜也先輩絡みやと思うねんなぁ

のぞみは、足を戻して立ち上がり、水樹が寝ているベッドまで歩いていった。カーテンに手をかけ、一瞬躊躇してから開く。
そこには、寝息を立てている水樹が見える。

「何の夢を見てるんやろな……私たちの姫様は……」
のぞみは、そう言って脇にあった椅子に座って水樹を眺めた。
真っ暗だ……何で私はこんなところに……
気がつくと、私は暗闇の中に立っていた。かろうじて自分が立っている位置が平坦なのがわかる。周りがどんな地形をしているのかは、全く予想はできない。
とりあえず、歩こうと私は一歩足を踏み出してみる。平らな地面だ。足場はある。
足元の確認をしていると、ふと前方に明かりが灯った。
ぼんやりと明るい空間が目の前にでき、そこに人が立っていることがわかった。
私は、驚いてその人をジッと見つめる。
鮮やかな十二単を身にまとうその人は、夢で見た弥生であった。
「私は、平安の世を生きた澤渡の当主」
私が彼女を認識すると同時に、声が聞こえた。先ほどまで遠くにいたはずの弥生が、今は目の前にいる。
「弥生さん……」
私は、その人の名前を呼ぶ。悲しそうな瞳で私を見つめた後、ゆっくりと瞼を閉じながら小さくうなずいた。
「あなたは、彼に刺激され、澤渡の血に溶け込んだ私の記憶に同調してしまった」
「彼？」
「彼もまた、右近の記憶を呼び起こしてしまった」
私の問いには答えず、弥生は続けて喋る。
「彼は、今の自分の苦しみと、右近の苦しみ2人分を背負ってしまっている」視線を落として弥生は言った。「願わくば、彼を救ってあげたい」
弥生は、胸の辺りで手を組み、祈るように私を見た。真っ黒な瞳が私を射抜く。何もかも見透かされているようで、私は少し震えた。

「あなたは……私の過去？」
「いいえ。私はあなたの先祖ではあるけれど、あなたは私じゃない。私は生まれ変わることはできなかった……。でも、今は愛した人と共にいることができる」
弥生がそう言うと、彼女の背後にまたぼんやりとした明かりが灯った。そして、右近が現れた。
２人は静かに見つめあい、手を握った。弥生の顔がほころび、そこに笑顔を纏った。空気が軽くなり、私はそっと深呼吸をする。
「私たちのせいで、あなた方を余計不安にさせているのは分かっています。でも、これは意味があることなのです。私たちの果たせなかった夢をあなたに……」
「待って、彼って誰なの！？」
「それは……」

鐘の音が鳴り響いた。ゆっくり目を開けると白い天井が見えた。遅れて鼻につく消毒液の香りがし、それが水樹を現実に引き戻した。
「気分はどう？」
聞き覚えのある声に、水樹は目だけでその主を探す。緩慢な動きの先にのぞみを見つけ、小さく微笑んだ。そして、首を軽く縦にふる。
まだ少し混乱している頭をクリアにさせ、水樹はもう一度天井を見上げた。
彼って誰だろう……
ゆっくりと息をはいて目をつむる。再び訪れた暗闇の中、水樹は夢の二人を今一度瞼に呼び起こす。
２人が果たせなかった夢を私が果たすのなら、なぜ竜也先輩を好きになったの？
右近さんの記憶を呼び起こしたのは誰？

「水樹、次の授業行ける？」
「あ、うん……」
水樹は、そう言ってベットから起き上がった。

第3章　覚醒？

2

その日の夜、竜也は澤渡の屋敷の屋根の上にいた。時刻は0時すぎ。満月が光り、あたりを白く照らしている。その一角、目立たないようにどの場所からも死角になっている位置で、竜也は空を見上げていた。

……そろそろ緊急招集がかかる時間か。

腰をあげ、その視線が庭へと移る。その先には……。

「右近……」竜也は眉をしかめて言った。

「その時は近い」

頭に響く声は、風に消えそうに遠かった。まっすぐに竜也を見つめる右近は、凛としている。

「その時……？」

「君にはもう全てわかっているのだろう、竜也」

「一体、俺にどないせーっちゅうねん！」

竜也は、屋根から飛び降り、右近と真正面から向き合った。背丈は同じぐらいで、視線はまっすぐにぶつかる。右近とこれ程までに接近したのは初めてであった。

「なぜや、右近。やめてくれ……もう……これ以上、俺の心をかき乱さんでくれ！」

掴む事ができないことをわかっていても、竜也は右近に手を伸ばした。その手は、右近の体を素通りし、むなしく空振りした。その手をぎゅっと握り、竜也は下を向いた。

「……」

「水樹と距離を置けば置くほど、俺は彼女を愛しく思う。近づけば

触れたくなり、触れれば抱き締めたくなる……。そうなることがお前の望みだったんやろ！」
そう言いながら、竜也は、目頭が熱くなるのを感じた。
「どうすればええんや……」
「見せようとして見せたのではない」
右近は、静かに口を開いた。
「竜也、お前に流れる血と記憶が、私たちの過去を呼び起こしたのだ」
ふと、右近が顔を空に向ける。
「そろそろ……か」
右近がそう言うと、ポケットの中で携帯の振動音が規則的に聞こえてくる。
「君のお姫様も目を覚ましたようだ」
そう言うと、軽く竜也の後ろを見て、右近はスウッと消えていった。
竜也は、小さく舌打ちをして振り返った。そこには、右近が言った通り、廊下をおぼつかない足取りで歩いている水樹がいた。そして、庭に立っている竜也に気がつき、ガラス戸を開けた。
「こ……こんばんは」
水樹は、少しはねている髪の毛を両手で頭になでつけながら竜也に言った。
「……ああ……」
「緊急招集……？」
水樹の表情は一瞬にしてくもり、眉間に力が入った。
「わかってると思うが、ついてこようなんてするんやないで」竜也は、水樹を睨みつけながら言った。
「私……いつになったらついていけるの？　私は守られてばかりで……みんなが傷つくのは……もう見たくない」
水樹は、視線を下に落としながら握った手に力を入れた。竜也は、その手をじっと見る。

「時がくれば……」
竜也は、その言葉を口にしてハッとする。
右近がいっていた「その時」とは……このことか……？
「時がくれば、水樹、お前のここに紋章が発動する」
竜也は、水樹の額にそっと手を触れた。水樹は、それに驚いてビクッと体を震わせ、竜也を見つめた。
「そんな時が来るの？」
「信じられへんか？」
「私は……」水樹は、竜也から視線を外して下を向いた。
「……わかった。これがお前の自信につながるんなら、見せたる」
竜也は、水樹の手をとると廊下に上がり、目の前の部屋の襖を開けた。真っ暗なその部屋は、使っていない和室で、真新しい畳の匂いがふわりとした。襖を閉めると、わずかに開いた隙間から月明かりが漏れ、お互いの顔がかろうじて見える程度の明るさになった。
「そこに座れ」
竜也は、襖のすぐ側に座ると、水樹を促した。
「少し暗いが、我慢せえ。明るいよりこっちの方が鮮明に視えるかもしぃひん」
竜也は、そう言うと水樹の両手を強く握った。
「目を閉じて。楽にしいや」
水樹は、言われるがまま目を閉じ、自分の顔が真っ赤になっているのを感じた。竜也が触れている手から、自分の鼓動の早さを悟られるのではないかと思うと余計に心臓が早鐘を打つ。
と、その時、頭の中にまるでテレビを見ているかのように映像が入り込んできた。
制服を着た女が見える。見覚えがあるその制服は、水樹が毎日着ているものと一緒であった。その髪型、その顔、全てに見覚えがある。

間違えるはずがない。それは、一五年間毎日見てきた……水樹自身であった。
うっすらと体全体に光のオーラを身に纏い、キッと前方を見つめて仁王立ちしている自分の姿が鮮明に見えた。
その額には、姫巫女の証である紋章が光りを放っている。
「これ……私……？」水樹は、目を開けた。
と同時に、鮮明な映像は消え、薄暗い部屋の景色に戻った。目の前の竜也はまだ目を瞑っている。
「せやで」
竜也は、そう言いながらゆっくり目を開けた。
「どうしてこんな映像が……」
「俺は、これを見んくても水樹の覚醒を信じとったけどな」そう言って、竜也は見たこともないぐらい柔らかく微笑む。「お前はこの日の為に守られてんのや」
水樹の瞳から涙が溢れ出る。
「私……」
「俺はもう行かないと……。召集がかかってからもう5分もたってしもた」
竜也は、そっと水樹の手を離すと、静かに部屋を出て行った。
1人残された水樹は、その顔を両手で覆いつくし、静かに泣いた。

第3章　覚醒？

3

「決して無理はしないでください」
右京は、いつになく厳しい顔で3人の顔を順番に見つめる。腕を組み、少し焦っているように指先でトントンと肘を叩いている。水樹はその傍らに立ち、不安そうに3人を見つめていた。
竜也は、意識的に水樹を見ようとせず、右京が指で刻むリズムを目で追っていた。
「和彦殿は、必ずのぞみ殿か竜也殿と共に行動すること。やむを得ず戦力を分断しますが、危ないと思ったらすぐに退却してください。いいですね」
「ハイ」
3人は、声を合わせて言った。
「お気をつけて……」
右京のその声を耳にするかしないかの間に、竜也は地面を蹴り上げていた。それにのぞみが続き、和彦が後を追う。リズミカルに屋根を飛び越え、目的の場所へと向かった。
屋根を蹴るごとに、竜也のスピードは増していく。2人は、それについていくのがやっとであった。ドンドン移り行く景色を見る余裕もなく、どこに向かっているのさえ把握できていない。
「和彦」
しばらくして、竜也はそう言って立ち止まった。2人もそれに倣って竜也の側に降りる。
「お前はのぞみと一緒にいろや」
「でも、先輩は……」
「俺は大丈夫や。とにかく二手に分かれないとまずい。お前達の方が一緒にいた時間が長いやろ。俺は1人の方がやりやすいんや」

そう言って、竜也は一歩後ろに下がった。
「ここから2時の方向へ俺は行く。お前達は9時の方向へ。俺の方が片付いたらそっちに向かう。そっちも片付いたら、俺の方に応援にきてくれると助かるんやけどな」
竜也は、苦笑いしてのぞみに顔を向けた。初めて見る竜也のその仕草に、のぞみは一瞬ドキンとした。
「わかった。お互い無理しぃひんように……ッ！」
そう言って、のぞみは和彦と一緒に左の屋根へと飛び移った。竜也は、それを見て逆方向へ屋根を蹴った。
まだ少し冷たい夜風が顔をさす。それは、竜也がスピードを増せば増すほど皮膚につきささる。ジャケットの襟をグッと上に引き上げ、竜也はそれが顔に当る面積を少なくしようと努力した。
活性化した妖の者の動きは、たった3人の防人では対処できない程になってきていた。
今晩、はじめての戦力分断。
竜也は、苦戦を強いられるであろう方向へ向かった。のぞみと和彦の方が妖の者を先に片付けるだろう。しかし、それまで自分がここを守り通せるかどうか、竜也は自身がなかった。
いくら右近としての経験があるとはいえ、所詮は夢の中での体験であり、戦力差も大きい。しかし、危険だと知りながら、のぞみと和彦をその場へ向かわせることはできなかった。
その場所へと近づくにつれて、空気が重く変わってくる。周囲の空気が澱み、瘴気が濃くなってくるのがわかる。
早めに結界張っておくか……。
スピードをゆるめ、竜也はアパートの屋上へ降り立った。足場を確認すると、深く深呼吸をし、胸の前で印を作る。そして、大きめの結界をつくるべく意識を集中させた。
一方、竜也とは別の方向へいったのぞみと和彦は、すぐに妖の者を見つけ、戦闘を開始していた。

軽くダンスを踊るかのようなステップを踏んで、のぞみは妖の者の攻撃を避けた。右手に握った剣を手首を返してクルリと刃を上に向けた。そして、下からすくうように目の前の妖の者の腰から肩の辺りまで斜めに一気に引き上げた。

断末魔の叫びを上げ、灰と化す妖の者を見ることなく、のぞみは踵を返して次の妖の者へと向かう。

右手だけで持っていた剣を両手で掴み、自分の右腰へとそれを持っていく。脇構えの形で迫り来る妖の者と向き合う。それは、唾液をボタボタと垂らしながら、半獣の出で立ちをしていた。

ガアッと咆哮しながら、大きく腕を振り上げて近づいてくる妖の者に、のぞみは、右足を大きく踏み出し、その手首を捉えた。

大量の出血と共に、妖の者の両手首は弧を描いて宙を舞う。

それでも突進してくる巨体を軽いステップでよけ、刃を起こして真一文字にして振りぬく。その胴体を真っ二つにした。

肩で息をし始めたのぞみに、和彦が近づく。

「のぞみ」

軽くその肩に触れ、これまでの戦闘で傷ついた箇所の治癒を施した。

「雑魚ばっかでも、流石に数がいると辛いなぁ……。1、2……さっきので7体か」

のぞみは、辺りをぐるりと見渡して軽く舌打ちをした。剣についた灰を振り払うように、のぞみは大きく剣を振った。

「竜也先輩大丈夫やろか……」

「先輩のことやし、大丈夫やとは思うけど、まだこっちにこないってことは、先輩の方も妖の者の数が多いのかもしれへんな」

「こっちは後2体やし、早よ片付けて先輩の方の様子を見に行こ」

のぞみは、和彦の前に立つと、残りの妖の者を迎え撃つべく、八相の構えを取った。

「でも、この2体、今までの雰囲気がちゃうねんな……。右におるのが大将ってとこやな」

和彦は、ゴクリと唾と飲んだ。屋根の上にいる2体は人型で、２０代ぐらいの着流し姿だった。左の男は黒髪で、その双眸は赤く光っている。右にいるのは銀髪の男で、こちらの双眸は紫に光っていた。２人とも、透き通るような肌の白さである。

「なかなかやるね、お嬢ちゃん」

ニヤリと薄気味悪い笑いをしながら、黒髪の男は言った。

「しかし、１００年ぶりに目覚めてみれば……防人の数はたったの２人。そのうちの１人は戦力外……か」銀髪の男が和彦に冷たい視線を送る。

和彦は、少しムッとして拳を握った。

「紅蓮（ぐれん）お兄様の方へ数人いっているのでは？　銀お兄様」

「姫巫女もそちらにいるのかね？」

銀と呼ばれた妖の者は、のぞみに顔を向けて言った。

「答える必要はない」のぞみは、少しイラッとしながら、はき捨てるように答えた。

「銀お兄様、本陣に戻りましょう」

「そうだな」

２人は、のぞみと和彦に見向きもせず、クルッと踵を返すと、夜の闇へと消えて言った。

「ちょ……ちょお！」

のぞみは、そう言いながらすぐに結界を解き、２人を追った。和彦もそれに続く。

「のぞみ！　本陣ってことは、竜也先輩が行った方、やばいんちゃうか？」

「……せやね……先輩１人で大丈夫やろか……」

「とにかく急ごう！」

竜也と別れた場所まで来ると、２人はそこから2時の方向へ向かった。屋敷を出た時は寒かった夜風が、あたたまった体に心地よい程になっていた。戦闘時に放り投げたのぞみのジャケットは、和彦が手に持っていた。

先に行った妖の者2人組みの姿は、全く見えてこない。
ふと、体に違和感を感じる。
「結界……」
「こんな手前から結界を張ってあるなんて……」
「でも、ここらへんからもう瘴気は濃いで」
「こんなに大きな結界が張ってあるってことは……やはり数は……」
のぞみが、不安そうな顔をして和彦を見た。和彦は、難しい顔をのぞみに向ける。
「とにかく、早よ先輩のところへ行こう」
「うん……」
2人は、そう言って屋根を蹴った。
4つほど屋根を越えると、そこに竜也の姿が見えた。
「先輩……ッ！」
「遅かったなぁ……」
のぞみと和彦がそこに到着すると、肩で息をしながら片膝をついて崩れかけている竜也の姿があった。右手に持った剣を杖代わりにし、かろうじて立っている。和彦はすぐに竜也に駆け寄り、その傷を癒していく。
目の前を見ると、のぞみが片付けた妖の者の実に3倍はいるように見えた。その奥に、先ほどのぞみ達と対峙した2人の姿が見えた。その隣に赤い髪の男が立っている。おそらく、それが2人のいっていた「紅蓮」なのだろう。
「のぞみ、これは俺達では無理や。ここは俺にまかせて右京さんを呼んできてくれへんか？」
手に持った剣を一瞬にして消すと、竜也はのぞみに向かって言った。
「でも、先輩……」
「和彦を置いていってくれたら、多分、右京さんが来るまで持ちこたえれると思う。頼む、行ってくれ」
「わかった……」

のぞみは、そう言うとすぐに屋敷の方へと向かった。
「どれくらいの数いたんです？」
「これでようやく半分に減ったぐらいやな……」竜也は、服についた砂利や灰を払いながら答えた。
「半分……」
「守りの結界を別に張っておくから、そこにおってくれ。なるべく、ここを動かへんようにするし」
そう言って一歩前へ出ると、竜也は和彦の周りに小さな結界を張った。そして振り返り、残りの妖の者と対峙した。

「こちらにも、姫巫女の姿はないのですね、兄様」銀がそう言った。
「ああ、防人は手前のあの男１人しかいなかった」紅蓮が前方を見ながら答えた。
「私たちの方も女の防人１人と、そこにいる治癒の防人１人だけでした」黒髪がそう言う。
「あれだけいた防人の数も、今はたったの三人か……」
目を細めて、紅蓮は遠くに見える竜也と和彦を眺めた。竜也は戦闘を開始し、妖の者４人に囲まれている。
「黒龍、そっちにいた女の防人の腕はどうだった」
紅蓮は、黒龍と呼ばれた黒髪の男に向かってそう言った。
「なかなか身軽な剣術の使い手でした。１００年前にも同じ剣術を使っていた防人がいたのを覚えています」
「ふむ……」顎に手を当てながら、紅蓮が言った。
「あの男、なかなかやりますね」正面を見ながら、銀が言った。
その視線の先には、戦っている竜也の姿がある。
４人に囲まれながらも、軽々と妖の者の攻撃をかわし、確実に１体ずつしとめている。
「そうなのだ。あの男。多少の疲労があるものの、確実に数を減らしていっている」
「おや、紅蓮お兄様、あの男が持っている剣に見覚えはありませぬ

か？」
黒龍は、首をかしげながら目を細めて竜也の持っている剣を見つめた。
「どこにでもある日本刀だろう？」
「いえ、しかし、あの刀身の輝き……普通の刀とは違います。どこかで見た記憶があるのですが……」
黒龍は、腕を組んで古い記憶の中を漂い始めた。
「あの刀を使っていた防人が過去にいたのではないか？」紅蓮は、さほど気にもせずにニヤリと笑った。
「そんなことを気にしていてもしょうがないだろう、黒龍」銀は、やれやれといったように肩を竦めた。
「とにかく、姫巫女を早く引きずり出して殺してやらないとな」
紅蓮は、風に遊ばれている赤い髪を掻き揚げると、いやらしい微笑みで遠くを見た。

第3章　覚醒？

4

竜也は、周囲の妖の者を、回し蹴りでつくった竜巻で吹き飛ばした。それに耐えて、襲い掛かろうとしている妖の者が見渡せるように、位置を調節する。

ジリジリと間合いをつめてくる妖の者よりも、その奥に控えている3人の人型の妖の者からのプレッシャに、竜也の額から一筋の汗が流れ落ちる。

見られている……。

3人の6つの目が、竜也をギロリと睨んでいる。その体捌きを、その剣を、その体術を、全てをジッと見られていた。

後ろに控える和彦の事を考えると、自由に身動きがとれない。少しずつ数を減らしていく為に、少し後ずさりながらの戦闘スタイルをとっていた。が、下がりすぎてもいけない。竜也は、間合いを詰めては離すことを何度も繰り返していた。

襲い掛かる数匹の中に踏み込んでは、刀と技でなぎ払い、後ろにひいてはその刀で妖の者を灰へと変えていった。

和彦は、自分の近くへ来た竜也に何度も駆け寄り、その傷を癒していた。

「お前ら何をもたもたしている！　後ろにいる治癒の防人を先に殺さぬか！」

部下の戦いぶりをみていた紅蓮は、たまらず大声を張り上げた。燃えるような赤い髪がユラリと揺れ、体が赤い炎で包まれた。

竜也は、それを聞いて軽く舌打ちをする。

刀で地面に素早く陣を描き、竜也は刀を地面に刺した。

使えるのか……？　俺にあの術が……。いや、やらなければならないんだ……

「和彦！　その陣の中に入れ」
言われるがまま、和彦がその中へはいると、竜也は両手で印を作った。軽く詠唱し、陣へ向けて両手をかざす。
　すると、光の線で陣を描くように光り出し、そこに結界が形成された。
「これは……？」
「いいか、和彦……、俺も初めて使う術だからどこまで持つか正直わからへんけど……。絶対に出るんやないで」
　竜也は、和彦を背にし、地面に刺してあった刀を抜き取った。それを左手に持ち、ジリジリと寄ってきている妖の者に向かって構えた。そのうちの1匹が、咆哮して和彦へと襲いかかろうとした。それを合図に妖の者が一斉に向かってくる。
竜也は一番初めに飛び出した妖の者をその刀で貫くと、続いてその脇の妖の者の鳩尾に足刀を食らわす。その足を地面おろすと同時に腰を捻って刀を真一文字に振り払う。回転を利用し、後ろにいた妖の者へと回し蹴りを食らわし、右から襲い掛かる妖の者に肘鉄を、その反対から来る妖の者に、刀を振るう。
数匹、竜也の猛攻から逃れて和彦へと近づいた者がいたが、竜也が張った結界に触れると同時に、短い悲鳴を上げて消滅した。
　四方八方から襲い掛かってくる妖の者を相手している竜也を、和彦は結界の中から口を開けたまま見ていた。空手のベースがあるにしても、妖の者との戦い慣れているように見えたからだ。
　その立ち振る舞いもさることながら、目を惹いたのはその刀である。のぞみの刀は、伸縮自在であるが、戦闘中邪魔になっても収めるところがない。しかし、竜也のそれは神出鬼没で、刀が邪魔になって手から離すと光と共に消える。そして、いつの間にか竜也の手の中に現れているのである。
　例えば、竜也の前方から襲い掛かってきた妖の者を、刀で一突きする。そして、それを引き抜かずに手を離し、両側の敵に裏拳をいれる。その瞬間、すでに刀は消えている。残るのは、サラサラと灰

になっている妖の者の姿である。そして、崩れた左側の妖の者の頭を踏みつけ、ふらつきながらもまだ立っている右側の妖の者を、いつの間にか現れた刀で胴体を真っ二つにするのである。
だんだん、妖の者の数は減っていくが、その分、竜也は肩で息をしていた。
額から汗が流れ、傷ついた体からは血が滲んでいた。
「先輩、大丈夫ですか？」
「お前は黙ってろ。気が散る！」
竜也は、乱暴に汗を拭いながら、答えた。
見よう見まねで使った右近の技は、竜也が使うにはまだ高度すぎた。そのせいで精神力の疲労が激しかった。それに加え、大勢の妖の者との戦闘で体力が削られ、和彦を守ることで神経が張り詰めていた。
残る妖の者はあと僅か。しかし、竜也の体はすでに限界に近かった。
「不思議だな……」
ふいに、背後で声がした。
振り返ると、そこには遠くにいたはずの黒龍が立っている。
「これと同じ結界を見たことがある。だが、これは防人風情が使えるものではないのではないか？」
そう言って、黒龍は、結界を斜めに斬るように、持っていた扇子を上から下へと振りぬいた。
すると、結界がパンッと音を立てて割れ、和彦は後方へと吹き飛ばされた。
「和彦！」
竜也は、和彦に駆け寄り、その体に触れた。
「う……ッ」と和彦は声をあげ、顔をしかめた。
よかった……気を失っているだけだ……。
「これは申し訳ないことをした。ただ、少し触ろうとしただけだったのだが」
ニヤリと笑いながら、黒龍は扇子で口元を隠した。

竜也は、ただ黙ってそれを見つめ、両手をグッと握りしめた。そして、ふと背後に気配を感じ、振り返る。
そこには和彦に襲い掛かろうと群がっている残りの妖の者の姿があった。竜也は、横目で黒龍を見る。扇子で口元を隠したまま、その場に立って竜也を見つめる彼の姿が見えた。視線が交差したが、竜也はそれを無視し、和彦の方へと走りだす。刀を出し、和彦に一番近い妖の者へと投げつける。それが頭部に命中し、妖の者は灰燼と化した。
それを見て怯んだ妖の者の中に、竜也は飛び込んでいった。
次々と妖の者を灰にしていく竜也を、黒龍は微動だにせずに見ていた。
……あの男……何者だ……？
黒龍は、竜也の戦いを見ながら思考を巡らせる。
この結界は、以前、護り手が使っていたのを見たことがある。防人風情が使えるような代物ではない。
思考を巡らせていた黒龍がふと顔をあげると、残った妖の者を全て灰へと変えた竜也が、こちらを向いて佇んでいた。肩で息をし、辛そうな表情で片足を地面につけて立っていたが、それでも尚その双眸には強い光が宿っていた。
竜也は、黒龍と目が合うと、刀を持っていた手に力を込めた。それに合わせ、刀がカチリと音を立てる。
持っていた扇子を一度パチンと仕舞うと、黒龍は、日本舞踊を踊るように腰を落とし、再び扇子をバサリと音を立てて優雅に開いた。
「防人にしてはなかなかやるな」
「……」
竜也は、戦闘態勢にはいった黒龍を睨みつけながら、呼吸を整えて立ち上がった。
「こいや」
「虚勢を張るのもよかろう」
黒龍は、そう言って軽く息をはく。その次の瞬間、その体は竜也

の目の前にいた。
鼻先1センチの距離まで縮んだ2人の間に、竜也は静かに息を呑んだ。黒龍は、ニヤリと笑うと、右手に持った扇子を竜也の左腕に振り下ろした。
ガキンッ！　と音がして黒龍の腕が止まる。和紙でできている扇子が、まるで鉄扇のように、竜也の刀と交差して火花を散らす。
黒龍は、竜也と力比べをせずに扇子をスッとすべらせ、くるりと回って受け流した。後ろにとんで間合いをとり、再び竜也と真正面から向かい合って、扇子を広げる。そして、手首を八の字に動かした。
ゆるやかな動きとは裏腹に、そこから生み出された真空の刃が、竜也を襲った。
再び刀を構え、竜也はそのかまいたちを刀で打ち落とす。と同時に、黒龍に向かって走り出した。黒龍は、再び扇子を動かしてかまいたちを竜也へと放つ。それを打ち落としながら、竜也は黒龍へと近づいていく。
打ち落とし損ねたかまいたちが、竜也の足と腕をかすめ、その皮膚を切った。
「うおおおおおおおお！」
地面をすりながら、竜也は刀を斜めに振り上げる。砂を舞い上げ、その切っ先は黒龍へと向かう。黒龍はステップを踏んでそれを避けると、視界を遮った砂を払うように扇子を動かした。
クリアになった視界に、竜也はいない。気配を感じ足元を見ると、竜也はそこにいた。地面についた両手を軸に足払いをしかけるが、黒龍の反応が一瞬早く、不発に終わった。
後方に飛び、竜也は再び間合いをとった。額から流れる汗が傷口に入り、少し痛んだ。
すでに体力には限界がきており、肩でする呼吸も不規則になってきていた。唾を飲み込む一瞬、竜也は強い衝撃派を感じ、後方へ吹っ飛ばされる。

「その勝負……、ここまでだ」
何が起こったかわからずに顔を上げると、目の前に紅蓮が立っていた。
「黒龍、じきに夜が明ける。戻らねばなるまい」
空を見ると、東の空が白んでいるのが見えた。
「急ぐことはない、時間はまだあるのだ。一旦引くぞ」
「……この勝負、またに預けよう」
黒龍は、すずしい顔でそう言うと、まだ闇が残る空へと消えた2人を追うように、その中に姿を消した。
それを確認すると、竜也は膝から崩れ落ちる。
「……ハァ……ッ……ハァハァ」
肺がうまく空気を取り込めず、空を仰いであえぐように口を開く。目の前がかすみ、不規則な心臓の音が耳の奥でこだまする。
「竜也先輩！」
ぼんやりとした意識の先で、水樹の声がした。ゆっくりと顔を向けると、自分に向かって走ってくる水樹の姿が見える。
なんで……、水樹がこんなところに……。そんなに走ったら危ないだろ……？
「先輩！！」
のぞみか……。全く……、遅すぎるやろ……。
「お前ら……おせぇん……だ……よ」
「竜也……！」
水樹は、体を支える力を失い、地面に倒れそうになった竜也を抱きとめる。その勢いと重さに、水樹はバランスを崩し、しりもちをついてしまった。その膝で気を失っている竜也の頭を抱き締めながら、竜也の名前を何度も呼ぶ。流れ落ちる涙が、竜也の頬に伝わり、汗とまじって地面に落ちた。
その姿に、2人は何も言えずにただそれを眺めるだけだった。

第3章　覚醒？

5

「右近、あなたと共に歩んできた15年間、本当に幸せだったわ。それは、これからも永遠に変わることはない。例え、私が正親様と夫婦になったとしても、私が愛しているのはあなただけだと覚えておいて」

涙で濡れた弥生の瞳を見つめながら、俺は狂いそうになるのを必死で抑えていた。

ジッと耐えるように硬く結んだ拳のせいで掌に爪が食い込み、いくつもの赤い筋を作っている。しかし、その痛みは、胸の痛みに掻き消される。

弥生の言葉に答えようとしても、喉の奥がカラカラに乾いてうまく言葉が出てこない。いや、答えようにも何も言葉が思い浮かばなかった。

「右近……」

小さく震える俺の腕を、弥生がそっと触れた。

そして、握った拳にも手を触れる。

「ああ、血が……」

そっと俺の手を開いた弥生が、眉をしかめてそう言った。

「あなたを失うことに比べたら、このような傷……」

そこまで言うと、俺は言葉につまる。

弥生は、俺の手をそっと握ると、愛しそうに自分の頬に持っていく。

「私に初めて触れるのは、正親様じゃない。あなたよ、右近」

ドクンと俺の心臓が高鳴った。

「弥生様……」

彼女と俺の視線が交差する。

その吸い込まれそうな黒い瞳を、瞼が覆った。
耳の奥でうるさい程のリズムを刻む心臓が、俺の心を代弁する。
俺は……俺は……ッ
やわらかな頬に触れている指が、俺の緊張に呼応するようにピクリと動く。そして、彼女の顔にかかっている髪を、ゆっくりと払い、その手を肩に置いた。
ドクン……
心臓がさらに高鳴る。
あいている方の手も、躊躇するようにそっと肩に触れた。すると、彼女の体が、ピクリと動いた。
これは、賭けだ。
俺と彼女の賭けなんだ。
意を決して、俺は彼女と同じように瞳を閉じる。
そして……
俺は……
弥生に……

「……そうですか……。それで和彦殿は気を失って……」
「はい、その後のことはわかりません。気がついたら、右京さんに起こされとったんで……」
襖ごしに、ボソボソと話し声が聞こえてきた。ゆっくりと重い瞼をあけると、薄暗い天井が見える。竜也は、わずかに漏れる光の方へと顔を向けた。
「とにかく、お2人とも、もう朝です。いつもの部屋を用意しましたので、今日は学校を休んでこのまま夜に備えて寝てください」
「せやなぁ……。お言葉に甘えさせてもらおうか、和彦」

「俺も眠たいわぁ、学校休めるんはラッキィやしな！」
大きなあくびをしながら、和彦が明るい声で言った。一晩中戦った上に登校するとなると、今日の夜に響く。今は、学業よりも妖の者との戦いの方が重要なのだ。
「ごめんね……」
「なんで、水樹があやまるん？　なんもあやまることないやろ」
「でも……」
「せやで、水樹。水樹もさっきまで竜也先輩の看病しとったやろ？
怪我は和彦が治療したし、じきに気がつくやろ。もう寝よう」
のぞみは、下を向いて落ち込んでしまった水樹を元気づけるように肩を叩いた。しかし、水樹の心は晴れることがなく、暗い顔をしたままだった。
「そうですよ、水樹様。防人はそんなにやわじゃありません。竜也殿はすぐに目を覚ましますよ。体に障ります、早くお休みください」
「でも……」
「ええから、ええから！　水樹、行こう！」
のぞみは、いつまでも動こうとしない水樹の腕をひっぱると、無理矢理廊下に連れ出し、そのまま引きずるように部屋へと連れて行った。水樹の嫌がる声が、どんどん遠くなり、やがて諦めたのか、何も聞こえなくなった。
「さて、それじゃあ、俺も休ましてもらいます。おやすみなさい」
和彦がそう言いながら部屋を出ると、静寂が訪れた。右京が隣にいるはずなのだが、気配はあっても物音がしなかった。
竜也は目をつむり、小さく溜め息をついた。

さっきの夢は……、水樹が俺の看病をしてたせいか……

水樹が触れたのか、夢で弥生が触れた名残なのか、竜也の手に、まだ人が触れた温かい感触が残っているような気がした。その感触に、なんとなく指を弄びながら、天井を眺める。

その時、急に襖が開いた。
「坂上……、起きているか？」
まぶしい光に目を細めながら、竜也はすぐに起き上がる。
「坂上、少し話しがある。起きれるか？」
「大丈夫ですよ」
そう言うと、竜也は立ち上がり、右京の待つ部屋へと歩いていく。
「3人の妖の者が知りたいんちゃいます？」
座布団の上にゆっくりと腰をおろしながら、竜也はそう言った。
「そうだ」
「……名前は、紅蓮、銀、黒龍。俺が戦ったのは黒龍一人……。3人の中じゃ一番下っ端ぽかった……。夜が明けるから3人が引いた後でみんなが来たから、誤解したかもしれへんけど……。苦戦しとった」
竜也はそこで言葉を切り、右京が入れてくれた煎茶を一口飲んだ。
「おそらく、3人は下級の者達を統べる上級の妖の者。次にまた襲ってきたら……、そん時は、覚悟せなあかんと思う」
「水樹様が……、覚醒さえしてくだされば……」
右京は、悔しそうに唇を噛みながらそう言った。
「……テメェ……、二度とそんな事言うんじゃねぇ……」
竜也は、歯を食いしばりながら右京を睨み付けた。そして、ドンッと机の上に拳を叩きつける。
「そんな事……二度と言うんじゃねぇ！　あんたがそんな事言ってどうすんのや！　護り手が……、姫巫女の一番の側近である護り手がッ、あんたがそんな事言ったらあかんやろ！　なんでわからんのや！　なんで信じたれへんのや！　生まれた時からずっと側にいて、なんであんたが……そんなことを……ッ。それでも水樹の護り手なんか？　姫巫女を愛した護り手だっていた！　その苦悩を分かち合った護り手だっていた！　全員が敵になっても、護り手だけは……、あんただけは水樹の味方でいなあかんやろ！　それが護り手ちゃうんか？　敵から守るだけやない！　心も……守ったってやれや……」

竜也は、そこで言葉を詰まらせる。気がつくと、頬を涙が濡らしていた。それがわかった途端、せき切ったように次から次へと涙が零れ落ちる。竜也は、小さく震える拳を硬く握り締め、下を向きながら、止まることのない涙を流し続けた。

どっちの感情だ……。これはどっちの感情だ？　俺か？　右近か？

右京は、何も言えずに、ただ竜也から視線を外すことしかできなかった。竜也が机に拳を振り下ろしたせいでこぼれたお茶の、ポタ……ポタ……と一定のリズムを刻みながら座布団の上に零れる音が、やけに大きく部屋に響いている。

「……姫巫女として……日本の為に生きなくてはいけない水樹を……、俺は……守ってやりたい……」

「……」

呟くように竜也が言ったその言葉を聞きながら、水樹は手を襖から下ろす。竜也の様子が気になり、のぞみが部屋に入ってからこっそり戻ってきたのだ。口論する声が聞こえたので、足を止め、襖の外からその一部始終を聞いていた。

そう、全て聞いていたのだ。

音を立てないように、水樹は廊下をすり足で一歩下がる。そしてもう一歩。さらにもう一歩。そして踵を返し、力なく歩きはじめた。

姫巫女を愛した護り手……

水樹は、竜也が言った言葉を繰り返し頭の中で再生する。

それって、右近さんのこと……？

そう思ったら、辿りつく考えは一つしかない。

なんで思いつかなかったんだろう……。私と弥生さんの関係から右近さんと「彼」の関係も同じだと思ってた……。だから右京しか思いつかなかった……。単純に考えて、あの朝、廊下で右近さんを見た時、そこには誰がいた？

自分の部屋についた水樹は、後ろを振り返る。あの朝、その先にいたのは……。

竜也……先輩……

今は誰もいない廊下を、水樹は眺める。

桜は、過去も現在も世界を薄紅色に染めていた。

第3章　覚醒？

6

夕飯は、とても静かだった。
右京と竜也の間に何か不穏な空気が流れ、竜也と水樹の間にもぎこちない空気が流れている。そのせいで、残りの2人は何も言えず、ただ様子を伺いながら箸をすすめていた。なんとも消化に悪い食卓であった。
その重苦しい空気をひきずったまま、深夜になり、妖の者がいつ出現してもいいように、全員が居間で待機していた。
「あの……さ……」
沈黙に耐え切れず、のぞみが口を開いた。和彦だけが顔をのぞみに向け、他の3人は下を向いてお茶のはいった湯飲みをもてあましている。
「空気読めなくて申し訳ないんやけど……、あんたら何があってん……、夕食の時もそうやったけど、居心地悪いねん。こんな空気で妖の者あらわれたら、勝てるもんも勝てへんで」
のぞみは、大きな溜め息を吐きながら、呟いた。
「……申し訳ありません……、少し疲れているのかもしれません……」
右京は、気まずそうにそう言いながら顔を上げた。しかし、その視線はのぞみからはずされている。
「ごめん、私……、少し考え事してて……」
水樹は、そう言いながら力なく笑いながらのぞみに顔を向けた。
「……」
竜也だけは何も言わず、湯のみの中を覗き込んでいる。しかし、次の瞬間、竜也が急に顔をあげ、水樹を睨みつけた。
急に自分に向けられた敵意に、水樹は泣きそうな顔をしながら隣

にいたのぞみにしがみついた。のぞみが抗議の言葉をかけようとした瞬間、右京が叫んだ。
「きます！　とてつもない力が迫っています！　場所は……、御所……？　まさか……」
「おそらく、昨日の奴等だ……」
竜也は、立ち上がりながら右京に言った。
「右京さんは……水樹とここにおってください……」
「しかし……」
「水樹は、絶対に……連れてきちゃダメだ……。右京さん、絶対に、何があっても、水樹の側から離れるんやないで……」
「いつも側にいる！　当たり前だろう！」
お前に言われる筋合いはないと言わんばかりに、右京は竜也に食って掛かった。一度も見たことがない右京に、水樹はもちろん、他の2人も驚いた。
「……行くぞ、和彦、のぞみ」
竜也は、小さく舌打ちすると、夜の闇に消えていった。

「御苑丸ごと結界に包むか？」
竜也は、同志社大学の正門から、京都御苑を臨みながら言った。すぐ近くに、昨日の黒龍のものと思われる濃い瘴気の渦があるのが、肌で感じ取れる。
「せやな、戦ってる最中に警報鳴ったらたまったもんじゃない」
京都御苑は、国民公園で、誰でも自由に入れる。しかし、京都御所などの施設の回りには、厳重な警備が敷かれ、間違って排水溝から一歩踏み出そうものなら、警報が鳴って皇宮警察がとんでくるのだ。
「やるぞ」
竜也はそう言うと、印を結んで京都御苑まるごと包みこむ、でかい結界を張った。見た目は何も変わらないが、足を一歩踏み入れれば、重苦しい空気に包まれているのが肌で感じられる。

「見晴らしがいいメインストリートにでも誘い込むか……」
竜也は、そう言いながら結界の中にその身を滑り込ませた。
御苑の通路部分には、砂利が敷き詰められている。その砂利の上には、自転車の走行跡がついたであろう一本の白い道があり、その幅はちょうど自転車のタイヤと等しい。その道のことを、通称「御所の細道」と呼ぶとか呼ばないとか……。
京都御所を右手に、南北に続く広い砂利道に着くと、竜也はそこで仁王立ちになる。
視線の先には、黒い影。
黒龍であった。
「また会ったな、愚かな防人……」
開いた扇子で口元を隠しながら、黒龍がそう言った。竜也とのぞみの2人は、すぐに半身になって戦闘態勢をとる。和彦は逆に一歩さがり、2人の邪魔にならないようにする。
「のぞみ、和彦を連れて御所の西側にいけ。そっちに雑魚たちの気配がする」
「でも、竜也先輩、アイツは……！」
「こっちは俺がなんとかする……。御苑内には、この時間でも人がいるやろ……。雑魚たちがそいつらを襲わんうちに、はよいけ！」
竜也がそう言うと、のぞみは和彦の腕をひっぱって走り出した。
「私と……1人で戦おうと言うのか……？　おろかな防人よ……」
「うるせぇ、お前なんか俺1人で十分だ」
「戯言を……ッ」
黒龍は、そう言いながら扇子を持った手を返した。その微弱な風によって生み出されたかまいたちが、竜也に向かって飛んでくる。竜也は、それを光とともに手に現れた刀ではじいた。そのまま柄を持ち直し、黒龍に向かって走り出す。
「姫巫女はどうした」
どんどん近づいてくる竜也に、黒龍は、笑みを漏らしながら扇子を閉じた。

「黙れ！」
下から振り上げた刀を、扇子で受け流す。
「お前では、私の相手にはならん」
左足を軸に、竜也は右足を黒龍の延髄めがけて振り上げた。
「俺で我慢せえ！」
竜也の右足を優雅に手で払いながら、くるりと黒龍はまわった。
息がかかるほどの距離で、２人は視線を合わせる。
「お前を殺しても、何もおもしろくないんだよ」
そう言いながら笑う、温度のない黒龍の瞳に竜也はゾクリとした。
それと同時に、腹部に痛みを感じ、胃液が逆流する。
「グ……ガハ……ッ」
黒龍の膝が竜也の胃を圧迫している。膝の力が抜け、地につこうとした瞬間、さらに顎を蹴り上げられる。
「つまらん」
宙に舞った竜也の胸に、黒龍の足刀がめり込む。
「つまらんッ」
後方に飛んだ竜也を追ってきた黒龍は、その扇子で頬を打った。
「つまらんッ！」
さらに反対の頬も打つ。
「つまらんッ！！」
扇子を開き、かまいたちで竜也を容赦なく切り裂く。鮮血が月に照らされ、砂利を赤く染める。
「防人！　お前ではおもしろくもない！」
黒龍がそう言いながら扇子を再び閉じ、地に足をつけた。そして、全身をかまいたちに引き裂かれ、赤く染まった竜也が、ようやく地面にその身をつけた。
「おもしろく……してやろうか……」
口に入った砂利を噛み砕きながら、竜也は目だけで黒龍を睨みつける。
「何……？」

全身を覆う痛みに耐えながら、竜也はゆっくりと四つんばいになる。そして、右手にはめられた黒いリストバンドに手を置き、目を瞑った。その途端、竜也の全身を、青白い光が包む。
「……それは……ッ」
「見るか……？」
竜也は、口角を上げて不敵に笑い、そのリストバンドをスッと上にずらした。
そこに見えるのは、光り輝く模様。護り手が、その力を発揮するときに体に刻む、誇りの証。
「どや？　おもろいやろ」
「そ……その紋章は……ッ」
黒龍が目を見開き、一歩後ろに引いた。
「護り手……？　お前は防人ではないのか！」
「俺は、護り手でも防人でもねぇ……」
リストバンドで再び紋章を隠しながら、竜也はゆっくりと立ち上がった。竜也の全身から流れ落ちる血は、全身を覆う青白い光に浄化されるように、煙となって蒸発していく。手首を軽く振ると、そこに刀が現れ、竜也がその柄を握ると、ガチャリと小気味のいい音を立てた。
「坂上竜也だ！」
そう言うと、竜也は日本刀を構え、黒龍に向かって走り出す。そのスピードは、先ほどよりもはるかに速い。
「……ッ」
黒龍の一瞬の躊躇が、竜也の接近を許す。
だが、黒龍もスピードでは負けていない。振り下ろされた刀をその扇子で受ける。が、力で押され、はじかれた。
「バカなッ！」
黒龍はすぐに体制を立て直し、2人は間合いをとって睨みあう。竜也は、ゆっくりと足を滑らせながら距離を縮めていく。先ほどまで優勢だったはずの黒龍は、一転してその表情にあせりが見えた。

嫌な汗がこめかみから流れ落ちる。
一瞬、風が吹き、木々の揺れる音が聞こえた。竜也は、それにあわせて動く。
手のひらに、自らのエネルギーを練りこんだ、光る球体を作り出し、黒龍に投げつける。黒龍は、それをかまいたちで打ち落とすと同時に、攻撃を仕掛けた。１つ、２つ、３つ……。かまいたちは、再度、竜也を血で彩ろうと、唸りながら近づいてくる。
「チッ」
刀でそれをはじきながら、迫る黒龍の動きを目で追った。振り上げられた扇子が視界の端に見え、咄嗟に刀を上げて受け止める。と同時に、もう片方の手を黒龍の肩にめがけて突き出した。抉ることを目的とした手刀は、あえなくかわされ、変わりに自分がわき腹を蹴られることとなった。
「グ……ッ」
体制を立て直し、すぐに刀を振り上げる。
脆弱な扇子と古めかしい日本刀の、激しい攻防が続く。月夜に映える火花を散らし、常人には見えぬ速度で空を裂き、わずかに避けきれなかった切っ先に裂かれた皮膚から鮮血が飛んだ。
その時、竜也の手から刀が飛んだ。
空気を裂く音を響かせて弧を描いたそれは、すこし離れた地面に突き刺さった。
「終わりだな」
地面についた竜也は、その顔の先に開いた扇子を当てられていた。黒龍がわずかに手首を返すだけで、そこから生まれたかまいたちが、彼を切り裂くだろう。当たりは血の海となり、そこに身を沈めて竜也は息絶える。
「それはどうやろうなぁ」
「なに？」
「俺の刀は、神出鬼没なんやで」
ハッとして、黒龍は視線を竜也からはずす。

地面につきささったはずの刀が、ない。
「な……ッ」
胸に、違和感。
そこには、銀色の細長いシルエットがあった。
よく手入れされた、綺麗な刀身。月明かりに照らされ、妖艶に光るそれは、黒龍の胸を貫いていた。
「そんだけじゃ死なねぇよな、お前は」
呆然としてる黒龍から扇子を奪うと、竜也はニヤリと笑った。
「おのれ！」
黒龍は、怒りに顔を歪めてそう言いながら、刀をひきぬこうと柄がある部分に手を伸ばす。しかし、それは空を切る。
刀は、竜也の手にあった。
「ほな、さいなら」
竜也がそう言うと、首に当てた刀身を勢いよく引いた。人間でいうところの頚動脈が切れ、噴水のように血が吹き出た。さらに竜也は、躊躇せずに腹にまかれた帯の部分をまるでバットを素振りするように勢いよく振りぬいた。
竜也のオーラを纏った刀は、いとも簡単に黒龍の胴体を真っ二つに切り裂く。
「思い……出し……た……。その……刀……こば……や……か……ゴプッ」
黒龍は、最後の一文字を言うことなく、血を吐きながら絶命した。そして、その全てが灰になり、夜風にさらわれていく。
「……」
竜也は、黒龍が全て灰になるのを見届けると、膝をついた。かまいたちに裂かれた全身が痛む。なんとか力をつかってその傷口を塞いでいたが、それもできなくなったようだ。再び、傷口から血がドクドクと吹き出てくる。
「竜也！！」
ふいに、後方から声がした。

「……なんで……水樹が……」
「竜也先輩……、ひどい怪我……」
「なんで……お前がここにおるんや……右京さんは！？」
「もちろん、右京と一緒よ……。でも、竜也先輩が倒れそうなのが見えて……、走ってきたの」
「馬鹿野郎！」
ものすごい剣幕で怒鳴る竜也に、水樹は肩を震わせて目を閉じた。
「お前は自分の事を心配せぇ！　俺のことはどうでもええねん！　ここがどこだかわかってんのか！　家で待ってろってゆったやろ！　どアホ！」
「……なんとも、部下思いの姫巫女ではないか……」
ふいに、頭上から声がする。
ハッとして顔をあげると、すぐ近くの松の木の上に銀の姿が見えた。その視線がとらえているのは、間違いなく水樹の姿だ。
「お前は……うッ……」
竜也がそう叫ぶと、激しい痛みと共に脳裏に一つの映像が浮かぶ。これから起こるであろう残酷なシナリオを語る映像に、竜也は激しい恐怖に打ち震える。その全身を激しく襲う恐怖に、ここから逃げ出したい衝動に襲われる。ギュッと目をつむると、頭を振ってその衝動を意識から遠ざける。
それが必然なら……俺は喜んでそれを受け入れよう……。水樹の為に……。
「水樹！」
そう叫びながら、銀から庇うように竜也は水樹を抱き締める。
「え？」
一瞬、何が起きたかわからず、水樹は固まった。
「坂上！」
右京が叫ぶ。
竜也の体を通して、重い衝撃が水樹に伝わってきた。
耳元で、竜也の漏らした呻き声が聞こえる。

「え……？」
自分を強く抱き締めていた竜也から、力が抜け、その全ての体重が水樹に預けられる。
竜也が全身を血で染めていたせいで、水樹の洋服にその血がついた。その顔も、腕も、竜也の血で染められる。
耳元で、竜也のか細い声が聞こえてきた。
「無事……か？　……水樹……」
「……い……いや……」
「あとは……お前の……しごと……」
それだけ言うと、竜也は頭をガクリと下げた。
「いや……いや……ッ」
水樹は、その目の前に見える竜也の背を凝視していた。目を見開き、その瞳に涙を溜めている。そこから、目を逸らすことができず、ただ頭を左右に振ることしかできなかった。
自分を捕らえていた銀の攻撃から、竜也は身を挺してかばってくれた。その代償が、その背に刻まれた無残な刻印……。
「いやあああああああああああああああああああああ！」
水樹がそう叫ぶと同時に、天を貫くまばゆい光りがその全身からほとばしった。
「水樹様……」
その柱の中心で、立ち上がった水樹は叫び続けるのを、右京は呆然と眺める。
「坂上……ッ！　無事か！」
水樹が纏った光りの柱の衝撃によって、軽く吹き飛ばされた竜也の元に駆け寄ると、右京は顔を覗き込んで言った。
「うッ……時は……は……発動に……流れた……」
「坂上……お前……視た……のか？」
「……全部、視えた通りになったで……。俺がああなる事で、力が覚醒するのは分かっとった。……そうでなくても……水樹を守る為なら……」

竜也は、痛む体を起こす。目の前には、神々しい光の中に佇む水樹の姿。その額に誇り高き姫巫女の紋章を抱き、銀を見据えている。
「見ぃや……。あれが、水樹の……姫巫女の姿や……綺麗やろ……ほんまに……俺が……」
そう言うと、竜也は気を失った。
「紋章の発動は日本を救う……しかし……」
右京は、竜也の姿に息を呑む。黒龍によって傷つけられ、全身から流れる鮮血。そして、銀によって傷つけられ、その身で焼ける柱を支えたかのように焼け爛れた背中。形容しがたいむごい姿に、右京はその目を逸らす。
自分がこれ程までに傷つくことで得る水樹の発動を、右京が見たならどうしただろうか。別の方法で発動するよう、自分が傷つくことを避けたかもしれない。こんなにもひどい姿になる事を知ったら、怖くて逃げ出したかもしれない。いくら和彦に治癒の力があるとはいえ、これを治せるのだろうか。そう考えただけでも、右京の体が震えた。
右京は、竜也から目を逸らし、水樹を眺めた。
そう、あれこそが、自分が求めていた姫巫女の水樹。それを勝ち取ったのは、目の前で気を失っている竜也だ。
トランス状態にある水樹が、焦点の合わない瞳で銀を眺めている。松の上に立っている銀は、両耳を塞いで苦しみ、もがいていた。
「なんだ……この力は……！　バカな……ッ！　こんな力が……ッ！」
ふいに、風に乗って小さな歌が聞こえてきた。
「祝詞……？」
「ぐあああああああああああああああ！
やめおろおおおおおおおおおおおおおお！」
銀が咆哮すると、その体から白い煙のようなものが吹き出てくる。風がふくたびに形を変えるそれは、どんどん銀の体を白く侵し、空へと上っていく。

「浄化の……祝詞か！」
姫巫女の能力の一つ、それが祝詞を唱えることで、妖の者を浄化する力だった。おそらく、水樹が小さく呟いているのがそれなのだろう。しかし、いかに浄化の祝詞といえども、傷ひとつない、上級の妖の者を一瞬にして浄化してしまう程の強力な浄化の祝詞は、歴代の姫巫女の中には扱える者がいなかった。おそらく、今まで溜め込んでいた姫巫女の力を、一気に放出したせいだろう。
竜也が苦戦した黒龍の兄と思われる銀は、断末魔の叫びを夜の闇にこだまし、いとも簡単に水樹によって浄化されてしまった。これが姫巫女の力。日本を救う、未来の希望。
そして、水樹は気を失ってその場に倒れた。

第4章　真実？

1

「双子……？　それも、女児と……男児……？　バカな……！」
床に伏せている私の顔を、ジッと右近が見つめている。
子供を産んだばかりで、顔に疲れが出ている私を気遣ってか、まだ汗が滲む額を優しく撫でた。
「おそらく、私とあなたの子供だから双子で産まれたのでしょう」
ドキンと右近の心臓が高鳴るのがわかる。何年一緒にいると思っているのだろう。表情を隠していても、右近が考えていることは、私には全てわかってしまうのに。
「しかし……」
「産んだ私が言うのです、間違いありません」
姫巫女は代々女系。そして、護り手は代々男系である。その2人の子供だからこそ、女児と男児の双子で産まれたのだ。
私は、普段からはとても考えられないほど強い意志を持った瞳で右近を見る。
「私とは……たった一度の契りで……」
右近は、少し声のトーンを下げて言った。
「……正親様とも……」
私の瞳から、涙が流れ落ちる。
「あなた以外に触れられることが……どれだけ私にとって辛いことか……、あなたにはわかりますか？」
「弥生様……」
頬に流れる涙をそっと指で拭い、右近はもう片方の手で私の手を握った。
右近、あなたの前で正親様との契りの事実を口にした私の気持ち

が分かる？

それを察したのか、右近は堅く目を閉じた。

「あまり時間がない。さっき祈祷師に言われたことを聞いてほしいの」

「なにを……」

「双子で、しかも男児が産まれたことは『凶兆を示す』と。男児は忌み子として……」

「そんな！」

「自分の子供に手をかけるのが、知らない人では嫌……。だから、私の護り手であるあなたに託したいと大婆様にかけあったわ。意味が……わかりますね、右近」

「それでは……私が……」

「頼みましたよ……、右近……」

水樹は、自分の部屋で目を覚ました。

私……いつの間に……。昨日……御所で……。

自分の額に、そっと手を触れた。

昨晩、水樹はそこに姫巫女の紋章を抱いた。我を忘れていたため、うっすらベールがかかったような記憶しかないが、自分は確かに妖の者を退けた。そして、そのきっかけとなったことも、頭の中に蘇る。

「竜也先輩……」

椅子にかかっていたカーディガンを羽織ると、水樹は襖を開けて廊下に出た。

「あなた達は……夢の……」

襖を開けると、そこには右近と弥生が立っていた。夢でみた2人と寸分違わぬ姿で、彼らはまるで生きているかのようにそこに存在

している。
「彼がここにいることで……あなたも夢を見るのね……」
「彼って……竜也先輩のことね……？　今、あなたが双子を産んだ夢を見たわ……」
水樹がそう言うと、２人は驚いた顔をして顔を合わせた。
「竜也は……竜也先輩は無事なの？」
右近はニコリと笑うと、弥生の手を引いて廊下をすべるように歩き出した。水樹は、仕方なくその後をついていく。
「彼は、あなたを守る為にその身を捧げた。その代償がどれほどのものでも、彼は喜んでそれを受け入れましょう」
「どういう……ことですか？」
「ここに彼がいるわ」
水樹の部屋から２つほど離れた部屋の襖の前で、２人は止まった。そこは、自分の両親が使っていた寝室である。
「無事……よね？」
「はい、でも、あなたを守るために大きな傷を負いました」
「わかってる……、あの時、見たもの……竜也の背中に……」
水樹はそう言うと、その時に見た光景を思い出して口を塞いだ。
「私が……竜也先輩の言う通り、ちゃんとここで待っていれば……」
「あなたがあそこに来たのは必然」
「嫌な予感がするから……右京に無理矢理連れていってもらったの……」
「あなたがあそこに行かなかったら、あなたは覚醒していなかった」
「私の覚醒なんて……どうでもいい……。竜也先輩が……傷つくなんて……」
「あなたがあそこにいなければ、彼は殺されていました」
右近がそう言った瞬間、ドスンという音がして襖に誰かが倒れ掛かった音がする。その後すぐに襖が開き、そこから竜也が顔を出した。
「声がすると思ったら……」

「竜也先輩……起きて大丈夫なんですか……」
「まぁ……うるさかったからな……」
「ごめんなさい……」
水樹は、そう言って俯いた。それを見た竜也は、軽く溜め息をついて後ろの2人を睨み付けた。
「なんで……なんであんたらがおんねん」
「私たちは、あなたに呼ばれてここにるのよ」
弥生が、竜也を見上げながら言う。その表情には温度がなく、水樹は少し寒気を感じた。
「俺は呼んだ覚えはない！　俺にどうしろって言うんや、俺はなんもできひん……」
竜也は、右近と弥生を交互に睨みつけながらそう言った。声は立派だが、その表情は、苦しそうにしている。おそらく怪我が痛むのだろう。
「全てには意味がある。お前がここにいることにも、私たちがここにいることにも」
右近がそう言うと、額に護り手の紋章が輝いた。
「う……ッ」
竜也は、それに呼応するように熱を持った右手首を押さえる。
「お前がこうして表舞台に立つことになったのには、必ず意味がある。彼女が真実を知ることも必然だ。現に、お前が今見ていた夢を、彼女も見ているのだよ」
「見てたんか……あの夢を……」
竜也の顔から、さらに血の気がひく。
「双子の……？」
水樹がそう言うと、竜也は軽く舌打ちをした。
「苦しいのはあなただけじゃないわ」
「……」
弥生がそう言うと、竜也はしばらく考えこむように目を閉じ、そして意を決して右手首のリストバンドをはずした。

「……それは……」
「俺の本当の名前は……坂上竜也やない……。小早川……竜也……なんや……」
「こば……やか……わ……？」
「私が産んだ双子は、女児は姫巫女として澤渡が……。男児は、右近が密かに育てていたのです。夢を見ていたならわかるでしょう？
忌み子として始末されるはずだった子を、私は右近に託した。それに……」
そこまで言って、弥生は悲しそうな顔をして右近を見上げた。右近はそれに同じような瞳で返事を返すと、水樹に向けて口を開いた。
「私がのちに別の女性と結婚し、子をもうけた時、力を持たない子だった時が……怖かったのだ」
「……」
水樹は、淡々と説明する右近の顔から、竜也へと視線を変えた。痛みに耐えているのか、右近の話を聞きたくないのか、眉をしかめながら視線を落としていた。
「しかし、長子にしか伝わらないはずの力が、次の子供にも伝わった。そして、弥生様との子を分家に、第二子を本家にいれたのだ」
「せや……、俺はその分家の子孫……、歴史に隠された一族の、さらに裏側に隠された……決して表に出るはずもない一族やったんや……」
竜也は、右手首の紋章にリストバンドをはめながらそう言った。光り輝いていた誇りの証は、小早川の分家の存在のようにひっそりと隠されてしまった。
「以降、この事実は、小早川の分家のみが知る事実となった……」
水樹の瞳から、大粒の涙が零れ落ちる。それは、まるで弥生の悲しみを代弁するように。それは、右近の悲しみを代弁するように、そして、竜也の苦しみを代弁するように。どんどん流れ落ちるそれは、ポタポタという音をたてて床を鳴らした。
「俺の死んだ両親と、坂上の両親は偶然仲がよかってん……。身寄

りのない俺を養子に迎えてくれた。この時から、運命は決まってたんかもしれへんな。すでに防人の数が減っている事も知っていたし、達弥が足を悪くした時、こうする他なかったんや……」
「竜也先輩が防人じゃないなら……私……好きでいてもいいですか……？」
「なっ……」
水樹の突然の告白に、竜也は真っ赤になってその場で固まる。
「おっと、私たちはそろそろ行きましょうか、弥生様」
「うふふ、そうね」
弥生と右近は、クスクスと笑いながら、そう言い残して薄紅の庭へ溶けていった。空気を読んだつもりなんだろうが、今の竜也は、かえってそれに対して「空気を読め！」と叫びたい気持ちでいっぱいだった。この場に2人だけ残されるのは、非常にまずい。
「竜也先輩が、どの一族とも関係がないなら……私……」
「ちょ、ちょお待ってくれ……、でも……俺は……」
「達弥先輩は、足が不自由とはいえ、防人の力は健在だわ。それなら竜也先輩は……」
「そ、そろそろ誰かが起きるかもしれへん……。その話はまた今度や！　水樹も早よ自分の部屋にもどって……うっ……」
急にまくし立ててしゃべったせいか、竜也は胸を押さえて苦しそうに喘ぐ。おそらく痛むのは背中なのだろうが、手を回せないので胸を押さえているのだろう。顔には、玉のような汗が浮かび、肩で息をし始めた。
「わ……私、和彦呼んでくるから……ッ」
そう言って走りだろうとした水樹の腕を、竜也は「行くな」と言わんばかりに掴む。
「呼ぶな……大丈夫だから……」
竜也は、そう言って床を這うように移動してベッドに辿り着く。そして、うつ伏せになって息をついた。背中を怪我しているせいで、仰向けに寝られないのだ。

「竜也先輩……」
「大丈夫……大丈夫だ……」
そう言いながら、竜也の意識は薄れていった。

第4章　真実？

2

ひんやりとした感覚が、体に染み渡る。熱をもった部分に触れるそれが、とても気持ちがよかった。しかし、すぐに体に篭った熱がそれを温かくしてしまう。カランという音がして、次に鳥が水遊びをするような音がした。そして、また体に冷たさが巡る。

薄っすらと目を明けると、そこに水樹の姿が見えた。どうやら、氷水で自分を冷やしているようである。すぐに熱くなるタオルを、何度氷水につけたのだろう。しかも、素手で……。

視線をあげると、水樹の目は、泣き腫らしたように赤かった。それでもなお、まだ涙を流し、溢れ出るそれを拭っている。

「なんで……」

起き上がろうとするが、背中に痛みが走り、そのまま俯いた姿勢で目だけで水樹を眺めた。

「りゅ……竜也……先輩……」

「お前……」

「気がついたんですね、よかった……。もうお昼ですよ？　おなかすきましたか？」

泣いていた事を悟られまいと、必死に笑顔をつくろうとするその姿がとても痛々しく、竜也の心がズキンと痛んだ。

「う……ッ」

激痛を堪えながら、竜也はその身を起こしていく。そして、両足をベッドから下ろし、腰掛ける形で水樹と向かった。

「傷……痛みますよね……」

心配そうな顔をしながら、水樹は竜也の顔を覗き込む。

「水樹……」

竜也は、軽く溜め息をついてから、まっすぐに水樹の瞳を捕らえ

た。
「俺は、お前にそんな顔させるために助けたんやない」
射抜くような竜也の瞳に、水樹は顔が赤くなる。
「そんな顔しとったら、俺が助けた意味ないやん。笑ってろ。俺に申し訳ないと思うんなら、笑っとれ」
水樹に笑顔のお手本でも見せるかのように、竜也はニコリと柔らかく笑った。その優しい言葉と笑顔に、水樹はたまらず涙を流す。
「りゅう……せん……ぱ……」
「泣くんやない、お前にそんな顔させるために助けたんやないっていっとるやろ？」
水樹の涙を拭いながら、竜也はそっと肩に手を置いた。
水樹の体温が竜也に伝わると、夢の中の自分が、弥生を抱き締めた感覚が蘇る。弥生と同じ、華奢な肩だ。このまま抱き締めたい衝動が体の底から沸いてくる。だが、それをしたらもう後戻りできない気がして、必死にそれを押さえつける。
そして、水樹に優しい言葉をかけた自分を叱咤するように頭を強く振った。

こんな言葉、水樹にかけたらあかん……。何やっとんねん！　自分！

「俺は……」
竜也が前言撤回を図ろうとした瞬間、なんの断りもなしに、シャッという襖独特の音がして、室内に明かりが入る。
「竜也先輩―？　昼飯持ってきましたよー……って、うわっごっごめん！」
水樹の肩に置いた竜也の手と、部屋の中に充満している微妙な雰囲気が伝わった和彦は、慌てて視線を宙に向ける。
「……じゃあ、私……もう行くね」
笑顔を竜也に向けると、水樹は立ち上がった。そして、入り口に

いる和彦の肩を軽く叩くと、「治療、宜しくお願いします」と言い残して去って行った。
「……」
その様子を、和彦は黙って眺めている。
「和彦、悪いな。おおきに」
いつまでもぼんやりとして動かない和彦に、竜也は声を掛ける。我に返った和彦は、慌てて襖を閉め、サイドボードにお盆を置くと、竜也に向き直った。
「すみません……なんか……俺、邪魔しちゃったみたいで……」
「別に……。起きたとこやったし……何も……」
竜也は、顔にかかった前髪を掻きあげながらそう言った。
「昼飯の前に、怪我見せてください」
「ああ……」
竜也は、和彦に背中を向けて包帯を取る。白いはずの包帯に、うっすらと血が滲み、赤く爛れた皮膚が和彦の目の前に広がる。何度も治癒術を施したはずなのに、未だに目をそむけたくなる程の傷跡がそこにはあった。
「まだ痛みます？」
「せやな……」
竜也の背中に手を翳し、和彦は治癒を始める。両手が光り始めると、竜也は少し痛みが引くのを感じた。
「あの後、どうなってん？」
「あの後？」
「俺、お前らに西側行くように言ったやろ？　その後や」
竜也はあの時、自分と黒龍2人だけで戦えるように、和彦とのぞみを御所の西側へと追い払った。その後、水樹が覚醒したのを見届けてから気を失ってしまった為、何が起こったのか、まだ聞いていなかったのだ。
「ああ、西側には何匹かの妖の者がおって、のぞみがそれを片付けていたんやけど、急に光りの柱が空まで昇ったと思たら、妖の者は

白い煙になって、全部消えてしもたんです。ほんで、柱の方に向かったら、水樹と竜也先輩が倒れてて……。竜也先輩はひどい怪我しとるし、とりあえず応急処置して、ここに戻ってきたんです。それから、右京さんから何があったか聞きました。水樹が覚醒したことも……、何が引き金になったのかも」

和彦は、竜也の背中の傷を見ながらゴクリと唾を飲み込んだ。水樹を守り、覚醒の引き金となった誇りある代償。それは、何度も治癒術を施しても消えることのない無残な刻印。あれだけ冷たくしていた水樹の為に、竜也はその身を捧げた。その行為が意味するところを、和彦はなんとなく掴みかけていた。

「そうか……。浄化の……祝詞か……」

「え？」

「妖の者は灰やなくて、白い煙になったんやろ？　それは……姫巫女の浄化の祝詞や」

「あー……そういえば、右京さんがそんなような事言ってはったかも……」

「銀っていう妖の者はどうした？」

「ああ、そういえば……。その浄化の祝詞で消えたみたいやった」

「……ずっと押さえ込んでた力を解放したから……、えらいパワーがでたんやなぁ。浄化の祝詞で銀を消した上に、西側まで影響がでたんやから……」

「はぁ……」

竜也の言っている意味がいまいちわからず。和彦は曖昧に返事をする。

「もうそれくらいでええで、和彦」

「え？　でもまだ……」

「治癒も疲れるやろ。だいぶ痛みもひいたし、おおきに」

サイドボードのあった薬と替えの包帯を取ると、和彦に向き直った。

「すまんが、自分じゃできひんからな。頼むわ」

そう言って和彦にそれらを手渡すと、再び背中を向ける。有無を言わさない空気が、竜也の背中から伝わってきた。和彦はガーゼと薬を掴むと、フゥと小さく溜め息をついた。

少しは、傷の範囲が狭くなっただろうか……。

あまり代わり映えしない傷跡を見ながら、和彦はガーゼに薬を塗っていく。気休めにしかならない火傷の薬が染みたガーゼを、竜也の背中にそっと当てていく。その度に、和彦には聞かれまいと、押し殺したような声が竜也の口から漏れる。和彦は、それを聞かないフリをするので精一杯だった。瞳の奥から、涙が湧き出るのを必死に押さえながら、和彦は包帯を巻いていく。

「それじゃ、俺、戻りますわ」

和彦は、震えそうになる声を必死に抑えながら、竜也から顔を背けて立ち上がった。

「おおきに、昼飯食べたら……、おぼん廊下に置いとくわ」

それがわかった竜也も、和彦から顔を背けて見送った。

第4章　真実？

3

宇宙空間に、ポーンと放り投げられたような、奇妙な浮遊感だった。

竜也は、おぼつかない足元に顔をしかめながら、くるくると回りながら上下を確かめた。目印になるようなものが一切ない空間で、やっと自分の納得できる感覚を手にし、一息ついた。

そして、目の前にぼんやりと現れた予想通りの人影に、竜也は「またか」と深い溜め息をついた。

「今度はなんやねん」

「あら、ずいぶんと嫌われてしまったようだわ」

上品な仕草で口元を覆いながら、弥生は鈴のようにころころと笑った。右近は、それを愛しそうな瞳で眺め、幸せそうにニコリと笑った。

「ところで……、なぜ、君は水樹のことを受け入れないんだい？」

「はぁ？」

「廊下で、君は告白されていたじゃないか」

からかうような、慈しむような、まるで自分の子供の成長を喜ぶような目で、2人は竜也を眺める。

「……」

少し顔を赤らめ、困ったような顔をしながら、竜也は視線を下に落とした。

「君は、彼女のことを愛しているんだろう？」

「バカな……」

「あなたが彼女のことを好きになったのは必然」

弥生は、強い口調でそういい切る。

「そんなん、半分はあんたらのせいやん……」

「認めたね？　彼女のことが好きだって」
竜也がボソリと小声で言った事を拾った右近は、ニヤリと笑いながらそう言った。
「はぁ？　ちょ、認めてへん！　認めてへんで！」
あわあわと手を振り回して体全体で否定するが、2人はくすくすと笑いあうばかりで、竜也は、どんどん逃れようのないあり地獄にはまっていくがごとくどっぷりと墓穴にはまる。
「くすくす、ねぇ、竜也、私たちは全て分かっているの。過去も未来も、全て。そして、私たちが果たせなかった願いを、あなたに託そうとしている。意味、わかる？」
竜也はわかっていた。右近と弥生の二人が願ったこと、それは、結ばれる事。どれだけ愛しても、どんなに愛されても、二人は決して結ばれる事は許されなかった。それを竜也に託すということは、つまり水樹と結ばれろということだ。
「そんなん……右京さんが許すはずが……」
「うん、確かに。彼はなかなか私たちに心を開いてくれないね」
「そうね、私たちが何度よびかけても……」
ということは、この2人は右京に何度も自分達の存在をアピールしようとしていたのだろうか。

恐ろしい……。

竜也だけが、あの過去の映像とこの2人を見ている頃は、まだよかった。苦しむのは自分ひとりだけだったから。しかし、それを水樹と共有するようになり、少し事態がややこしくなったのだ。さらに、右京さんが2人の存在を知ることになったら、何が起きるのか想像がつかない。
「彼は護り手だから、私が呼びかければ伝わると思うんだが……、なかなか……。すみません、弥生様」
「気にしないで、右近。もう一度試してみましょう。真面目な彼の

ことだもの、真実を知ったらきっと……うふふふ」
そう言いながら、２人は暗い闇の中へと溶けていく。
「ちょ、ちょお待て！　勝手に……ッ！　ややこしくすんのややめてくれ！」
竜也がそう言って手を伸ばしても、虚しく空を掻くだけで、自分の無力を知る結果となる。
小さく呻きながら、竜也は頭を抱えてその場に蹲った。

じんわりと体中に広がる、なんともいえない感覚で、竜也は目を覚ました。
夢の中での焦燥感が、嘘のように消え、安堵すら覚える。
「……？」
竜也は、人の気配に目を開けると、そこにはまたしても水樹の姿があった。しかし、先ほどのように泣いた気配はない。その瞳には、何かを決心したような意思の強さが宿っている。
「あ……」
竜也の視線に気付き、水樹は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに柔らかく微笑む。体を包んでいる温かさに似た笑顔に、竜也も素直に笑顔を返す。
「さっき、ちょっとうとうとしてたらね、夢の中で……、弥生さんが教えてくれたの」
「弥生が？　何を」
先ほどまで見ていた夢を思い出し、竜也は表情を曇らせた。水樹に何かよからぬことを伝えたのではないかと不安になる。
「怪我の手当ての仕方」
竜也の背中に翳していた手を休め、膝にちょこんとその手を乗せて、再び水樹は笑顔を向ける。
「治癒の術者のようなことはできないけど、私のこの姫巫女の力を竜也に送ることで、自己治癒力を高めることができるって！」
水樹は、自分の両手を見つめながら言った。

何の力もなく、ただ安全なところで守られることしかできなかった自分が、初めて誰かのためにその力を使うことができる。それが、水樹にとってはとてもうれしかった。

「自己……治癒力……」

言われてみれば、なんだか体に何かが溢れてくるような感覚がする。体全体を覆っていた倦怠感がなくなり、心なしか背中の傷の痛みもひいてきている。

「もうすぐ和彦も来るから、そしたら、2人で治癒するね」

「あ……ああ……」

竜也は、顔が熱くなるのを感じ、それを悟られないように枕に顔を押し付けた。

先ほど夢の中で言われた言葉が、竜也の頭の中でぐるぐると回る。

――君は、彼女のことを愛しているんだろう？

――あなたが彼女のことを好きになったのは必然

――認めたね？　彼女のことが好きだって

ああ、好きや！　俺は水樹のことが好きや！

ぎゅうっと目を瞑りながら、竜也は誰に伝えるわけでもなく、心の中で叫ぶ。水樹が言った通り、竜也は坂上家の跡取りではない。守らねばならない一族などいないのだ。だから、今その言葉を口にしてしまえば、2人は晴れて恋人同士になれる。弥生と右近が果たせなかった願いも叶う。だが、竜也の心に暗い影が落ちる。

自分が、表舞台に立つことで、何か運命が捻じ曲がってしまうような……。本当は、綺麗な一本道だったはずのそれが、いびつに捩れ、メヴィウスの輪のように、決して出口のない迷宮になってしまうのではないかという恐怖が竜也に襲い掛かる。

言って楽になりたい。

いや、駄目だ！

楽になりたい！

駄目だ！

楽になりたい！

駄目だ！

竜也の脳裏に、相反する2つの衝動が、決して決着のつくことのない戦いを繰り返す。

「……先輩……先輩……ッ！　竜也先輩！」

どれくらいたったのだろう。いつの間にか、全身が汗に濡れている。和彦と水樹が自分を呼ぶ声で、ようやく我に返った竜也は、少し荒い息をしながら体を起こした。

「大丈夫ですか？　傷が痛むんですか？」

水樹は、自分が余計な事をしたのではないかとおろおろしながら竜也を覗き込んでいる。

「枕にずっと顔押し付け取ったから、息できんかっただけちゃいます？」

水樹とは相反して、和彦は竜也を覗き込みながらニヤニヤしていた。

「あ……ああ……、大丈夫や……」

深く息を吸って、竜也は体を起こした。サイドボードにあった水を飲もうと手を伸ばすと、それを悟った水樹が、すぐにコップを竜也に手渡し、水差しを傾ける。

コップいっぱいにつがれた水をいっきに飲むと、フゥと一息つき、竜也は何事もなかったかのように包帯を取りはじめた。
その時、ドタドタドタッ！　という音がして、廊下を誰かが走ってくる音がした。一瞬、のぞみかと思ったが、どうやら、足音の重みが、のぞみのそれとは違う。……ということは、選択肢は後ひとつしかない。
開きっぱなしにしている襖から現れたのは、いつも冷静な彼からは考えられないほど取り乱した姿をしている右京だった。すべるようにして部屋の中に入り、水樹と和彦の存在すら無視して竜也へと一直線に向かってくる。
「坂上、お前、戦闘時に刀を出すそうだな。今出せるか？」
息がかかるほどの距離で、右京は竜也に問う。
「……はぁ、出せますけど……。鞘とかないんで、抜き身ですよ？」
コクンと右京は頷いた。竜也が手首を軽く振ると、その手の中に愛用の刀が姿を現した。右京は、それを見て「おお」と感嘆の声をあげる。
「少し、見てもいいか？」
「ど……、どうぞ……」
右京は、それを竜也から受けとると、鬼気迫る顔で、ぐるぐると回しながら、その刀身や柄などと穴の開くほど見た。
その姿を見た3人は、「？」という文字を頭に何個も浮かべ、顔を合わせる。
2、3分程刀をいじくりまわし、右京は満足そうにそれを竜也に返す。
「見事な刀だな。ありがとう」
それだけ言うと、右京はまたバタバタと廊下をかけていってしまった。
「なんだったの？」
「さぁ……」
「竜也先輩、その刀、何かあるんですか？」

和彦は、竜也の手に残る刀を指差して聞いた。
「いや、別に……。のぞみから聞いて興味を持ったんちゃうか？」
しかし、それにしては、態度が異常だった。
「まぁ、とにかく、治療頼もか」
「はい！」
そう言って、水樹は意気揚々と手を翳した。
「よっしゃ、いっちょやったろか！」
２人が仲良く竜也の背に手を翳す。青白い炎のような光りが、ゆらりと手のひらから立ち上る。そして、背中全体を包みこんだ。

第4章　真実？

4

「ゴホン」
和彦の治療が終わり、水樹が洗面器の中の水をとりかえに行ってすぐ、襖の方から咳払いが聞こえた。
まるで、竜也が1人になるタイミングを見計らっての事のように思えた。きっと、そういうことなのだろう。先ほどの右京の態度から察するに、2人きりで話したい何かがあるのだ。いや、「何か」ではない。間違いなく竜也の「刀」の話だろう。
「右京さん……」
襖から半身を出すように室内の様子を窺っている右京に、竜也は起き上がり、たまらず声をかけた。

右京さん、あやしすぎるんやけど……

「ああ、坂上殿。起きていたのですか？」
わざとらしくそういう右京に、竜也は眉間に皺を寄せた。いつもの右京とは思えぬほどの挙動不審ぶりに、ジッとその姿を観察する。
しばらく、2人は見つめあった。
「あれ？　右京？」
沈黙をやぶったのは、水樹の声だった。
「水樹様、少し竜也殿と大切な話があるのです。少しお時間をいただいても？」
「あ……うん。わかった。じゃあ、これ……」
再び竜也の治療を試みるつもりだった水樹はあからさまに落胆し、手に持った洗面器を右京に押し付け、トボトボと廊下を歩いていった。その姿が廊下の角を曲がり、見えなくなると、右京は短く溜息

をついた。
「具合はどうだ？」
後ろ手に襖を閉めながら、右京が尋ねた。
「めちゃくちゃ痛てぇ」
水樹や和彦の前では強がって決して見せない、痛みに歪んだ顔を右京に向けながら、言えない一言を竜也は右京に嫌味をこめて言った。
広範囲に焼け爛れた背中は、ジンジンと熱を持って痛み、体中の神経を焼いていた。いくら和彦が治癒術を使っても、冷たいタオルで熱を吸い取っても、楽にはならなかったのだ。
痛み止めすら、その傷の前ではほぼ役立たずだった。
ようやく、水樹が弥生に聞いて施した術のおかげで、若干楽になった程度である。やはり、怪我は自分の自己治癒能力で治すのが一番らしい。
「よく……やってくれたな……」
「はぁ？　なんのこっちゃ」
突然の右京の言葉に驚き、竜也は背中の痛みも忘れて大げさなリアクションをした。
「水樹様を……よく守ってくれた……」
「当然やろ？　俺は水樹の防人なんやで……、と、ちょお横になってもええです？」
「ああ、すまない、楽にしてくれ」
右京がそう言うと、竜也は再びうつ伏せにベッドに顔を沈めて一息ついた。
「その怪我なんだが……。和彦殿1人の力だと時間がかかるようだ……。しばらくは、ここで休んでいてほしい」
「ありがとう……ございます……」
なんだか気まずい雰囲気が漂い、2人は言葉がどもる。
「跡が……残らないように……和彦殿も努力するそうだ……」
「痛みさえひけば、跡ぐらいどうってことないんやけど……。それ

にほら、この傷は姫巫女を守った証なんやでぇとか、将来息子に自慢できるかもしれへんし……。なんて……あは……ははは」
乾いた笑いが部屋に充満した。なんとかこの雰囲気を打開しようとしているのに、右京は笑わずに真剣な顔をしている。
「坂上、お前はあの時……、自分がこうなることで水樹様が覚醒するのを視たといったな……」

本題は刀やなくてこっちか……

竜也は、嘆息して視線を右京から外した。

意識が朦朧としていたとはいえ……、面倒臭い事を口走ってまったなぁ……。俺のアホ！

竜也は、自分の失態に心の中で舌打ちをした。
「お前の真の名は？」
確信をついた右京の言葉に、竜也は内心ドキリとした。
「なっ……、何……言ってはるんですか？　右京さん……」
「お前は、確かに『視た』と言った。未来視は護り手の能力だ。なぜお前が使える」
「……」
「お前は……何者だ……」
「……水樹の防人……坂上竜也や……」
右京は竜也の正体を疑い、竜也は自らの正体を頑なに防人だと主張する。しばらくの沈黙の間、漫画の古い手法で言うなら、両者の瞳の間で火花が散るようなにらみ合いが続いた。
一歩も譲らない両者の睨みあいは、５分だったのか３０分だったのか……。時間がゆっくりと流れているのか早く流れているのかわからない中、極度の緊張状態が長く続いている。
「ハァ」と短く溜息をつき、右京は顔にかかった前髪をかきあげた。

「先ほど……、刀を見せてもらったな」
右京が、話題を変える。その真意がわからず、竜也は再び右京をジッと見つめていた。
「あ……、ああ」
いつの間にかカラカラに乾いた喉に、言葉が張り付いた。それを潤すため、竜也は無理矢理生唾を飲み込んだ。
「その刀の……鞘は……あるのか？」
歯切れの悪い言葉に、竜也はさらに生唾を飲み込んだ。
「この刀が俺に継承された時にはすでになかった。元からあったのかすらわかりませんが……」
「ここにある」
竜也は、右京の強い一言にギョッとした。いや、力強さよりもその内容に、だったのだろう。

ここに……ある……？

背中の火傷のことを一瞬忘れてしまう程に、竜也の体が一瞬で冷えた。自分の顔が、血の気を失って青ざめているのがわかる。こめかみから一筋、顎へ向かって氷のつぶのような汗が道を作った。
「え？」
ワンテンポ遅れて、竜也はようやくその一言を発する事ができた。
「ここにある」
右京は、もう一度同じ言葉を発すると、右手を前へと翳した。
一瞬、その手が光ったかと思うと、その中に黒い棒のような物が握られていた。竜也の刀身と同じ長さに見えるそれは、間違いなく竜也の刀の鞘だ。本能が、そう告げていた。
「坂上、刀を出せ」
竜也は、言われるがまま刀を出し、右京の方へ差し出した。鼓動がドンドン早くなっていくのがわかる。
その刀を右京が手にし、その鞘に刀身を滑らせる。

カチャ……と小気味の良い音がした。はじめからそうであった様に、その刀はその鞘に収まったのである。
竜也は、そこで観念したように目を閉じ、右京にはわからないように長い息を吐いた。
「まさか……本当に……」
右京は、困惑した表情でその鞘に収まった刀を見つめている。自分で鞘はここだと宣言しておいて、本当に収まった事が信じられないというような顔だ。
「この鞘は、代々小早川に伝わるものだ。そして、こういう言い伝えもある。いつかこの鞘と刀が揃った時……」
右京はそこで言葉をとめ、視線を刀から竜也へと向けた。
「光と影が出会う……」
竜也は、右京の言葉に目を見開く。そして、右京も……。
「そして……時を経て……運命は……2人を結ぶ……」

なっ……、なん……だと……？

竜也は、右京の言っている意味が何を意味するのか理解した。

まさか……。右近は……、こんな先の未来まで……視えていたのか！

自分の肉体が滅しても、再び2人の魂の悲願が叶うことを。それを予見してこの鞘と刀を本家と分家で受け継がせていたいたのか……、右近！！

「坂上、意味がわかるんだな」
「……」
竜也は、肯定しようとしたが、言葉がつまって出てこなかった。その変わり、答えとなる涙がとめどなく溢れている。

「この鞘を受け継いだ時には、全く意味がわからなかった。役に立つわけでもない鞘と、わけのわからない言葉……。正直、忘れていたよ。坂上、お前のその刀の事をのぞみ殿から聞くまで……。そして、お前が言った「視た」という一言。それがなければ、この憶測全ては繋がらなかった」

右京はそこで短く息を吐いた。

「まさか本当にこの鞘と対の刀だったとは……」

竜也は、観念したように目を閉じて溜息をついた。

「わかりました……」

背中の痛みを押して、竜也はベッドに腰掛けて頭を抱えた。

「全て……、俺が知っている全ての事をお話します。少し、長くなりますが……。俺が話したことが全て真実であるという証拠も見せましょう。その上で、信じるか信じないかは、右京さんにまかせます」

話して、いいんだな？　右近。

竜也がそう心の中で呟くと、空気がふわりと笑った。

第4章　真実？

5

右京は、数日たっても、竜也からもたらされた真実を消化しきれていなかった。

その間にも、妖の者は毎晩襲撃をしかけてくる。しかし、水樹の覚醒のおかげで格段と効率は上がっていた。それに、あの京都御所での戦い以来、下級の妖の者しかあらわれていないのも幸いだった。おかげで、右京は思う存分悩んでいた。

竜也と右京は、あの一件以来目を合わせず、会話も皆無であった。さすがにそれには皆も不審がり、2人に「何かあったのか」と聞くのだが、首を横に振るばかりで2人とも何も語ろうとしなかった。

そんな最中の夢であった。

気がつくと、右京は澤渡邸の庭に立っていた。

「ここは……」

辺りを見渡すと、少し離れた場所に十二単の女と、それを守るように肩に手をまわして立っている男が1人。庭に舞う桜の花を愛おしそうに眺めていた。

「弥生様」

男は、柔和に微笑みながら愛しい人の名を呼んだ。

「右近」

女は、それに応えるように顔をあげ、熱をもった瞳で男を見つめた。

弥生と……右近……。これが坂上の言っていた姫巫女と護り手か！

坂上の話のせいでこんな夢を……、バカバカしい！

右京は、ハァとため息をついて腕を組んだ。「早くこんなバカバカしい夢から醒めればいい」と、薄紅色に染まった地面に顔を向けてボソリとつぶやく。
その時……
「具合はどうだい？　竜也」
知った名前が、耳に聞こえた。
あわてて顔をあげると、右近と弥生の視線の先に人影が２つ。屋敷の廊下に、竜也と水樹が庭先の２人と同じように肩を寄せ合って佇んでいた。

あいつ、いつの間に！

水樹の肩に手をまわしている竜也に、右京は珍しく感情を波立たせる。

「おかげ様で。ようやく立てるようになったわ。……まぁ、誰かの肩は借りなあかんけどな」
竜也が苦笑いしてそう言うと、右京は「そういうことか」とホッと胸をなで下ろす。まるで、娘に彼氏ができた父親のような心境である。
実際、右京は水樹の保護者のような立ち位置にいた。幼い頃からずっと水樹の面倒を見続け、父親のように、母親のように、水樹を見守ってきたのだ。日本の未来を担う水樹の伴侶となる男は、自分が認めた男でなければならない。右京は、ずっとそう思い続けていた。

認めた男……、か

竜也は、自らを犠牲にして水樹を覚醒させ、守った。その傷はい

まだに癒えず、立つことすらままならない。これ以上に水樹のことを思ってくれる男はこの先現れるのだろうか……。
ぼんやりとそんな事を考えながら、右京は対峙する4人を眺めていた。
「っつーか、なんやねん。あの小早川本家に伝わってる妙な言い伝え」
「ああ、あれか。そういえば、そんなものもあったね」
右近は、クスクスと笑う。
「はぁ？」
「視えたんだ。全て」
そういうと、右近は悲しそうに目を伏せた。
「刀と鞘を分けたのは、戯れだった。弥生と私が共に生きた証。分家という世間から隠されて生きていく事になった子供に、闘う力を与えたくて……、分家に刀の方を渡した。決して、この2つが再び出会う事などないと思っていた。……だが、視えた」
右近の言葉に力がこもる。竜也は、それに呼応するかのように水樹の肩にまわした手に力を入れた。
「本当に、最期の最期だった。弥生様がご病気で亡くなり、私の命も消え失せようとしている時だった。君たちが、視えたんだ。運命に翻弄され、再び表舞台にたってしまった、君」
竜也と、右近の視線が交差する。
「そして、私の愛しい弥生様と同じ、儚い空気を身にまとった君」
水樹の体が小さく跳ねた。竜也は、安心しろ、とでも言うように肩にまわした手に力を込めて抱き寄せる。水樹は、少し近くなった距離に顔を少し赤らめた。
「そういうことだよ、右京」
突然自分の名が呼ばれた。
「う……、右京……さん」
「右京……」
少し先に見える見知った姿に、竜也と水樹の2人はあわてて体を

離す。しかし、次の瞬間、竜也は背中の痛みに体制を崩し、再び2人は寄り添うように立ち尽くす。
「ようやく、私たちの呼びかけに応えてくれたんだね」
右近は、右京に笑いかけた。その隣で、弥生も微笑む。まるで、先日の刀と鞘のように、それはあたりまえのように共にあるようだった。

いや、だがこれは夢だ。私の潜在意識が見せている夢で、坂上からもたらされたでっちあげの話に動揺して見ているただの夢だ。

右京は、ブルブルと頭を振った。
「どうしたら信じてくれるんだい？　君は」
右京が考えた事を見透かしたように、右近が言う。
「竜也の印はもう見たのだろう？　君の左肩にある印と寸分たがわぬ護り手の印だっただろう？」
右京は、眉をひそめて左肩を押さえた。

そう、あの日、坂上に見せてもらった。その右手首に浮かび上がる護り手の……、自分と全く同じものを。

それを見ても、右京はまだ受け入れる事ができないでいた。バカバカしいと思いつつも無視することができない印。それは、竜也の話が全て真実であるという確固たる証であった。
自分の一族以外のものが、その印をその身に刻めるはずがない。ということは、竜也は間違いなく護り手の一族に連なる者ということになる。
それは、右京の中にグルグルと渦を巻いて心を乱していた。
「君は真面目な人だから、この真実から目を背ける事ができないはずだ」
右近は、一歩右京に近づいた。

「姫巫女と護り手の血を受け継いだ一族。それは、自分達の脅威になり得ると思っているのではないのか？」
「右近！」
弥生は、右近の恐ろしい一言に、彼を罰するように強く名前を呼ぶ。
「続けさせていただきます」
決意を秘めた強い瞳で、右近は弥生を見つめる。肩にまわした手をスルリと離し、もう一歩右京に近づく。
「表に出る事を禁じられた分家、その一族が、将来、真実を知っているが故に自分たちを恨んで行動をおこすかもしれない。今までは大丈夫だった。だが、この先ずっと分家が分家でいる保障がない」
「……」
「そうなる前に、一族を正しい形に戻さなければならない」
右近と右京の距離が後一歩になった。
「その方法をとることを、君は迷っているね」
右京は何も言わず、目を閉じて額に手をあてた。それは、迷いなのか諦めなのか……。その場にいる全ての人間には、それが何を意味するのかわからなかった。本人すら、自分の気持ちがわからないでいる。
ずっとその格好のまま口を開かない右京に、右近は踵を返した。弥生の手をとり、今度は竜也と水樹の方へと歩みを進める。
「自分の気持ちに素直になりなさい」
右近は、竜也の肩に優しく触れてそう言った。
「全てが必然だったと、運命だったと、受け入れなさい。もう、一人で背負う事はない。もう、秘密は秘密でなくなっている」
そう言って、優しい微笑みを浮かべて右近は水樹に顔を向け、そして動かない右京に向けた。分家の存在は、その血を受け継いだ２つの一族に知られてしまったのだ。もう隠す必要はない。
「水樹も、自分に素直になるのよ。あなたは姫巫女だけど、１人の女の子なんだから」

その手をとり、弥生は水樹に微笑んだ。
「弥生様、彼女はもう素直に自分の気持ちを伝えたじゃないですか」
「あら、そうでしたわね」
庭に舞う桜のように頬を染め、弥生は着物の袖で口を隠して笑った。

わ……、私そういえばこの2人の前で竜也先輩に……

水樹は、つい口走ってしまった告白を思い出し、下を向いた。
「さて、そろそろ日が昇るね。夢の語らいはここまでにしよう」
相変わらず桜舞う空を見上げ、右近が言った。その視線を追って空を見上げると、急に意識が混濁して世界が真っ白になった。

「……朝……か」
痛み止めが切れているせいか、背中が疼いた。

あのアホ2人組め……。右京さんまで巻き込みよってからに……。

心の中でそう毒づくと、竜也はサイドボードにある痛み止めに手を伸ばした。ピリッと皮膚が引っ張られ、苦痛に顔をしかめる。
「この傷は姫巫女を守った証……か」
以前、自分が右京にふざけて言った言葉を思い出し、竜也は独白した。
遠くで、襖が開く音がする。おそらく、方向的に右京が起きたのだろう。廊下を歩く音が遠ざかっていく。右京にとっては最悪な夢を見たせいで、少しその足音が荒々しい。そんな状態で作られるであろう朝食に、竜也はひとり覚悟を決めた。

第5章　夢の終りに？

1

竜也が前線に復帰するのに、あれからひと月かかった。
季節はすでに梅雨に入ろうとしている。毎日雨が続き、空気が重い。
「あーあ、こんな雨の中緊急招集なんてついてないなぁ」
のぞみは、雨のせいですべりやすくなっている屋根に神経を割きながら叫んだ。雨音のせいで、少しの距離でも声を張らないといけない。
「せやなぁ」
同じく慎重に屋根から屋根へ移動しながら、和彦が答えた。
「竜也先輩も病み上がりなのに、こう雨ばっかやと傷痛むんちゃいます？」
とても病み上がりとは思えない程軽く屋根を飛び越えていく竜也に、のぞみは声を張った。
「ずっと寝てて体がなまってるからな。リハビリも兼ねたちょうどいい運動になって助かってるわ」
元々体を動かす事が好きな竜也は、背中の傷のせいで動けなかった一か月を取り戻すかのように、ここ最近は緊急招集を楽しんでいた。
水を得た魚。という言葉が非常によく似合う。まるで、はしゃいでいるような竜也に、和彦とのぞみは全く出る幕がない。緊急招集で、自分達が集まる意味があるのかすら疑問に思う程の張り切りぶりである。
しかし、体を動かすことによって、何かから逃げたがっているように見えるのも事実であった。
なぜなら、ここ1か月の間、右京、竜也、水樹の3人の間の空気

が何かおかしかった。自分達の知らないところで何かが起きているのはわかるのだが、当事者がこの3人となると、非常につっこみ辛い。しかも3人とも普段通りを装うとし、まるで何もなかったかのように振舞いたいという気持ちが伝わってくるのだ。聞くに聞けない。

まぁ、大方……竜也先輩と水樹の間でなんかあったんやと思うけどな……

のぞみは、竜也の治療を通して2人の距離が微妙に縮まった事を感じ取っていた。女の勘というやつだろうか。和彦には、その微妙な空気がわからないらしく、のぞみがいくらいっても「ありえへん」の一言で片づけてしまう。

まぁなぁ……。水樹のお相手は……一族外じゃないとあかんしなぁ……。現代のロミオとジュリエットっちゅーやつやな。

すでに屋根2つ分先を走っている竜也に視線を向け、のぞみは一人でうんうんとうなずいていた。

「また置いてけぼり」

ふくらました頬に両手をあてて、水樹は右京に向かって文句の言葉を投げかけていた。

「仕方がないですよ、こんな雨ですし。幸い、そこまでの妖の者でもないようですし、3人に任せて私たちは帰りを待ちましょう」

ようやく姫巫女の力を得た水樹は、再び防人の帰りを待つという立ち位置に逆戻りした事に不満をぶつける。雨続きの湿気を含んだ空気も手伝って、不快指数はかなり高い。

「雨でもさ、みんなは戦ってるのに」

「水樹様がお風邪でも召したら大変でしょう」

「私の風邪と日本の未来とどっちが大事なのよ」
「水樹様の体調がよろしくない時に、またあの3人のような上位の者が現れたらどうするのですか？　そう考えると、水樹様が自身の体をご自愛するのは日本の平和に繋がるのですよ」

右京ってば、うまいことといっちゃって。

ずっとこの調子である。
やむを得ないとはいえ、治療で2人を近づけていた事を、右京は少し後悔していた。おかげで竜也の前線復帰が格段に早くなったのだが、その分、距離も縮まってしまったように思える。
あれ以来、右京の夢には右近と弥生は出てこない。
だが、自分の夢に出てこないだけで、水樹と竜也は毎晩ああして逢瀬を続けているのかもしれない。怪我でやむを得ず肩を貸さざるを得ない状態の竜也は、あの時のように水樹の肩を抱いているのだろうか。
そう考えると、右京の頭にカッと血がのぼるのがわかった。
「ね、右京」
下世話な考えをしていた右京に、水樹の声が突き刺さった。
「は、はい」
「あのね、聞いてもいいかな……」
「何をでしょうか」
水樹は、もじもじしながら右京を見つめた。
「ずっと前、3人が共有した夢で……右近さんが右京に言ってた事が気になって」
ギクリとした。
まるで、考えていたことが漏れていたかのようなタイミングで夢の話をされ、右京は心臓が跳ねあがった。
「一族を正しい形に戻す方法って、何？」
右京の了解を得ず、水樹はまくし立てるように問い詰める。

「ねえ、右京、本当に分家を驚異に思ってるの？　竜也先輩の事、どうにかしようなんて思ってないよね？」
今にも掴みかかるような勢いで、水樹が右京に詰め寄る。全く予想もしていなかった事態に、少し混乱する。
「水樹様？」
「わからないの。考えても、わからないの」
水樹は、いつの間にか涙を流していた。両手で顔を隠し、肩を落として嗚咽を漏らす。
「右京が分家を驚異に思ってて、一族を正しい形に戻そうって事は……、まさか、竜也先輩を……、分家を消そうなんて……思ってないよね？」

ああ、そういうことか……

おそらく、水樹はその考えを口に出すのが怖いのだろう。
分家を消す。それは、竜也を消すこと。そんな一族など、なかったことにしてしまえばいい。それはつまり……
「坂上殿を……、この世から」
「やめて！」
水樹は、その先に続く言葉を聞くのを拒絶した。
「右近さんと弥生さんがいくら愛し合っていたとしても、彼らがしたことは間違っていたのかもしれない。でも、竜也先輩には何の罪もないわ！　本当なら、このまま存在を隠しているつもりだったのに！　運命に翻弄されてこうなってしまっただけなのに！　だから、竜也先輩を……、憎まないで……。お願い、右京……」
雨の音に混じって、水樹が泣く声が響く。それは、痛く、切なく、悲しい音色。大切な人を守りたいという、一途な思い。
水樹様が必要以上に坂上のそばにいたのは……、そのせいか……

自分が、水樹にとっての驚異になってしまっていた事に、右京は失笑する。竜也が動けないことをいいことに、どうにかしてしまいそうな自分から彼を守っていたつもりだったのだろう。
「大丈夫ですよ……、水樹様」
右京は、水樹の肩に手を置いてそう言った。水樹がおそるおそる顔をあげると、そこには滅多に見せないやわらかい笑みを浮かべた右京がいた。
「ほんと？」
「はい。そんな物騒な事、思いつきもしませんでしたよ」
右京は目を閉じて、短く息をはいた。
「確かに、分家を消そうとは思っていますが」
右京のその一言に、水樹の喉がヒュッと鳴った。
「ああ、勘違いしないで下さい。そういう手段はとりませんから」
そう言って、右京は水樹の頭を優しく撫でた。
「本当に？」
「はい」
「信じていい？」
「はい、信じて下さい」
「う……ううう……」
水樹は、右京がニコリと微笑んでそう言うと、安心したのか再び両手で顔を覆って泣き始めた。
「う、右京さん、何してはるんですか」
非常に嫌なタイミングで、任務を終えた3人が帰ってきた。
泣いている水樹と、それに手をのばしている右京。様々なシュチュエーションがそこから想像が可能である。
体から滴り落ちる雨水を拭かず、びしょ濡れのまま3人がこちらを見て立ち尽くしている。竜也は、何を話していたのか大抵想像がつく。しかし、残りの2人には無理な話だ。ここ最近のおかしな空気も手伝って、微妙な顔をしている。
「みんなおかえり！　無事でよかった。体が冷えちゃうから早くお

風呂であったまってきて」
乱暴に涙を拭うと、水樹はバスタオルを持って3人に駆け寄った。
「あ、ああ、おおきに」
着ていた雨具を脱ぎ、びしょ濡れになった頭を拭きながら和彦が煮え切らない声を出した。それに続いて、のぞみもバスタオルを受け取って頭をふく。

聞くなっちゅーことか

のぞみは、水樹の態度でそれを感じとる。泣いていたのがバレバレなのにもかかわらず、努めて明るく振舞う姿に、のぞみは胸がキュッと締め付けられた。本当に重い何かを隠している、そんな風に見えるのだ。それを悟られまいと、その小さな体で必至に耐えている。それが痛々しく見えた。

今はきかんといたる。せやけど、絶対そのうち話してもらうで

心でそう呟き、のぞみは水樹に礼を言って廊下を歩いていった。

第5章　夢の終りに？

2

「君も強情だね」
後ろに現れた影が、そう呟いた。
「久し振りですね」
影に向きなおり、右京は不機嫌極まりない顔で答えた。
「もう私の前には姿を見せないのかと思っていましたよ、右近さん」
明らかな敵意に、やれやれといった表情で右近は肩を竦めた。その隣に弥生の姿はない。

坂上の口ぶりから、2人はいつもセットで行動している印象があったのだが……。

「あなたの相方は水樹様のところですか？」
「いや、今日は個人的に君に会いにきただけだよ。それとも君も弥生に会いたいのかい？　右京」
まるで自分の友人にそうするかのように、右近は右京の肩をポンポンと親しみを込めて叩いた。それに対し、右京は「これ以上人が増えては困る」とでもいうように頭を強く振る。
「君とはどうも波長が合いにくいみたいだ。何度も試みてようやくまたこうして会う事が叶った。私の子孫だというのに妙な話だよ」
「波長が……？」
「竜也の方は、見せようと思っていたわけでもないのに私の記憶が勝手に流れてしまうし、君は君で全く私の呼びかけに応えようとしない。全く正反対な2人だ」
右近は、右京のまわりをゆっくりとまわりながらニコニコと笑う。
「竜也は感受性が強いんだろうね。君の場合は……少々真面目すぎ

るから、私たちとい存在を受け入れられないせいかもしれないなぁ」
「何か話があったんじゃないのか」
値踏みされているような気がして、右京は苛立ちを隠さずにそう言い放った。
「そうやってすぐ怒るところは、竜也にそっくりだね」
射るような視線に、右近は両手をあげて謝罪をする。竜也以外にこうして誰かと話しをするのが久し振りだったせいで、ついついからかいたくなってしまったらしい。
「申し訳ない」一瞬肩を竦めて右近は続ける。
「君の中ではもう答えは出てると思うんだが。なぜ、君はそうしないんだい？」
「……」
右京は、いきなり確信を突かれて押し黙る。
「そうする事に何の問題がある？　それが一番綺麗な形じゃないか」
「……」
「怖いのか？　そうすることが怖い？」
「……」
「遥亡き今、水樹の後見人は君だ。その責任を今更感じているのか？」
「……」
「君は、水樹の事を考え、一番良いと思った道をずっと歩ませてきた。君が今思っている事は、間違っていることなのかい？」
「……わからない」
ようやく、右京が口を開いた。
目を閉じ、片手を額に当てて側にあった石に腰かけた。
「まだ、それを言う勇気がない。……いや、これは……」
「嫉妬……。あるいは、娘を持った父親の心境……かな？……クッ」
堪えるはずだった空気が、右近の口からもれてしまった。そこからは、もう抑えることができず、清々しい程の大声で大笑いした。
「男系家族の君は、本来なら味わうはずのない心境なのにね。まだ

成人したばかりなのに……クックック」
「うるさいなぁ」
少し赤くなった顔を、右近はサッと横を向いて隠す。
「さて、雨もやんだ。今日は水樹も連れていってあげるといい」
「え？」
「戦いだよ。久し振りにきれいな月が見える。いいかい？　水樹を必ず連れていくんだよ」
ザワザワと、背中の産毛が逆立つ感覚がした。
「なんといったかな、ええと、今から３０分後？　北東の方角。いいね？　じゃあ、頑張って。……必ず……だ……」
右近が方角を言い始めた時、声がぼんやりと遠くなり、世界が白く染まる。
「言うだけ言って終わりですか……」
右京は、１人毒づいた。

跳ね起きると、そこは自室。
目の前の目覚まし時計を乱暴に掴むと、１時を少し回ったところだった。自分が布団に入ってから、わずかに１時間しかたっていない。
枕元の携帯から、登録してある定型文を呼び出し、一斉送信をする。
未だに夢うつつな自分の顔をピシャリと叩くと、クローゼットから普段着であるスーツを取り出した。
水樹を含めた全員が澤渡邸の庭に集合したのは、それから１０分もかからなかった。
頭上を見上げると、右近が言った通りの綺麗な弓張り月が見える。雨続きだったのが嘘のように澄んだ空気だ。
「今日は連れていってくれるの？」
「はい。晴れてますしね」
まさか、右近に言われたから連れていくとは口が裂けても言えな

い。
「今日は一緒に戦えるね、のぞみ！」
「無理したらあかんで」
うれしそうにのぞみの手を取る水樹に、その場の全員の頬が緩む。自分も戦力の1人になれることが、本当にうれしいのだろう。力が覚醒して以来、こうしてみんなに付いて行く時は、不謹慎とわかっていても、はしゃがずにはいられないようだった。
そんな水樹を見つめる竜也、そして、その竜也を睨む右京。その三角関係に気が付いているのは、のぞみだけだった。当の本人たちは無意識で、和彦はそんな事を気にする程繊細な男ではない。
「さて、参りましょう。水樹様、手を」
まだ飛ぶのに慣れていない水樹の手を取り、右京が最初に土を蹴った。3人はそれに続いて宙を舞う。
久し振りに気持ちのいい空気の中の空中散歩だった。
使命を忘れ、このまま飛び続けたい衝動に駆られる。しかし、少しずつ肌に感じる嫌な空気が「甘い考えは捨てよ」と警鐘を鳴らす。
「瘴気が濃い」
「これは、もしかしたら……」
「こないだみたいな上位の者がおるかもわからんな」
竜也はそう言うと、足を止めて印を結ぶ。
「水樹様、大丈夫ですか？」
瘴気に当てられていないかを確認するように、右京は水樹の顔を覗き込んだ。
「え？　大丈夫」
一族達には、妖の者の瘴気への耐性がある。しかし、今までがそうであったように、右京はつい水樹を過保護にしてしまう。
「右京ってば、もうそんな事を心配しなくてもいいんだよ」
水樹は、握っていた右京の手を優しく離し、2・3歩離れた。それは、自分はもう独立して歩いていけるという意思の表れのように思え、右京は少し寂しさを覚えた。

娘を持つ父親……か。

夢の中で右近に言われた言葉を反芻する。

「水樹！」

気が緩んだ一瞬だった。のぞみの叫び声と共に鈍い金属音が響いた。

「大丈夫？」

のぞみは、振り返らずにそう言った。

「うん、ありがとう」

「ええの、ええの。気にせんと！」

右京が目を離した一瞬の出来事であった。

密かにこちらに近づいていた妖の者が、水樹に飛びかかってきたのだった。狼のような姿をしたそれは、鋭い爪を立てて水樹を切り裂こうとしていた。それに気づいたのぞみが、刀でそれを受けていたのだ。

後ろ足でうまくバランスをとりつつ、妖の者はのぞみに全体重をかけてくる。力に押され、のぞみが片ひざをついた。

「のぞみ殿！」

右京の左肩に熱がこもり、服の下で紋章が輝きはじめる。その先の手のひらに熱と光が集まり、グッと押し出すようにそれを妖の者へと投げた。

光が爆ぜ、妖の者の側面が抉れた。うなるような叫び声をあげ、力が緩んだ一瞬に、のぞみの刀がその首を落とした。

後には何も残らない。ただ、灰が風に運ばれていくのみである。

「水樹様、申し訳ありません」

右京は、尻もちをついている水樹に手を差し伸べて頭を下げた。

「ううん、気にしないで。ここはそういう場所なんだもの」

右京の手をとりながら水樹は不敵に笑う。自分が戦場にいるという自覚はある、と、意志表示をするように強くその手を握る。

「さて、妖の者御一行様がご到着されたみたいやで」
竜也は、いつの間にか握っていた刀をひと振りして、構えた。その視線の先に見つめるものは、狼の群れ。赤く光る双眸をこちらに向け、口からはだらしなく舌がのびでいる。まるで、今から味わう御馳走の前の舌舐めずりのようである。
見渡せば、遠くの屋根にも狼が見える。正確な数はわからないが、軽く５０匹以上はいるだろう。その全てが、低く喉を鳴らしている。それはまるで地響きのようであった。
「竜也殿は左へ、のぞみ殿は右。私は正面を」
「了解」
竜也とのぞみの声がハモった。
「和彦は水樹様の側に。水樹様は」
「私は祝詞ね」水樹は、右京の言葉を遮ってそう言った。
「はい。頼みましたよ」
振り返り、微笑みながらそう言うと、右京はすぐに正面を向きなおして口を結ぶ。空気が一瞬にして張りつめた。
３人は、同時に足を蹴ってその場から四散した。
狼の群れに到達する前に、右京は威嚇するように屋根の上に火柱をあげる。
右京は道具を使う2人と違い、自らのエネルギーを魔法のように繰り出す、超能力のような力を持っていた。
青白い光を纏いながら、右京は火柱の中へ飛び込み、再び両手からエネルギー弾を飛ばして妖の者達を威嚇する。動物は炎を怖がる。しかし、彼らは妖の者であって動物ではない。飛んでくる火の球を軽快に避け、咆哮しながら右京へと飛びかかる。
正面だけではない。右からも左からも妖の者は容赦なく飛びかかってくる。自ら纏っている光を、ムチのような長くしなる形状に変え、とびかかってきた妖の者達を真一文字に切り裂く。しかし、それで終わりではない。織田の鉄砲隊よろしく、すぐに次が襲い掛かってくる。

もう一度ムチをしならせ、空いた手でエネルギー弾を飛ばす。肉を裂き、抉り、右京は着実に妖の者の数を減らしていった。
息すら乱さず、右京はあっという間に１０匹を片付けた。これが現役護り手の力である。
小さく息を吐いて、水樹の方へ顔を向けて呟いた。
「水樹様、ありがとうございます」

第5章　夢の終りに？

3

3人が戦闘を始めてからすぐ、水樹は両手を胸の前で組み、静かに目を閉じていた。

風に乗って、小さな歌のようなものが和彦の耳に届く。

それは、結界内に姫巫女の力を満たすことによって、一時的に妖の者の動きを鈍らせる事ができる祝詞であった。

誰に教えてもらうわけでもない。覚醒すると同時に、連綿と続く姫巫女の血が教えてくれるのだ。誰かに習い、暗記するわけでもない。ただ、本能のままに詠えばよい。それが祝詞となる。

水樹が身にまとっているような、柔らかい空気がすぐに結界内に充満した。そして、護り手と防人は力をつけ、逆に妖の者は動きが鈍る。

右京が、軽々と妖の者をせん滅していたのは、そのせいである。そうでなくても下級の妖の者なら、簡単に始末できる。ただ、負担は断然軽い。本来なら十の力を使うところを、五の力ですむのだ。

姫巫女の力は、こういう補助的なものが多かった。黒龍や銀に使った浄化の祝詞は、効果は大きいが姫巫女への負担が大きい。祝詞も長く、その間無防備になることを考えたら、下級の妖の者の退治は護り手たちに任せた方が断然早い。浄化を使用するのは、上位の者が現れた時のみであった。

遠くで、3人がそれぞれ戦っているのが見える。

水樹は、それを見ながら心のままに詠う。その横で、何もすることがない和彦が、今度はいじけていた。

「本間、することがないっちゅーんは酷やなぁ」

「でしょう！？」

独り言のつもりでつぶやいたソレを、水樹は地獄耳で捉える。

治癒能力を持つ防人も非常に重要である。しかし、戦闘中は全くやることがなく、今までの水樹と同じく守られいるだけなのだ。
「和彦は、近くでみんなが戦っているのを見ていたじゃない。私は、家でずーっと待ちぼうけだったのよ？　ケガはしていないかな？　どんな妖の者なんだろう？　そんなことばっかり考えて待ってたんだから」
水樹は、ぷうっと頬をふくらませながらそう言った。そのしぐさが可愛くて、和彦は水樹の頭を撫でた。
「そうやったなぁ。でも姫巫女って姫がつくだけあって、大切にせなあかんっちゅーことや。みんなに守られてこその姫巫女やで」
「私は、みんなと一緒に戦いたかったの！　自分だけ安全なところで帰りを待ってるなんて……」
そこで、水樹が目をそっと伏せた。月の光りが、長いまつ毛の影を落とす。
「でも、私が戦場にきちゃったから……竜也先輩はあんな大けがしちゃったんだよね」
「あれは……。ああなる運命やったって先輩も言ってはったやろ？　むしろ、あれがなかったら、あの場にいた全員が大けがしたかもしれへんし、水樹も覚醒せん……かっ……んん」
和彦は、消え入るように言葉を濁した。
そして、嫌な沈黙が続く。この一件に関しては、触れない事が暗黙の了解だったのだが、話の流れでつい触れてしまった。和彦は、流れに乗った自分を呪う。
「あ」
しばらくして、沈黙を破ったのは水樹だった。
その声につられて顔をあげると、狼の群れを片付けた3人がこちらに戻ってくるところであった。
見てるだけの和彦は、ようやく仕事が回ってきた。
ところどころ切り傷がある3人に手を翳し、治癒術を施す。
「かなりの量だったな」

右京は、額にかかった髪をかきあげながら、溜息混じりにそう言った。
「でも、水樹のおかげでだいぶ楽に片付いたわ」
のぞみは、水樹にウィンクしながらそう言った。水樹は、照れくさそうに口をすぼめてもじもじとした。
みんなは、そんなやりとりを微笑ましく眺めながら、今夜の仕事が終わった事にほっと一息ついていた。
その時、右京の背筋がぞわりとした。下から何かが這い上がってくるような嫌な感覚。寒気と同時に脳裏にフラッシュバックする映像。身震いする程の強い瘴気に、その場にいた全員が腕を体に巻きつけた。
「こいつらの親玉ってとこか」
竜也はチッと舌打ちし、再び刀をその手に握る。それを合図に、のぞみも刀を手にして前方を睨みつけた。
「……坂上、お前はここで水樹様と一緒にいろ」
そう言って、右京は刀を持った竜也の左手を制した。
「右京さん？」
竜也でなくとも、その場にいた全員が疑問に思っただろう。なぜ、ここにきて竜也に水樹をまかせるのか。
上位の妖の者が出現したということは、水樹の浄化の祝詞が必要となる。つまり、無防備になる水樹をそばで誰かが守らなければならないということだ。それは、本来、護り手の役目である。防人が妖の者を牽制し、姫巫女が浄化の祝詞を謡う。そして、それを護り手が守る。それが一番綺麗な形だ。
全員がポカンとしていると、右京が竜也のリストバンドを掴んだ。
「京都御苑の一件以来、まだ水樹様は通常の状態で浄化の祝詞をあげたことがありません。姫巫女の力が覚醒したとはいえ、まだ不安定なところも正直あります」
その言葉に、水樹は顔に出さずとも一瞬不機嫌になったように見えた。

「だから坂上殿には水樹様のそばにいてほしいんです」
右京は、そこで意を決したように息をのんだ。
「防人としてではない」そう言いながら、竜也のリストバンドを勢いよくはずした。
はずしたところを見たことがない和彦とのぞみは、好奇心が抑えきれず、のぞきこむようにそれを見た。しかし、今は何の印もない。ただの手首がそこにはある。
「護り手としてだ」
右京のその一言に、空気が凍った。
「なんやて？」
のぞみは、右京の発した言葉が間違っていたのではないか。と、もう一度聞きなおす。
「右京さん、今なんて言いはったん？」
「坂上殿は、護り手としてここに残ってもらう」
右京は再び言った。
「う、右京……」
「頼みましたよ……竜也殿」
「ちょ、右京さん？　護り手ってどういう」
「のぞみ、話は後だ。とりあえず行くぞ」
右京は、のぞみの手をひっぱり、有無を言わさずその場から引きずっていく。
その様子をポカーンと口をあけて眺めていた和彦は、ハッと我に帰り、すぐそこにある竜也の手首に視線を落とす。
それに気がついた竜也は、バツが悪そうに左手をそこに置いて和彦の視線から遮った。今はまだ何もないが、なんとなく、ずっと秘密にしてきた部分を見られているのが恥ずかしかった。
「あー……、まぁ、詳しい話は後から右京さんからあるんちゃうかなー」
竜也はそう言うと、ポリポリと頭をかきながら咳ばらいをする。
「今はほら。来よったで」

そう言って視線を向けた先には、遠くに光る琥珀色の双眸。恐らく、狼たちを統べていた上位の妖の者だろう。
上位の者の服装は、それと決まっているのだろうか。先の3人と同じく、着流しの優男がそこにはいた。
肩まで伸びた、白髪にも見える銀色の髪が風に揺れている。それは、狼の尾を思わせる。そして、獣を思わせるような琥珀色の瞳。九尾の狐よろしく、何百年も生きた狼が妖となり、さらに時を経て上位の者になったのだろうか。
かなりの距離で、妖の者と右京達は睨みあう。すでに、戦いははじまっているのだ。
「結界を張る」
そう言って再び刀を出すと、竜也は地面に大きな印を書き始めた。と同時に、竜也の右手首が光り、それが全身を覆う。

右京さんと同じ……護り手の……印が！

和彦は、目の前の信じられない光景に目を見開いた。先ほど右京が言った意味はわかったが、しかし、受け入れることができない。
「和彦、もっとこっちに来ないと」
水樹は、口をあけて動こうとしない和彦の手をとり、自分の側へと無理矢理ひっぱった。
その間に印を書き終わった竜也が、水樹の手をとる。
「水樹、はよ、浄化の祝詞を……」
「うん、そうだね」
2人は、和彦がそこにいるのを忘れて少しの間そのまま見つめあった。そして、竜也はその手を静かに離そうとする。水樹は、竜也の手が離れる前に強く掴み、小さく微笑んだ。
「竜也先輩」
「なんや」
和彦がいることをようやく思い出した竜也は、ゴホンと咳ばらい

をして水樹から視線をはずした。しかし、運悪くその視線の先には和彦がおり、２人は目が合う羽目になってしまった。
「私、竜也先輩と一緒なら、何でもできる気がする」
「そ、そうか」
竜也が手を振りほどこうとしているにも関わらず、水樹はいっそう手に力を込めた。もうどこを見ていいのかよくわからない竜也は、ただ地面を見つめるだけである。
「だから、見ててね。そして、そばで私を守っていて」
水樹のその最後の一言に、竜也はビクリと体を震わせた。ゆっくりと、竜也は水樹へと顔を向ける。
不安なのだ。
右京の言った通り、トランス状態であげた浄化の祝詞の事は、水樹はぼんやりとしか記憶にない。どうすればいいのかはわかる。しかし、力の解放の仕方やコントロールするための集中力、なによりも自分に本当にできるのか、それが一番の不安であった。
「……お前には……」
竜也は、少し考えた後に水樹に言った。
「お前には弥生がいる」
竜也がそう言うと、まわりの空気が優しく揺れたような気がした。
「弥生がいるなら、右近もいるだろう。お前の祝詞を待って、右京やのぞみが戦っている。和彦もここにいる。お前はひとりじゃない。お前にはたくさんの人がいる。何も不安なことはない。安心しろ。お前は俺が守る。だから、頼んだぞ」
竜也はそうまくし立てるように言うと、水樹の束縛から離れて守護陣を発動させた。
視界が一瞬真っ白になり、水樹はギュッと目をつむった。まぶたの裏の光が消えた頃、ようやく目をあけると、竜也の姿は守護陣の外にあった。
こちらに背を向けて刀を構える竜也の姿を、２人はしばらく見つめていた。

「水樹……。俺は竜也先輩みたいにカッコイイことは言えんし、守る力もないけど、水樹が浄化の祝詞をあげるとこ、ばっちり見守ったるからな！」
和彦は、水樹の頭を優しく撫でた。
「水樹が思う通りにやったらええ」
「うん」
優しく笑う和彦にこたえるように、水樹も精一杯の笑顔を返した。

第5章　夢の終りに？

4

「あかん……なんやコイツ」
のぞみは、肩で息をしながら刀を杖のようにして膝をついた。
２人が戦っている妖の者は、空牙という名前だった。想像した通り、５００年生き、妖怪へと変化した狼である。元が狼だけあり、とても素早く、力も強い。２対１とはいえ、こちらが明らかに不利であった。
「のぞみ殿、大丈夫ですか？」
同じく肩で息をした右京が、空牙から視線をはずさずに言った。
当の空牙は、そんな２人を無視して遠くに見える水樹の姿を睨みながら低く唸っている。薄っすらとあけたその口からは、鋭い牙が２本見えている。
「ひ……め……みこ……！」
空牙は膝を思いきり折り、そこから一気に跳躍した。
２人を軽く飛び越えていく空牙を、右京は手から光の鞭のようなものを出し、その右足を絡めとった。
邪魔をされた空牙は、空気が震える程の咆哮をすると、するどい爪でその鞭を引き裂こうと手を振りおろした。しかし、右京のエネルギーでできたそれは、簡単には引き裂かれない。徐々にその長さを縮め、空牙を地におろそうとしている。
「こざかしい……、防人風情が！」
右京は、苦笑いした。
おそらく、竜也があちらにいるので、右京は防人だと思ったのだろう。
自分が発しているオーラが護り手のそれに見えないのか。と、右京は一瞬へこみそうになるが、今は気にしないことにした。

空牙の体が地に着こうかとしている時、右京はあいている手からもう1本同じ光の鞭を繰り出し、空牙の体を縛った。
「くっ」
「のぞみ殿！」
右京は、ギリギリとその締め付けを強めながら、のぞみの名を呼んだ。
のぞみは、呼ばれると同時に刀を振りかざして空牙へと走った。そして、低い体制から、その胴をひとなぎする！　……はずだった。
「うっ……」
「くっ……」
逆に、右京とのぞみは吹き飛ばされる。
空牙は、のぞみのその刀が体に触れるか触れないかの瞬間、威嚇するように大きく咆哮した。体全身から瘴気が発せられ、それが突風のように周囲に広がっていく。その風圧に、2人は吹き飛ばされてしまったのだ。
右京の束縛から自由になった空牙は、ニヤリと笑うと近くにいたのぞみを見おろした。
「残念」
人を見下したような冷酷な笑みを浮かべ、空牙はのぞみの腹を力任せに蹴飛ばした。
「ガッ……ゴホッ」
空牙の足がのぞみの柔らかい肌に食い込み、胃を圧迫する。そして、ふわりとその体が宙に浮くぐらいの衝撃を与え、さらに蹴り飛ばす。
のぞみは耐え切れず、胃液をぶちまけた。
「のぞみ殿！！」
右京は、衝撃で強打した頭を押さえながら、のぞみの名を呼ぶ。軽く脳震盪を起こしていたらしく、まだ世界が揺れている。しかし、これ以上彼女を傷つけるわけにはいかない。防人とはいえ、彼女は女の子なのだ。

「ふん」
時折痙攣したようにピクリと動くものの、意識を失ったのぞみに興味が失せたのか、空牙は右京へと向きなおった。
「貴様！」
右京は、そう叫ぶと空牙へと走り出した。まだ視界は揺れる。しかし、やらなければならない。
ハンドボール程の大きさのエネルギー弾を、空牙に向けて何発も投げつける。しかし、まるで舞を踊るかのように、空牙は軽々とそれを避ける。そして、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべている。その時、視界の端に動くものが見えた。空牙の肩ごしに、こちらに向かってこようとしている竜也の姿が見える。
坂上……！　水樹様をお守りするように言ったのに！
右京は、軽く舌うちした。竜也がこちらに向かってきていることを気どられないよう、こちらに注意を向けさせるよう努めた。
「私はいいから。あちらへ行って！」
水樹は、浄化の祝詞を唱えつつそう叫んだ。
のぞみが動かなくなったのが遠くに見えた。水樹は、体の下の方から嫌な予感が鳥肌となって頭の先まで一気に駆け抜けた。
一瞬、頭が真っ白になり、祝詞がとまりそうになった。しかし、まだそうと決まったわけではない。右京も戦っている。彼らのためにも、自分は浄化の祝詞をあげなければならない。
「私は大丈夫。だから行って、竜也」
水樹は、自分の力を極限に引き出すための集中力を欠かさず、祝詞の合間に竜也に告げる。
右京が、フラフラとおぼつかない足取りで走りだす。そんな彼を見るのは初めてだった。いつもクールで、強くて、冷静な姿しかみたことがなかった。なのに、その右京がフラフラになりながらも、

戦おうとしている。
竜也は言った。私にはたくさんの人がいる。そのたくさんの人のうちの誰かが、自分のせいで傷つくのは見たくない。今まで、みんなに支えられてきた。今度は私がみんなを守りたい。だから、叫ぶ。
「早く！！」
竜也はその言葉に促され、右京たちの方へ足を一歩すすめる。
「竜也先輩！　早くいったって下さい！」
守護陣のせいでこの場から動けないでいる和彦が、その壁を叩きながら言った。
傷ついた彼らを治癒できるのは自分しかいない。なのに、それをすることができない。届かない。そのもどかしさが、竜也に伝わる。
それが、竜也の足を走らせた。
「わかった！」
そして、振り返ることなく竜也は駆けていく。
「チッ……竜也先輩め……。こないな頑丈な守護陣はりやがって」
こぶしを固く握り、和彦は再び壁を殴る。何度も打ちつけたそのこぶしには血が滲んでいる。
水樹は、その姿に報いる為にも、祝詞をあげるべくその瞳をそっと閉じ、集中した。
自分の内側から、泉のように湧き出てくるエネルギーを感じる。それが血液のように全身にかけめぐり、光となって体から吹き出てくる。
ゆっくりと、確実に……。静かにコップに水をそそぐようなイメージを思い浮かべる。丁寧に、決して一気に蛇口をひねってはいけない。コップから水をこぼさないように、しかし、表面張力でコップから水が盛り上がるぐらいたくさんの力を自分の内側に満たさなければいけない。
水樹の額にうっすらと汗が滲む。
まぶたの裏に、倒れたのぞみの姿が映った。
考えてはいけない。気を乱してはいけない。

しかし、そう思えば思う程、どんどん波紋が広がり、コップから水が溢れそうになってしまう。
その時、空気がユラリと動いた。
「大丈夫。落ち着いて」

弥生……さん？

水樹はその声に、目をあけようとする。
「目をあけてはダメ。そのまま集中するの」
優しい響きに、水樹の乱れていた心がスゥーと落ち着いていった。
「大丈夫。竜也が言っていた通り、あなたにはたくさんの人がついてる。安心して。あなたならできるわ。なんたって、私の遠い孫なんですもの」
成人もまだしていないような姿をした弥生にそう言われ、水樹は少し口元に笑みをこぼした。
それがいい影響を及ぼしたのか、水樹はうまくリラックスができた。そして、一気にその力が体中に廻った。
力の解放とコントロールのコツが掴めた。
「さあ、その力を以て祝詞をあげなさい。そして、あの者を討つのです」
聞いたことのないような凛とした声で、弥生が言った。
体の奥底から力が溢れてくる。

あの時と同じだ……

水樹は、京都御苑でトランス状態になった時のような力を感じた。まるで、火山からあふれ出るマグマのように熱い何かが、体を駆け巡っていく。激しく、しかし確実に体全体に広がっていく。自然と口が開き、そのエネルギーを外へ出すかのように、祝詞が口からこぼれ落ちてくる。

水樹の周りに光の柱があがった。

「くそおおお！！　姫巫女！！」

水樹が祝詞を唱えだすと、空牙は苦しそうに頭をかかえて天に咆哮した。

竜也は、右京と空牙を囲むように立っていた。護り手2人がかりですら、空牙には歯が立たなかった。

スピードが違いすぎた。そのせいで、2人は空牙に翻弄されていた。

ようやく、浄化の祝詞を唱える事ができる力のコントロールを得る事ができたのだ。今、空牙にあちらへ行かれてはいけない。

竜也は、空牙の前に立ちふさがるように両手を広げた。

「ここから先へ行かせるわけにはいかない」

空牙を睨みつけながら、竜也は静かにそう言った。

「おのれええ！！　そこをどけ！！」

空牙の咆哮が、そのまま風圧となって竜也を襲った。

耳元で空が裂けるような音がし、体が後ろへ倒れそうになるのを、必死でこらえる。

目で追っていては追い付かない……。ここは不本意であるが……

竜也は、目を閉じた。

格闘漫画にありがちな「目で追うのではなく、感じる」事を実行しようとしいた。幸い、空牙は瘴気を垂れ流している。おかげで、視界から消えてもどこにいるのかはわかった。

右京は、竜也が空牙を感じやすいように自分の気配を絶った。そして、ゆっくりと空牙との距離を縮めてプレッシャをかけていく。

その時、背後に水樹の力を感じた。それは大きく膨れ上がり、結界の中を満たしていく。

空牙が動いた。瘴気が揺れた。それが流れていく方へと意識を向ける。だが、うまくそれを捉えることができない。やはり、スピー

ドが早すぎて翻弄されるだけなのだろうか。
「力を貸そう。私たちの未来のためにも……ね」
右近の声が耳元で聞こえた。
「未来視にはこういう使い方もあるんだよ」
竜也と右京の脳裏に、空牙の動きが映った。辛そうに頭を抱えながらも、水樹へと走っていこうとしいてる姿が、はっきりと視える。
「さあ、後は君たちにまかせたよ」
そう言って、右近の声が風に消えた。
一瞬呆けてしまっていた右京だったが、すぐに我に返り、走り出そうとしている空牙の姿を捉えた。
「坂上！！」叫びながら、右京は今はまだ何もない空間に鞭を伸ばした。
竜也は、その声に我に返り、刀を握った。
視えた通りなら、鞭がその場に到達する頃には空牙がそこにいる。緊張の一瞬だった。これを逃したら、空牙が水樹まで辿りついてしまう。
右京の鞭が空牙を……

とらえた！！

その腕を絡めとり、動きをとめた。瞬間、すでに竜也の手から離れていた刀が。空牙の心臓へ突き刺さる。
「う……あああああああ！！！！！」
あとは、一瞬だった。
水樹の力が最大まで膨れ上がり、その場い縫いとめられていた空牙は煙となって夜の空に消えた。浄化の祝詞によって、あれだけ苦戦を強いられた空牙は、一瞬にして消えてしまった。
「のぞみ殿！」
右京は、はじかれたように倒れたのぞみへと駆けていく。竜也もそれに続こうとした時、遠くからこもった叫び声が聞こえてきた。

自分が張った守護陣のせいで動けないでいる2人が口ぐちに「出せ！」と騒いでいる。苦笑いしてその守護陣を解くと、和彦が一番にかけてきた。
「のぞみ！！」
右京に抱きかかえられ、ぐったりとしているのぞみを和彦が覗き込んだ。
「血を吐いていないようなので、内蔵はおそらく大丈夫でしょう。蹴られた外傷はあるようです……。和彦殿、頼めますか？」
和彦は、片膝をついてのぞみの腹部に手を翳す。空牙に蹴られて汚れてしまった部分に、優しい光が広がっていく。
「う……ん」
すぐに、のぞみが目を覚ました。
「のぞみ、無事やったか！」
「のぞみ！」
水樹も傍に駆け寄り、のぞみの手を握る。
「さて、とりあえず屋敷に戻りましょう」
右京は、疲れ切った顔をしているみんなにそう提案した。

第5章　夢の終りに？

5

「分家？　護り手の？」
屋敷に着いてすぐ、のぞみが右京の言っていた意味を言及しはじめた。あれだけぐったりしていたのが嘘のようにまくしたてるのぞみに、右京は呆れた顔で竜也に話すように睨みつける。
そして、竜也は2人に全てを話した。
「じゃあ、達弥先輩と竜也先輩は……」
「赤の他人や。似てないやろ？」
アホか。と言わんばかりに、竜也はフンと鼻で息を吐いた。
「そんなん、双子って言われたら、似てないんやったら二卵性なんやろな、とか思うやん！」
のぞみは、自分の頭をかきむしりながら悔しそうにそう言った。
「え？　で、どないするの？　それやったら護り手一族が2つ存在することになるやん？　ええの？　それって」
のぞみが不思議そうに竜也と右京の2人を交互に見る。
その一言に、右京と水樹はビクリと体を反応させる。
「なに？　その反応。やっぱなんかあるん？　どないするの？」
大阪のおばちゃんよろしく、のぞみは水樹と右京の顔を覗き込むように見る。
「右京、結局どうするつもりなの？」
のぞみに便乗して、水樹も右京に問い詰めるように言う。しかし、その顔は不安でいっぱいだった。
少し考えた後、観念したように長い溜息を吐くと、みんなの方へ向き直った。
「私は、分家を消して本来の形に戻そうと思っています」
水樹は、その言葉に体を震わせた。だが、右京は言っていた。消

すとは、決してネガティブな意味ではないのだ。水樹は、一度目を瞑って心を落ち着かせるために深呼吸をした。
それを見て、右京は続けて言う。
「竜也殿は、澤渡と小早川両方の血を持っています。小早川は本家である私が継ぎます」
右京はそこで言葉をきる。
「となえば、竜也殿には澤渡に入ってもらうしかないですよね」
「え？」
全員の声がハモった。
「えええ！？　それってそれって！！」
いち早く意味がわかったのぞみは、興奮しながら隣にいた和彦の背中をバシバシと力の限り叩きまくった。
「いた！　いたい！　いたい！！！」
和彦は、考えをめぐらせる前にのぞみの襲撃を受け、意味がわからないまま痛みを感じていた。
「右京……さん……」
竜也は、口をあんぐりとあけて右京を見つめた。水樹は、まだ意味がわかっていないようで、1人でぼんやりとしている。
「水樹様、嫌かもしれませんが、これも澤渡のためです」
「え……？」
まだ意味がわからない水樹に、のぞみが小さな声で言った。
「水樹の旦那様は竜也先輩らしいわ」
「旦那……さま？」
キョトンとしていた水樹の目が、どんどん大きくなっていく。
「えええええ！？」
そこで聞こえたのは、水樹ではなく和彦のでかい声だった。
「あんたはうるさいなあ！　なんで水樹じゃなくてあんたが驚くんよ！」
「いやだって、えええ？　ほんまですか？　右京さん！　正気ですか！？」

「……正気ですよ」
右京は、少しムッとして答えた。
「色々考えました。……でも、知ってしまったからには分家の存在を許すわけにはいきません。こうするのが一番綺麗な形だと思いました……。水樹様、勝手だとは思いますが……。どうか一族のためです、何卒」
右京は、水樹へと向きなおり、深々と頭を下げた。
自分が当事者であるのに、全く状況が把握しきれていない水樹は、困惑して右京を眺めることしかできなかった。
「とりあえず、状況がよくつかめていないようですね。少し落ち着かれてからまたお話いたしましょう」
右京は、そう言うと水樹と竜也2人分のお茶を淹れなおして席をたった。
「和彦、のぞみ」
小さくそう言うと、2人は右京に続いて部屋をあとにする。のぞみは、未練たっぷりに襖に張り付いていたが、和彦がそれを引きずるように奥へと連れていった。
その場に残された2人は、どうしていいかわからずに目の前の湯のみを眺めていた。
「なあ、水樹……」
竜也は、湯のみを見つめたまま呟いた。
「うん？」
「右近は、最期にこうなる未来を視てたんやな」
独り言のように、竜也は天井を仰いでそう言った。
「右近と弥生が果たせなかった夢を、俺とお前に託すと言った。だがな、俺は誰かに夢託されて、その通りに生きるんは、嫌やった……。誰かが敷いたレールの上ずっと走らされてるなんて、冗談やない。そう思ててん」
机の上に置いた手をギュッと握り、竜也は溜息を吐いた。
「水樹」

静かに独白した竜也は、水樹に向きなおってその名を呼んだ。
「はい」
そのトーンにあわせて、水樹も体をかたくした。
「前に、廊下で、俺が一族やないんやったら好きでいてもいいか？
って聞いたことあったよな」
「あ……え？　う……うん」
水樹は、つい勢いでいってしまった告白を思い出して顔を赤らめた。あわてる水樹と対照的に、竜也はそれを静かに眺める。
「正直、うれしかってん」
「……」水樹は何も言えずに竜也を見つめ返した。
「ずっと小さい頃から右近の夢見て、達弥が怪我して、俺が表舞台に立つことになって……。水樹に出会った」
竜也は思い出すように目を細めた。
「もう、そん時から……。俺の中には水樹がおってん」
水樹の瞳から一筋涙がこぼれ落ちた。一度落ちると、後はもう止めることはできない。一筋、また一筋と涙の跡が頬にできる。
「姫巫女の力がなくて、それをコンプレックスに思ってて、それでも一生懸命な水樹が、ずっと……、好きやった」
竜也は、小さく息を吐いて立ち上がった。
「ずっと冷たくしてたんは、その気持ちから逃げてたせいや。冷たくして、嫌われてしまえば楽やと思った。水樹は姫巫女。俺は、本来表に出てくるはずのなかった人間。そんな俺が水樹に恋しているなんて、あかんやろ？」
「先輩……」
水樹は、自分の目の前まで来た竜也を見上げた。
「けしかけてくる右近が、ほんまにうっとおしかった。アイツずっと視た視たゆうてたけど、あまりにも信憑性が薄いねん。あるわけないやん。俺と水樹の関係を、右京が許すはずないと思った。でも、アイツの言ってたことはホンマやった」
そこまで言うと、水樹の頭に優しく手をのせて竜也はそこに座っ

た。水樹の顔を覗き込み、優しい顔で最後の一言を言う。
「好きやで、水樹。晴れて公認や。正直に言うわ」
竜也は、そう言うと水樹を優しく抱きしめた。ふわりと竜也のぬくもりが水樹に伝わり、どんどん涙が溢れ出てきた。離したらすり抜けてしまいそうで、水樹は竜也にしがみついた。落ちてしまわないように、離れていかないように、２人はきつく抱きしめあう。お互いを感じるように、ずっと。
「竜也先輩……。私……、先輩を好きでいていい……？」
「ええよ。誰もなんも文句言わへん」
「竜也先輩、う……うううう」
少し体を離し、竜也は水樹の顔をのぞく。そしてその涙を拭うと、頬に優しくキスをした。
「もう先輩って呼ばんくてもええで」
「りゅ……竜也」
水樹がそう言うと、みたこともないような満面の笑みで竜也は頷いた。その顔を見て、水樹はさらに泣き出す。
「なんやんね！　人の笑顔見て泣き出すとは！」
竜也は、水樹の両頬をつまんで引っ張った。
「だって、そんな顔見たことないから」
「これからはいっぱい見れるやろ」
竜也が、もう一度笑う。もう、何もしがらみはない。自分をさらけ出しても良いのだ。自分の気持ちに正直になっても誰にも咎められることはない。ずっと胸の奥底にしまいこんでいた感情が、せきをきったように溢れ出していた。
「竜也、なんかキャラが違う」
「せやな、俺もそう思うわ。自分で自分が気持ち悪いわ」
「あはは、でもうれしい。これからずっと一緒だね」
水樹もそう言って笑う。竜也も笑う。
２人に見つからないように、弥生と右近も笑っていた。そして、柔らかい光となって水樹たちを照らした。

「右京さん、あんた頑張ったわ」
そう言って、肩を落として縁側に座っている右京の肩をのぞみが叩いた。その反対側から和彦も肩を叩く。
「正直、そうくるとは思いませんでしたよ」
「私もです……」
竜也と水樹たちとは違い、右京はものすごく沈んだ声を出した。
「この決心が着くまで、時間がかかりました……」
「そ、そうなんやー……」
のぞみは、今まで見たことがないぐらい暗い声でボソボソと言う右京に少し体を離す。

右京さん、あんたまだ決心ついとらんで……

そう言いたい気持ちをグッとのぞみは抑える。
「右京さん、全然決心ついとらんちゃいます？　言った後でそんな落ち込んじゃって……」
空気の読めないバカが1人。
和彦は、ヘラヘラと笑いながら右京に言う。
「このドアホ！！」
のぞみは、和彦を怒鳴りつけて頭をはたいた。
「いて！　何すんねん！」
「うるさい！　空気読め！　このアホ！」
再び頭を叩こうと手を振り上げたのぞみを見て、和彦は廊下を走って逃げだした。ドタドタというううるさい音と共に、のぞみの叫ぶ声が遠くなっていく。ぼんやりとそれを聞きながら、右京は再び長い溜息をはいて肩を落とした。
「本当、よく頑張ったと思うよ」
目の前に、草履を履いた足が見えた。顔を上げると、予想通りの姿が見える。

「あなたですか。……あの時、水樹様を連れていけといったのは、こうなるための準備だったんですね」
右京は、力なく右近を睨みつけた。恨めしそうな顔に、右近は苦笑いして背を向けた。
「きっかけがないと、君は行動にうつしてくれなさそうだったからね」
「全てがあなたの手によって転がされていたような気がします」
「気がするんじゃないよ。そうしていたんだ、私が」
右近は、悪びれることなくそう言った。
「私には、全て視えていた。過去も未来も。全てね。だから、そうなるように動いただけだよ。私は、背中を押しただけ。後はみんな自分で考えて行動した。その結果、私の視た通りになった。それだけだよ」
「決められた運命なんて……」
「これは、君が選んだ運命。あの時、水樹を連れていかない選択もあった。竜也を護り手として残らせない選択もあった。でも、そうしなかったのは君だ」
「あの時、竜也が護り手として残るのが視えた……だから……」
右京は、額に手を当てて溜息を吐いた。
「それもあなたが視せたものだったんですか……」
「さあ、どうだろう」
右近はそう言って、まるで女の子がするようにくるくると回った。自分の思い通りの未来を勝ち取った事が本当にうれしいらしい。自分の気持ちを沈めておいて、ウキウキしている右近を見て、右京はますます落ち込んでいく。
「ここからの未来は私も知らない」
右近は、空を見上げてそう言った。
「長い長い……気が遠くなる程の時を経て、私の……私たちの悲願は達成された」
右近がそう言うと、いつの間にか弥生がその隣にいた。鮮やかな

十二単が、葉だけになった桜の木を背に浮き出ているようだった。
儚く美しい空気が、水樹のそれと重なった。
「私たちが願ったせいで、あなたを苦しめてしまってごめんなさい」
弥生は、本当に申し訳なさそうに頭を下げた。しかし、やはりどこか満足そうである。それが顔に出ているのがわかり、右京は再び深い溜息を吐いた。
「さっきから君はそればかりだな」
「他にどうしろと」
「もう少し見方を変えないと」右近は、人差し指を立ててそう言った。
「これから、竜也はこの澤渡家にはいる。そして、君は水樹の後見人だ。後見人として、水樹の旦那となる竜也をしつける権利が君にはある」
袖で小さな口を隠しながら、弥生は「まあ」といたずらっぽく微笑んだ。
右近の言葉を口の中でもごもごと反芻した右京は、その目に輝きを取り戻していく。嫌な意味でのやる気が、彼に湧き出てきた。キラーンという音が聞こえそうなぐらいニヤリと笑うと、右京は廊下を静かに歩いていった。
これから訪れる不幸を知らず、竜也は水樹と愛を語らっている。
今日がスタートとなった2人の未来は、前途多難だ。

第5章　夢の終りに？（後書き）

終わりがなんとも尻切れトンボでした。
直す気力がないのでそのまま投下。
やはり、内容がチープでした。良い思い出でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2492j/

月下の姫巫女

2010年10月8日13時21分発行